# 大智度論和訳（一）

中祖一誠
諏訪義純
大野栄人
吉田道興

凡例

一、テキストは『大正新脩大蔵経』第二十五巻所収本を用いた。（景印高麗大蔵経」（新文豊公司刊）によって※を付して訂したものもある。）

一、上段には原文を掲げ、下段には訳文を記した。

一、上段の原文は、訳者の見解によって段落をつけ、それぞれの頭初に〔歸敬偈〕の如く呼称を付した。

一、訳文において、原文の意味を補う必要がある時は（　）を用い、語句の意味を補う時は、その語句の下に〔　〕を用いた。

一、訳文において、経・論などを引用した時、および問答などには「　」を用いた。

一、重要と思われる語句にはサンスクリット語を付記したが、この作業にはラモット氏の仏訳（Le Traité de la Grande Vertu de Sagesse de Nāgārjuna (MAHĀPRAJÑĀPĀRAMITĀŚĀSTRA) par ÉTIENNE LAMOTTE) 1949 および平川彰、平井俊英、吉津宜英、袴谷憲昭、高橋壮共著『倶舎論索引』（第二部）、大蔵出版、一九七七を参照した。

一、註は語句の意味を記すとともに、原文に用いられた語句の出典を明らかにすることにつとめた。

# 大智度初序品縁起義釋論 第一卷第一

龍樹菩薩造
後秦龜茲國三藏法師鳩摩羅什
奉　詔譯

〔歸敬偈〕

智度大道佛從來　智度大海佛窮盡
智度相義佛無礙　稽首智度無等佛
有無二見滅無餘　諸法實相佛所說
常住不壞淨煩惱　稽首佛所尊重法
聖衆大海行福田　學無學人以莊嚴
後有愛種永已盡　我所既滅根亦除
已捨世間諸事業　種種功德所住處
一切衆中最爲上　稽首眞淨大德僧
一心恭敬三寶已　及諸救世彌勒等
智慧第一舍利弗　無諍空行須菩提
我今如力欲演說　大智彼岸實相義
願諸大德聖智人　一心善順聽我說

57 c

## 大智度初序品中「縁起」の義を釈するの論　第一巻第一

竜樹菩薩が造る。
後秦の亀茲国の三蔵法師鳩摩羅什が詔を奉じて訳す。

智度（prajñāpāramitā）の大道は仏の従り来たれるものにして、
智度の大海は仏の窮め尽されしもの。
智度の（実）相（lakṣaṇa）の義は仏のみ無礙にして、
智度なる、無等の仏に稽首したてまつる。
有無の二見は滅して余すところなく、
諸法の実相は仏の説かれしもの。
常住不壞にして煩悩を浄めるものなれば、
仏の尊重されし法に稽首したてまつる。
大海のごとき、あまたの聖衆は福田（puṇyakṣetra）を行じ、
（有）学（śaikṣa）・無学（aśaikṣa）の人すでに荘厳（alaṁkṛta）す。
後有（punarbhava）の愛種も永くすでに（滅）尽し、
我所すでに滅し根もまた除かる。
すでに世間の諸々の事業（kṛtya）を放棄し、
種々の功徳の住る処なり。

〔摩訶般若波羅蜜經所説の大因縁〕

問曰。佛以何因縁故。説摩訶般若波羅蜜經。諸佛法不以無事及小因縁而自發言。譬如須彌山王不以無事及小因縁而動。今有何等大因縁故。佛説摩訶般若波羅蜜經。答曰。佛於三藏中廣引種種諸喩。爲聲聞説法不説菩薩道。唯中阿含本末經中。佛記彌勒菩薩。汝當來世當得作佛號字彌勒。亦不説種種菩薩行。佛今欲爲彌勒等廣説諸菩薩行。是故説摩訶般若波羅蜜經。

一切の衆中の最上となれる、
真浄の大徴僧（bhadanta）に稽首したてまつる。
一心に三宝に恭敬しおわりて、
および諸々の世を救える弥勒仏（Maitreya）らと、
智慧第一の舎利弗（Sāriputra）と、
無諍（araṇā）にして空行（samādhi）なる須菩提（Subhūti）とに（恭敬す。）
我、今、わが力に如って、大智の彼岸なる実相の義を演べ説かんとす。
願わくは、諸の大徴、聖智の人よ、
一心に善く順って、わが説くを聴きたまえ。

問うていう。「仏はどういう因縁（hetu-pratyaya）から、摩訶般若波羅蜜経を説かれたのか。諸仏は法を、何の根拠〔事（nidāna）〕もなくまたさ細な因縁（kārya）で自ら言を発せられるものではない。譬えば須弥山（王）（Sumerupravarta-rāja）が何の根拠もなく、またさ細な因縁では動がないようなものである。今、どのような大きな因縁があって、仏が摩訶般若波羅蜜経を説かれたのか。」と。

答えていう。「仏は三蔵（tripiṭaka）のうちで広く種々の諸々の喩えを引いて、声聞（śrāvaka）のために法を説かれ、菩薩（bodhisattva）の道を説かれなかった。ただ『中阿含本末経』（Madhyāmagama-pūrvapa-

〔念佛三昧增益〕

復次有菩薩修念佛三昧。佛爲彼等欲令於此三昧得增益故。說般若波羅蜜經。如般若波羅蜜初品中說。佛現神足放金色光明。遍照十方恒河沙等世界。示現大身清淨光明種種妙色滿虛空中。佛在衆中端正殊妙無能及者。譬如須彌山王處於大海。諸菩薩見佛神變。於念佛三昧倍復增益。以是事故。說摩訶般若波羅蜜經。

〔轉法輪〕

菩薩初生時。放大光明普遍十方。行至七步四顧觀察。作師子吼。而說偈言。

---

58 a

rāntaka-sūtra)[16]の中で、仏が弥勒菩薩に、『汝は当来世できっと仏になることができ、弥勒(Maitreya)と号字られるのだ』と(授)記(vyākaraṇa)[17]しているが、また（そこには）種々の菩薩の行（caryā）を説いていない。仏は今、弥勒らの為に広く諸々の菩薩の行を説こうとするがゆえに摩訶般若波羅蜜経を説かれたのである。

また次に菩薩が念仏三昧（buddhānusmṛti-samādhi）[18]を修して、仏が彼等のためにこの三昧を増益させようとするために般若波羅蜜経を説かれた。たとえば般若波羅蜜経の初品の中に、「仏の神足通（ṛddhipāda）を現わして金色の光明（suvarṇarūpa-raśmi）を放って遍く十方の恒河（Gaṅgānadī）の沙（の数）に等しい世界を照らし、大身を示現された。清浄の光明（viśuddhāvabhāsa）、種々の妙色が虛空（ākāśa）のうちに満ち、仏は大衆中にあって端正にして殊妙[19]であって、だれもよくならぶものがなかった。譬えば須弥山（王）が大海にあるが如くであった。諸々の菩薩は仏の神変（prātihārya）をみて、念仏三昧をますます増益させた。[20]」と、説いているとおりである。このようなわけで摩訶般若波羅蜜経を説かれたのである。

また次に（仏である）菩薩が生まれられた時、大いなる光明（raśmi）を放って十方に普くおよぼし、七歩あるいて四顧[21]を観察して、師子吼

我生胎分盡　是最末後身
我已得解脫　當復度衆生

作是誓已身漸長大。欲捨親屬出家修無上道。中夜起觀見諸伎直后妃婇女狀若臭屍。卽命車匿令被白馬。夜半踰城行十二由旬。到跋伽婆仙人所住林中。以刀剃髮。以上妙寶衣貿麁布僧伽梨。於泥連禪河側六年苦行。日食一麻或食一米等。而自念言。是處非道。爾時菩薩捨苦行處。到菩提樹下坐金剛處。魔王將十八億萬衆來壞菩薩。菩薩以智慧功德力故。降魔衆已。卽得阿耨多羅三藐三菩提。是時三千大千世界主梵天王名式棄。及色界諸天等。釋提桓因。及欲界諸天等。幷四天王。皆詣佛所勸請世尊初轉法輪。亦是菩薩念本所願及大慈大悲故。受請說法。諸法甚深者般若波羅蜜是。以是故佛說摩訶般若波羅蜜經。

---

(siṁhanāda) して偈を説いて言われた。

我、生胎の分（際）尽きて、
これ最末後の身となる、
我、すでに解脱を得たれば、
まさにまた衆生を度せん。

この誓をなしおえて、身体はだんだん成長された。親属を捨てて出家し無上道 (anuttaramārga) を修めようとおもわれた。中夜に諸々の伎直や后妃や婇女を観見て、その状が臭い屍のようであったので、すぐ車匿 (Chaṇḍaka) に命じて白馬にうわじきをかけさせた。夜半に城壁をこえて、十二由旬 (yojana) 行って、跋伽婆 (Bhārgava) 仙人の住んでいる林 (āśrama) 中に至った。刀で髪をそり、上妙なる宝衣を麁い布の僧伽梨 (saṁghāṭī) にかえて泥連禅河 (Nairañjarā) の側で六年苦行した。日々に一つぶの麻を食べ、或いは一つぶの米などを食べた。しかるに自ら念って、「この処 (vihāra) は道にあらず」と。その時、菩薩は苦行の処を捨てて菩提樹 (bodhidruma) のもとに到り金剛の座 (vajrāsana) にすわった。魔王は十八億萬の衆をひきつれて来て菩薩を壊さんとした。菩薩は智慧 (prajñā) と功徳 (guṇa) の力があったので魔王 (mārasenā) と衆とを降しおわって、ただちに阿耨多羅三藐三菩提 (anuttara-samyak-saṃbodhi) を得られた。

その時、三千大千世界の主である梵天 (Brahmā)—名は式棄 (Śikhin)—

〔一切智〕

復次有人。疑佛不得一切智。所以者何。諸法無量無數。云何一人能知一切法。佛住般若波羅蜜。實相清淨如虛空。無量無數法中。自發誠言。我是一切智人欲斷一切衆生疑。以是故說摩訶般若波羅蜜經。

〔衆生得度〕

復次有衆生應得度者。以佛大功德智慧無量難知難解故。爲惡師所惑。心沒邪法不入正道。爲是

及び色界（rūpadhātu）の諸天（Devāḥ）等、釈提桓因（Śakradevendra）及び欲界（kāmadhātu）の諸天等、幷びに四天王（dharmacakra）は皆、仏の所に詣り、世尊に初めて法輪（dharmacakra）を転ぜられんことを勧請した。またこの菩薩がもとより願うところのもの（pūrvapraṇidhāna）〔本願〕及び大慈（mahāmaitrī）大悲（mahākaruṇā）を念ぜられたので、58 b 請いをうけて説法せられたのである。諸の法で甚深なる（gambhīra）ものは般若波羅蜜これである。このために仏は摩訶般若波羅蜜経を説かれたのである。

また次に人あって仏が一切智（sarvajña）を得ていないと疑った。その所以はどうしてか（といえば）、諸法は無量無数であるから、けっして一人が一切の法を知ることが出来ないからである。（しかし）仏は般若波羅蜜に住して、実相（bhūtalakṣaṇa）の清浄（śuddha）なることは虛空のようである。

無量無数の法中に自ら誠の言葉を発して、「我は一切智の人[28]であるから一切衆生の疑い（saṁśaya）を断とう。」と、いわれた。こういうわけで摩訶般若波羅蜜経を説かれたのである。

また次に衆生の中でまさに得度しようとするものがあった。（彼等は）仏の大功徳（guṇa）と智慧（prajñā）が無量にして知り難く解し難かった

輩人起大慈心。以大悲手授之令入佛道。是故自現最妙功德。出大神力。如般若波羅蜜初品中說。佛入三昧王三昧。從三昧起。以天眼觀十方世界。擧身毛孔皆笑。從其足下千輻輪相。放六百千萬億種種色光明。從足指上至肉髻。處處各放六百千萬億種種色光明。普照十方無量無數如恒沙等諸佛世界。皆令大明。佛從三昧起欲宣示一切諸法實相斷一切衆生疑結故。說般若波羅蜜經。

〔斷邪慢〕

復次有惡邪人懷嫉妬意誹謗言。佛智慧不出於人。但以幻術惑世。斷彼貢高邪慢意故。現無量神力無量智慧力。於般若波羅蜜中自說。我神德無量三界特尊。爲一切覆護。若一發惡念獲罪無量。一發淨信受人天樂。必得涅槃果。

ので、悪師に惑わされ、心はよこしまな法（mithyādharma）にかくれ正道に入らなかったのである。このような輩人の為に大慈の心（mahāmaitrīcitta）を起こし大慈の手を彼等にさしのべて仏道に入らせるのである。この故に（仏は）自ら最も妙なる功徳を現わして大威神力（mahārddhibala）をしめすのである。般若波羅蜜（経）の初品の中には次の如く説いている。[29]「仏は三昧王三昧（samādhirājasamādhi）に入り、三昧より起ち上って天眼通（divyacakṣus）をもって十方世界を観られた。挙身の毛孔が皆な笑き、その足もとの千輻輪（cakrāṅgapāda）[30]の相から六百千萬億の種々の色の光明を放ち、足の指さきから肉髻まで処々に各々六百千萬億の種々の色の光明を放って、普く十方無量無数の恒河の沙の数に等しい諸仏の世界を照らし、皆大いに明るくした。[31]」と。

仏は三昧（samādhi）より起ち上って、一切の諸法の実相なることを宣べつたえ一切の衆生の疑結（saṁśayabandhana）を断とうとするが故に、般若波羅蜜経を説かれたのである。

また次に悪邪な人が嫉妬の意（īrṣyā）を懐き誹謗して「仏の智慧は人とかわらない。ただ幻術（māyā）で世人を惑わしているだけである。」という。

かかる貢高邪慢[32]の意を断とうとして、無量の神力、無量の智慧力を現わして、般若波羅蜜（経）の中で自ら、「我は威神功徳が無量であって、三界

〔信受法〕

復次欲令人信受法故。言我是大師。有十力四無所畏。安立聖主住處心得自在。能師子吼轉妙法輪。於一切世界最尊最上。

〔衆生歡喜〕

復次佛世尊欲令衆生歡喜故。說是般若波羅蜜經言。汝等應生大喜。何以故。一切衆生入邪見網。爲異學惡師所惑。我於一切惡師邪網中得出。十力大師難可値見。汝今已遇。我隨時開發三十七品等諸深法藏。恣汝採取。

58 c

の中で特り尊く、[33] 一切を覆護るものとなる。[34] 若し一たび悪念をおこせば罪を無量にうけ、一たび浄信(viśuddhaśraddhā)をおこせば人(manuṣya)天(deva)の楽しみをうけ、必ず涅槃(nirvāṇa)の果を得るのだ。」と説くのである。

また次に人々に仏法を信受させようとして、「我は大師(mahāśāstṛ)であって十力(daśa-bala)[35]・四無所畏(vaiśāradya)[36]を有して、聖主(ārya)[37]のとどまるところに安立し、心は自在となり、よく師子吼(siṁhanāda)して妙なる法輪(dharmacakra)を転じ、一切の世界における最尊にして最上である。」と説くのである。

また次に、仏世尊は衆生を歡喜(pramudita)させようとして、この般若波羅蜜経を説いて、「汝等はきっと大きな喜びを生すであろう。何故なれば、一切の衆生は邪見の網(mithyādṛṣṭijāla)に入り、異った学問、悪師によって惑わされている。我は一切の悪師や邪見の網からすくい出すことが出来るのだ。十力の大師には値見ことはむつかしいのに、汝は今すでに遇えたのだ。我は時におうじて、三十七(道)品(sapta-triṁśad-bodhipakṣa)[38]等の諸の深い法蔵(gambhīra-dharmapiṭaka)を開発して、ほしいままに汝は採取るように。」と言っている。

〔衆生法藥〕

復次一切衆生爲結使病所煩惱。無始生死已來。無人能治此病者。常爲外道惡師所誤。我今出世爲大醫王集諸法藥。汝等當服。是故佛說摩訶般若波羅蜜經。

〔佛功德無量〕

復次有人念言。佛與人同亦有生死。實受飢渴寒熱老病苦。佛欲斷彼意故。說是摩訶般若波羅蜜經。示言。我身不可思議。梵天王等諸天祖父。於恒河沙等劫中。欲思量我身尋究我聲不能測度。況我智慧三昧。如偈說。

諸法實相中　諸梵天王等
一切天地主　迷惑不能了
此法甚深妙　無能測量者
佛出悉開解　其明如日照

又如佛初轉法輪時。應時菩薩從他方來欲量佛身。上過虛空無量佛刹。至華上佛世界。見佛身如故。菩薩說言。

大智度論和訳（中祖・諏訪・大野・吉田）

---

また次に一切の衆生は結使（kliṣṭa）の病に煩悩されている。無始の生死（anādikālikasaṁsāra）より已来、誰もよくこの病いをなおすものはなかった。常に外道や悪師に誤わされている。我は今、出世して大医王（mahāvaidyarāja）[39]となり、諸の法薬（dharmabhaiṣajya）を集めた。汝らは（この法薬を）服すべきである。この故に仏は摩訶般若波羅蜜経を説かれたのである。

また次に人あって、「仏は人と同じくまた生死があって、まことに飢え・渇き・寒さ・熱さ・老い・病いの苦しみを受ける」と念言った。仏はその意を断とうとして、この摩訶般若波羅蜜経を説いて、「我が身は不可思議なものである。梵天王等の諸天の祖父が恒河の沙の数に等しい劫（kalpa）のあいだ、我が身を思量し我が声を尋究ても、測りしることが出来なかった。どうして我が智慧三昧を測りしられようか」と示言れた。次の如く偈に説かれた。

諸法の実相のうちにあるも、
諸の梵天王等、
一切の天地の主は、
迷惑って了ことあたわざりき。
この法は甚、深妙にして、

虛空無有邊　佛功德亦爾
設欲量其身　唐勞不能盡
上過虛空界　無量諸佛土
見釋師子身　如故而不異
佛身如金山　演出大光明
相好自莊嚴　猶如春華敷

如佛身無量。光明音響亦復無量。戒定慧等諸佛功德皆悉無量。如密迹經中三密。此中應廣說。

---

59 a

よく測量るあたわざるものなるも、
仏、（世に）出でまして、悉く聞解し、
その明らけきこと日の照らすが如し。
又仏が初めて法輪を転ぜられた時のように、応時に、かなたより来て、
仏の身をはかろうとして、虛空の無量の仏の刹(buddhakṣetra)に上過り、華上仏世界(Padmottara-lohadhātu)[40]に至り、仏の身を見たてまつったが、もとのとおりであった。菩薩は次のように説いて言われた。
虛空は辺あることなきがごと、
仏の功德もまた爾り。
たといその身を量らんも、
唐　労し（はかり）尽すこと能わず。
虛空の界の
無量の諸々の仏土に上過す。
釈師子(Śakyasiṃha)の身を見みたてまつるに、
故の如くにして異らず。
仏の身は金山(cāñcana-parvata)[41]のごと、
大いなる光明を演出れぬ。
相好は自ら荘厳にして、
あたかも春の華のうち敷けるがごとし。
仏の身が無量であるように、光明と音響もまた無量であった。戒(śīla)

〔仏出家得道〕

復次佛初生時墮地行七歩。口自發言。言竟便默。如諸嬰孩不行不語。乳餔三歳。諸母養育漸次長大。然佛身無數過諸世間。爲衆生故現如凡人。凡人生時身分諸根及其意識未成就故。身四威儀坐臥行住言談語默。種種人法皆悉未了。日月歳過漸漸習學能具人法。今佛云何生便能語能行。後更不能。以此致怪。但爲此故以方便力現行人法如人威儀。令諸衆生信於深法。若菩薩生時便能行能語。世人當作是念。今見此人世未曾有。必是天龍鬼神。其所學法必非我等所及。何以故。我等生死肉身爲結使業所牽不得自在。如此深法誰能及之。以此自絶不得成賢聖法器。爲是人故。於嵐毘尼園中生。雖卽能至菩提樹下成佛。以方便力故。而現作孩童幼小年少成人。於諸時中次第而受嬉戯術藝服御五欲。具足人法。後漸見老病死苦生厭患心。於夜中半踰城出家。

や定（samādhi）や慧（prajñā）などの諸仏の功徳もみなことごとく無量であった。密迹経[42]の中の三密（guhya）[43]の如くであり、そこでは広く説かれている。

また、次に、仏が初めに生まれられた時、地に堕りて行くこと七歩して口から自分で言（vāc）[44]を発して、言い竟るとそのまま黙ってしまわれた。諸の嬰孩のように、行かず語らずに乳を飲まれて三年（の間）、諸母が養育して漸次に長大された。ところで、仏の身（kāya）は無数であって諸の世間（loka）（の法）を過えておられる。衆生のために凡人（pṛthagjana）と同様に（身を）現わされた。凡人として生まれられた時は、その身分（hāyāṅga）[45]、諸根（indriya）〔感覚器官〕、意識（manovijñāna）は未だ成就していないから、身体の四威儀（iryāpatha）[46]である行住坐臥や言談語黙などの種々の人法（manuṣyadharma）はみなすべては未だ了ていない。日月歳が過ぎ漸々に習学んで人法も具ってくる。いま、仏はどうして生まれてすぐ能く語り能く行きながら後でふたゝびそれらができないのか。不思議なことである。しかしこのようにして方便力（upāyabala）をもって人法を現にあらわし（世）人の威儀にしたがいながら、諸の衆生に深遠な法を信じさせようとするのである。若し菩薩が生まれられた時、すぐに能く歩き、能く語ったならば、世の人はきっとこのような念いを持つに違いない。「いまこのような人を見ると、世々、未だ曽てないことで

到鬱特伽阿羅洛仙人所。現作弟子而不行其法。雖常用神通自念宿命。迦葉佛時持戒行道。而今現修苦行六年求道。菩薩雖主三千大千世界而現破魔軍成無上道。隨順世法故現是衆變。今於般若波羅蜜中。現大神通智慧力故。諸人當知。佛身無數過諸世間。

---

ある。きっとこれは天（deva）・龍（nāga）や鬼神（asura）であろう。その学んでいる法は必ずや我等の及ぶところではない。なぜならば、我等が生死（saṁsārin）の肉身（maṁsākāya）は結使（saṁyojana）の業（karman）に索がれているから、自在であることはできない。このような深い法に誰が一体よく及ることができようか。」と。このようなわけで、自分らはきっぱりと賢聖（ārya）の法器（dharmabhājana）にならなかったのである。このような人となったから、嵐毘尼園（Lumbinīvana）に生まれたのである。すなわちよく菩提樹（bodhidruma）の下に至り成仏したのであるが、方便力をもったから孩童・幼少・年少・成人（の姿）を現作してそれぞれの時に応じてつぎつぎと嬉戯、術芸、服御等の五欲（pañcakāma）[47]を享受して人法を具足した。後に漸く老病死の苦を見て厭患の心を生して、夜半に城を踰えて出家したのである。鬱特伽（Udraka Rāmaputra）、阿羅洛（Ārāḍa Kālāma）[48]の（二）仙人のもとに到って弟子と現作ったが、その法は行はなかった。常に神通（abhijñā）を用いて自分の宿命（pūrvajanma）を念った。迦葉仏（Kāśyapa）（在世）の時、（すでに）戒を持ち、道を行じ（終え）ているけれども、いま現に苦行（tapas）を修めて六年間道を求めた。菩薩は三千大千世界（trisāhasramahāsāhasralokadhātu）の主であるが、現に魔軍を敗り無上の道を成じたのである。世法（lokadharma）に随順うために、是のような衆くの変化（nirmāṇa）を現わしたのである。いま、般若波羅蜜（経）の中で大神通力

〔救二辺〕
復次有人應可度者。或墮二邊。或以無智故。但求身樂。或有爲道故修著苦行。如是人等於第一義中失涅槃正道。佛欲拔此二邊令入中道故。說摩訶般若波羅蜜經。

〔分別生身法身〕
復次分別生身法身供養果報故。說摩訶般若波羅蜜經。如舍利塔品中說。

〔阿鞞跋致と魔幻・魔事〕
復次欲說阿鞞跋致阿鞞跋致相故說。又爲魔幻魔事故說。

〔三乘記別〕
復次爲當來世人供養般若波羅蜜因緣故。又欲授三乘記別故。說是般若波羅蜜經。如佛告阿難。我涅槃後。此般若波羅蜜。當至南方。從南方至西方。後五百歲中當至北方。是中多有信法善男

大智度論和訳（中祖・諏訪・大野・吉田）

と智慧力とを現わしたのであるから、諸人は仏身は無数であって世界（の法）を過えていることを知らなければならない。

59 b

また次に、人の度うべきものがありながら、或いは二辺[49]に堕ち、或いは無智であるために、いたずらに身の楽しみを求めている。或いは有為の道(saṁskṛtālambanamārga)[50]であるために苦行に修着ている。このような人等は、第一義[51]中の涅槃への正しい道を失っている。仏はこの二辺から救って中道に入らせようとして摩訶般若波羅蜜（経）を説かれたのである。

また次に、生身と法身との供養の果報を分別するために摩訶般若波羅蜜（経）を説いたのである。舎利塔品[52]の中に説いている通りである。

また次に、阿鞞跋致[53](avivaivartika)（の階位）と阿鞞跋致の相とを説くために説かれたのである。

また、魔幻と魔事[54]とを（明かす）ために説かれたのである。

また次に、当来世の人が般若波羅蜜を供養する因縁のために、また三乗(yānatraya)の記別[55]〔授記〕を授けようとして、この般若波羅蜜経を説いたのである。たとえば仏が阿難（Ānanda）に告げられた。「我は般涅槃(parinirvāṇa)の後に、この般若波羅蜜（経）は必ず南方に至り、南方

子善女人。種種華香瓔珞幢幡伎樂燈明珍寶以財物供養。若自書若教人書。若讀誦聽說。正憶念修行。以法供養。是人以是因緣故。受種種世間樂。末後得三乘入無餘涅槃。如是等觀諸品中因緣事故。說般若波羅蜜經。

〔四悉檀〕

復次佛欲說第一義悉檀相故。說是般若波羅蜜經。有四種悉檀。一者世界悉檀。二者各各爲人悉檀。三者對治悉檀。四者第一義悉檀。四悉檀中一切十二部經。八萬四千法藏。皆是實無相違背。佛法中有。以世界悉檀故實有。以各各爲人悉檀故實有。以對治悉檀故實有。以第一義悉檀故實有。

〔世界悉檀〕

世界者有法從因緣和合故有無別性。譬如車轅軸

より西方に至るであろう。その後、五百年たって必ず北方に至るであろう。そこには多くの法を信ずる善男子・善女人がいる。種々の華香・瓔珞・幢幡・伎楽・燈明・珍宝や財物をもって供養する。あるいは自ら書（写）し、あるいは人に書（写）させ、あるいは読誦し、聴説し、正憶念して修行し、法を以て供養する。これらの人はこの因縁によって種々の世間の楽しみを（享）受して、末後において三乘（の果）を得て無余涅槃(56)(nirupadhiśeṣanirvāṇa)に入るであろう。(57)」と。このような諸品中の因縁の事を観察したから般若波羅蜜経を説かれたのである。

また次に、仏は第一義悉檀の（実）相（pāramārthikasiddhānta-lakṣaṇa）を説こうとしたから、この般若波羅蜜経を説いたのである。四種の悉檀(58)がある。一には、世界悉檀（laukika-siddhānta）、二には各々為人悉檀（prātipauruṣika-s°）、三には対治悉檀（prātipākṣika-s°）、四には第一義悉檀（pāramārthika-s°）(59)である。この四悉檀の中に一切の十二分経（dvādaśāṅgasūtra）、八万四千の法蔵（dharmakoṣa）(60)がある。これらのすべては真実であって互いに矛盾することなく仏法中にある。世界悉檀として実有であり、各々為人悉檀として実有であり、対治悉檀として実有であり、第一義悉檀として実有である。

世界〔悉檀〕は有の法であるけれども、因縁和合（hetupratyayasāmag-

輻輞等和合故有無別車。人亦如是。五衆和合故有無別人。若無世界悉檀者。佛是實語人。云何言我以清淨天眼見諸衆生隨善惡業死此生彼受果報。善業者生天人中。惡業者隨三惡道。復次經言。一人出世多人蒙慶。福樂饒益佛世尊也。如法句中說。神自能救神。他人安能救神。自行善智是最能自救。如瓶沙王迎經中佛說。凡人不聞法。凡人著於我。又佛二夜經中說。佛初得道夜至般涅槃夜。是二夜中間所說經教。一切皆實不顚倒。若實無人者。佛云何言我天眼見衆生。是故當知有人者。世界悉檀故。非是第一義悉檀。問曰。第一悉檀是眞實。實故名第一。餘者不應實。答曰。不然。是四悉檀各各有實。如如法性實際世界悉檀故無。第一義悉檀故有。人等亦如是。世界悉檀故有。第一義悉檀故無。所以者何。人五衆因緣有故有是人等。譬如乳色香味觸因緣有故有是乳。若乳實無。乳因緣亦應無。今乳因緣實有故。乳亦應有。非如一人第二頭第三手無因緣而有假名。如是等相名爲世界悉檀。

---

ri) によるから有であって、別に（本）性というものがあるわけではない。譬えば車の轅（ながえ）、軸、輻（や）、輞（わ）などが和合しているから（車が）有るのであって、別に車（の本性）はない。人も同様である。五衆〔蘊 (skandha)〕の和合によってあるのであって、別に人があるのではない。若し世界悉檀がなかったならば、仏は（真）実語を語る人であるのにどうして（次のように）いったのか、「我れは清浄な天眼で、諸の衆生が善悪の業 (kuśalākśalakarman) に随ってここに死にかしこに生まれて果報 (vipāka) を受けるのを見る。善業のものは天・人（の世界）に生まれ、悪業のものは
59 c
三悪道 (tridurgati) に堕ちる。」と。

また次に（ある）経[61]に「一人が出世すれば多くの人が慶びをうける。福楽饒益するのは仏世尊である」と言っている。『法句（経）[62]』中に説くように「神 (ātman)[63]〔自己〕はみずからよく神〔自己〕を救うが、他人がどうして神〔自己〕を救えようか。みずから善を行ずる智慧が最もよくみずから救う。」のである。『瓶沙王迎経 (Phālguna-sūtra)[64]』中で仏が説かれたように「凡人は法を聞かず、凡人は我に執着している」と。また仏が『二夜経 (Dharmarātridvaya-sūtra)[65]』中に「仏の初め、得道の夜から般涅槃 (parinirvāṇa)[66] の夜に至るこの二夜の中間に説いた経教は、一切は皆な（真）実で顚倒していない。」と説いている。もし実に人がいなければ、仏がどうして「我、天眼をもって衆生を見る」といおうか。この故にきっと、「人があるのは、世界悉檀の上からであり、第一義悉檀からではない。」

〔各各爲人悉檀〕

云何各各爲人悉檀者。觀人心行而爲說法。於一事中或聽或不聽。如經中所說。雜報業故。雜生世間得雜觸雜受。更有破群那經中說。無人得觸無人得受。問曰。此二經云何通。答曰。以有人疑後世不信罪福。作不善行墮斷滅見。欲斷彼疑捨彼惡行。欲拔彼斷見。是故說雜生世間雜觸雜受。是破群那計有我有神。墮計常中。破群那問

60 a

と知るべきである。

問うて。「第一（義）悉檀は真実であり、（真）実であるから第一と名づける。その他は真実ではない」という。答えて、「そうではない。この四悉檀の各おのが真実である。如如（tathatā）[67]・法性（dharmatā）[68]・実際（bhutakoṭi）[69]は世界（悉檀）だからなく、第一義悉檀だからある。人等もまたこのようであり、世界悉檀だからあり、第一義悉檀だからない。そのわけはどうしてか。（それは）人に五衆〔蘊〕の因縁があるのでこの人等がある。譬えば乳に色・香・味・触の因縁があってこの乳があり、もし乳が実（際）になければ、乳の因縁もまた当然ないごときである。今、乳の因縁が実（際）にあるので乳もまた当然あることになる。一人の第二頭や第三手のように因縁がなく仮りの名（prajñapti）[70]があるのではない。このような相を名づけて世界悉檀とする。」と。

どうして各々為人悉檀なのか。人の心行（cittavṛtti）[71]を観て説法するのに、一事の中に聴いたり聴かなかったりする。それは経[72]中に説くところの如くで、「雑報業（saṁbhinnavipākakarman）[73]だから、世間に雑生（saṁbhinnalokadhātu）し雑触（saṁbhinnasparśa）雑受（saṁbhinnavedanā）を得る」のである。さらに『破群那経』（破群邪経？Phālgunasūtra）[74]中に「人は触を得ることなく、人は受を得ることない」と説いている。

佛言。大德誰受。若佛說某甲某甲受。便墮計常中。其人我見倍復牢固不可移轉。以是故不說有受者觸者。如是等相是名各各爲人悉檀。

〔對治悉檀〕

對治悉檀者。有法對治則有。實性則無。譬如重熱膩酢鹹藥草飲食等。於風病中名爲藥。於餘病非藥。若輕冷甘苦澁藥草飲食等。於熱病名爲藥。於餘病非藥。若輕辛苦澁熱藥草飲食等。於冷病中名爲藥。於餘病非藥。佛法中治心病亦如是。不淨觀思惟。於貪欲病中名爲善對治法。於瞋恚病中不名爲善。非對治法。所以者何。觀身過失名不淨觀。若瞋恚人觀過失者。則增益瞋恚



問うて、「この二経は、どのように（会）通するのか」という。答えて、「ある人が後世を疑い罪福（pāpa-puṇya）[75]を信ぜずに不善行（akuśala-caryā）をなし断滅見（ucchedadṛṣṭi）に堕ちたために、その疑いを断ちその悪行を捨て、その断見を抜こうとした。その故にそこで世間に雑生し、雑触・雑受を得けたと、説いたのである。この破群那[76]に「我[77]（ātman）があり、神[78]（puruṣa）があると計え、常と計る（見）[79]（śāśvatadṛṣṭi）に堕ちる。破那が仏に問うて言う。「大徳よ、誰が受けるのか。」と。もし仏が某甲が某甲を受けると説かれたならば、そのまま常と計る（考え）に堕ちる。その人の我見はますます牢固となって、移転ことができない。この故に受者（vedaka）・触者（sparśaka）のあることを説かない。このような相をこうして各々為人悉檀と名づけるのである。

対治悉檀とは、有法（bhūtasvabhāva）[80]は対治（pratipakṣa）[81]するときは有るが実性としては無い。譬えば重熱た膩・酢・鹹の薬草や飲食などは風病（vāyuvyādhi）には薬となるが、ほかの病には薬とはならない。もし軽く冷した甘・苦・渋の薬草や飲食などは、熱病（tejovyādhi）に薬となるが、ほかの病には薬とはならない。もし軽い辛・苦・渋の熱した薬草や飲食などは冷病（śītavyādhi）には薬となるが、ほかの病には薬とはならない。

仏法中の心病（cetovyādhi）を治すのもまた同様である。不浄観（aśub-

火故。思惟慈心於瞋恚病中名爲善對治法。於貪欲病中不名爲善。非對治法。所以者何。慈心於衆生中。求好事觀功德。若貪欲人求好事觀功德者。則增益貪欲故。因緣觀法於愚癡病中名爲善對治法。於貪欲瞋恚病中不名爲善。非對治法。所以者何。先邪觀故生邪見。邪見卽是愚癡。問曰。如佛法中說十二因緣甚深。如說。佛告阿難。是因緣法甚深難見難解難覺難觀。細心巧慧人乃能解。愚癡人於淺近法猶尙難解。何況甚深因緣。今云何言愚癡人應觀因緣法。答曰。愚癡人者。非謂如牛羊等愚癡。是人欲求實道。邪心觀故生種種邪見。如是愚癡人當觀因緣。是名爲善對治法。若行瞋恚淫欲。人欲求樂欲惱他。於此人中非善非對治法。不淨慈心思惟。是二人中是善是對治法。何以故。是二觀能拔瞋恚貪欲毒刺故。復次著常顚倒衆生。不知諸法相似相續。有如是人觀無常。是對治悉檀。非第一義。何以故。一切諸法自性空故。如說偈言。

無常見有常　　是名爲顚倒
空中無無常　　何處見有常

---

60 b

hāvanā)[82] の思惟は、貪欲 (rāga) の病に善い対治法であるが、瞋恚 (dveṣa) の病には善い（対治法）とはならない。（これは）対治の法ではない。そのわけは何か。身の過失 (doṣa) を観ずるのを、不浄観と名づける。もし瞋恚の人が（身の）過失を観れば、すなわち瞋恚の火を増益するからである。慈心 (maitricitta)[83] を思惟することは、瞋恚の病には善の対治法となるが、貪欲の病には善とはならない。（これは）対治の法ではない。そのわけは何か。慈心（観）は衆生の中に好事を求めて功徳を観る。もし貪欲の人が好事を求め功徳を観たならば、すなわち貪欲を増益するからである。因緣観 (hetupratyayaparīkṣā)[84] の法は、愚癡 (moha) の病には善の対治法となるが、貪欲・瞋恚の病には善とはならない。（これは）対治の法ではない。そのわけは何か。先ず邪観 (mithyāparīkṣā)[85] があるので邪見 (mithyādṛṣṭi) を生ずる。その邪見がつまり愚癡である。

問うていう。「仏法の中に説いている十二因緣 (pratityasamutpāda) の如く甚深である。（経典に）説かれているように仏が阿難に告げられた。この因緣の法は甚深で、見ることも難しく、解することも難しく、覚ることも難しく、観ることも難しい。細心巧慧[86]の人 (sūkṣma nipuṇapaṇḍita) にしてはじめてよく解するのである。愚癡の人 (mūḍha) は浅く身近な法でさえも、なお解することができない。まして甚深の因緣ではなおさらのことである。今、どうして愚癡の人が因緣の法を観るべきだ、と言えようか。」と。答えていう。「愚癡の人は、牛羊などのような愚癡をいうのではな

問曰。一切有爲法皆無常相。應是第一義。云何言無常非實。所以者何。一切有爲法生住滅相。前生次住後滅故。云何言無常非實。答曰。有爲法不應有三相。何以故。三相不實故。若諸法生住滅。是有爲相者。今生中亦應有三相。生是有爲相故。如是一一處亦應有三相。是則無窮。住滅亦如是。若諸生住滅。各更無有生住滅者。不應名有爲法。何以故。有爲法相無故。以是故。諸法無常非第一義。復次若一切實性無常則無行業報。何以故。無常名生滅。失故。譬如腐種子不生果。如是則無行業。無行業云何有果報。今一切賢聖法有果報。善智之人所可信受。不應言無。以是故。諸法非無常性。如是等無量因緣。說不得言諸法無常性。一切有爲法無常。苦無我等亦如是。如是等相名爲對治悉檀。

い。この人は実道を求めようとして、邪心の観があるため種々の邪見を生じたのである。このように愚癡の人は、因縁を見るべきであり、これを名づけて善の対治の法とするのである。もし瞋恚（dveṣa）と婬欲（rāga）を行なうと、人は楽を求めようとし他人を悩ませることになる。この人には善とはならない。（これは）対治の法でもない。不浄（aśubhabhāvanā）と慈心（maitrīcitta）の思惟（manasikāra）は、この二人には善であり対治の法である。どうしてかと言えば、この二観はよく瞋恚貪欲の毒刺を抜くからである。」と。

また次に常（nitya）に執着している顚倒（viparyāsa）の衆生は、諸法の相似相続（sadṛśasaṁtana）[87]のことを知らない。このような人がいれば、無常（anitya）を観じさせることである。[88]これは対治悉檀であり、第一義（悉檀）ではない。どうしてかといえば、一切の諸法は自性が空であるからである。偈を説いていっている如くである。

無常をば有常と見、
これを顚倒と名づく。
空の中に無常なくば
いずれの処にか有常を見ん。

問うていう。「あらゆる有為法[89]（作られたもの saṁskṛta）は、みな無常の相をしている。これが第一義（悉檀）である。どうして無常が真実にあるのではないというのか、そのわけは何か。（また）あらゆる有為法の

生じたり住まったり滅したりする相は、前に生じ次に住まり後に滅すのに、どうして無常が真実にあるのではないというのか。」と。答えていう。「有為法には、（そのような）三相（lakṣaṇa）があるわけではない。どうしてかというと、その三相が真実にあるのではないからである。もし、諸法が生じ住まり滅するのが有為の相であれば、今の生の中にもまた三相がある筈である。生ずるのは有為の相である。このように一いちのところにまた三相があることになり、これは極まりない。住まり滅するのもまた同様である。もし、生じ住まり滅する（相）には各おのにさらに生じ住まり滅する（相）がなければ、有為法とは名づけられるべきではない。なぜならば、有為法の相は無であるからである。このようなわけで諸法無常は第一義（悉檀）ではない。」と。

また次に、もしあらゆるものの真実の本性（bhūtasvabhāva）が無常であれば、行業（karmavipāka）[90]〔行為〕の報いはない。どうゆうわけか。

60 c

無常には生じ滅すと名づけることが間違いであるからである。たとえば、腐った種子が果（実）を生じないようなものである。このようなことから（無常には）行為はない。行為がないのに、どうして果報があるのか。今、あらゆる賢聖の法（āryadharma）には果報があり、善き智慧ある人は（そのような果報を）信受すべきもので、ないというべきではない。そうであるから諸法には無常の性質があるというのではない。このような量り知れない（多くの）因縁があるので、「諸法は無常の性質をもっている」

〔第一義悉檀〕

第一義悉檀者。一切法性一切論議語言。一切是法非法。一一可分別破散。諸佛辟支佛阿羅漢所行眞實法。不可破不可散。上於三悉檀中所不通者。此中皆通。問曰。云何通。答曰。所謂通者。離一切過失。不可變易不可勝。何以故。除第一義悉檀。諸餘論議諸餘悉檀皆可破故。如衆義經中所說偈。

各各自依見　戲論起諍競
若能知彼非　是爲知正見
不肯受他法　是名愚癡人
作是論議者　眞是愚癡人
若依自是見　而生諸戲論
若此是淨智　無非淨智者

此三偈中。佛說第一義悉檀相。所謂世間衆生。自依見自依法自依論議。而生諍競。戲論卽諍競本。戲論依諸見生。如說偈言。

有受法故有諸論　若無有受何所論

と説きつくせない。（しかし）あらゆる有為法は、無常なのであり、苦、無我なども同様である。このような相を対治悉檀と名づけている。

第一義悉檀とは、あらゆる法の本性（dharmatā）とあらゆる論議（upadeśa）・語言（abhidhāna）、あらゆる是なる法（dharma）と非なる法（adharma）は一一分別し（vibhakta）破散する[91]（bhinna）ことができる。諸仏や辟支仏（Pratyekabuddha）や阿羅漢（Arhat）の行ずるところの真実の法というものは、破せられないし、散ぜられない。上の三悉檀の中において、（会）通しなかったところは、この（第一義悉檀）中で皆な（会）通する。問うていう、「どうして（会）通するのか」。答えていう、「いわゆる（会）通というのは、すべての過失（doṣa）を離れた（ということであり、これは）変易[92]（pariṇāmatva）ものでないことであり、変易しようもないものである。どうしてか。第一義悉檀を除けばあらゆる余の論議や、あらゆる余の悉檀は皆な破斥されるからである。『衆義経（Arthavargīya-sūtra）』[93]の中に説くところの偈のごとくである。

おのおの自らの（邪）見（dṛṣṭi）によらば、
戲論（prapañca）して諍競（vivāda）を起こさん。[94]
若し能く彼〔邪見〕の非なることを知らば、
是れ正見（samyagdṛṣṭi）を知るとなさん。
肯んで他の法を受けざれば、

有受無受諸見等　　是人於此悉已除

行者能如實知此者。於一切法一切戲論。不受不著不見。是實不共諍競。能知佛法甘露味。若不爾者則謗法。若不受他法不知不取。是無智人。若爾者應一切論議人皆無智。何以故。各各不相受法故。所謂有人自謂。法第一義淨。餘人妄語不淨。譬如世間治法。故治法者刑罰殺戮種種不淨。世間人信受行之。以爲眞淨。於餘出家善聖人中。是最爲不淨。外道出家人法。五熱中一脚立拔髮等。尼犍子輩以爲妙慧。餘人說此爲癡法。如是等種種外道出家白衣婆羅門法。各各自以爲好。餘皆妄語。是佛法中亦有犢子比丘說。如四大和合有眼法。如是五衆和合有人法。犢子阿毘曇中說。五衆不離人。人不離五衆。不可說五衆是人離五衆是人。人是第五不可說法藏中所攝。說一切有道人輩言。神人一切種一切時一切法門中。求不可得。譬如兎角龜毛常無。

61 a

是れ愚癡の人と名づけん。

是の論議（upadeśa）を作さば、

真に愚癡の人ならん。

若し自ら是とする（邪）見によらば、

種々の戲論（prapañca）を生ぜん。

若しこれ清浄なる智慧ならば、

浄智に非ざるもの無し。

この三偈の中で、仏は第一義悉檀の相を説かれたのである。いわゆる世間の衆生は、自からの（邪）見により、自からの（邪）法により、自からの論議によって、諍競を生ずるのである。戲論はすなわち諍競の本〔原因〕である。戲論はもろもろの（邪）見によって生ずるのである。偈に説いていうごとくである。

受の法[95]有るがゆえに諸の論有り、

若し受（の法）なくんば、何ぞ論ずるところあらん。

有受・無受の諸の（邪）見等、

この人、ここ（第一義悉檀）に悉くすでに除けり。

行者で能く如実にこのことを知る者は、あらゆる法やあらゆる戲論を、受けることもないし、（執）著することもないし、（誤って）見ることもない。このように実際に共に諍競しないならば、能く仏法の甘露味（amṛta-rasa）[96]を知ることができる。若しそうでないならば、（仏）法を謗ること

になる。若し他の法（paradharma）〔正法〕を受けないならば、知ることもないし、取ることもない。これは無智の人である。若しそうであるならば、あらゆる論議の人は皆な無智であるはずである。どうしてか。おのおのが法を相受していないからである。いわゆるある人が自ら謂った。「法というものは第一義（悉檀）で（清）浄なものである。余人（の法）は妄語で不浄なものである。」と。

譬えば、世間の治法〔法律〕の如く、もとより治法は、刑罰や殺戮で種々不浄なものであるが、世間の人は信受してこれを行じ、これをもって真浄としている。余の出家（pravrajita）で善なる聖人（ārya）の中では、これを最も不浄なものとしている。

外道（tīrthika）の出家人の法では、五熱（pañcatapas）[97]の中で一方の脚で立って髪を抜くことなどを、尼犍子（Nirgranthaputra）[98]の輩は、妙なる智慧となしているのに、余の人はこれを癡法（mūḍha）と説いている。このような種々の外道の出家、白衣（śvetāmbara）、婆羅門（brāhmaṇa）の法は、おのおの自らは好とするが、余は皆な妄語としている。

この仏法の中にも、また犢子比丘（Vātsīputra）[99]が有って説いている。「四大（caturmahābhūta）和合して眼（法）があるように、このように五衆〔蘊〕和合して人法がある」と。犢子（比丘）が『阿毘曇』（Abhidharma）の中[100]で説いている。「五衆〔蘊〕は人と離れないし、人は五衆から離れない、五衆は是れ人であるとも、五衆を離れて是れ人あり、とも説

〔第一義悉檀・諸法實相〕

如是等一切論議師輩。自守其法不受餘法。此是實餘者妄語。若自受其法。自法供養自法修行。他法不受不供養爲作過失。若以是爲清淨。得第一義利者。則一切無非清淨。何以故。彼一切皆自愛法故。問曰。若諸見皆有過失。第一義悉檀。何者是。答曰。過一切語言道。心行處滅。遍無所依不示諸法。諸法實相無初無中無後不盡不壞。是名第一義悉檀。如摩訶衍義偈中說。

語言盡竟　　心行亦訖　　不生不滅

いてはならない。」と。人とは是れ第五不可説法蔵中[101]に摂（取）するところである。説一切有（部）の道人の輩（Sarvāstivādin[102]）は、「神人（pudgala[103]）はあらゆる種（識）、あらゆる時（間）、あらゆる法門の中に、求めても得ることはできない。譬えば兎の角や亀の毛は常に無いようなものである。」と。

また次に十八界（dhātu）・十二入（āyatana）・五衆（skandha）〔蘊〕は実有であって、しかも此の中に人は無い。さらに仏法中に方広道人（Vaipulya[104]）が有って、「あらゆる法は、生ずることもなく滅することもなく、空にして有するところが無い。譬えば、兎の角や亀の毛は常に無いようなものである。」と言っている。

61 b

このようなあらゆる論議師の輩は、自らその法を守って、余の法を受けない。これは真実であって、余は妄語である。もし自らその法を受ければ、自法を供養し、自法を修行して、他の法を受けず供養せず、過失をおかすことになる。もしこれをもって清浄となし、第一義（悉檀）の利（益）を得るとすれば、すなわちあらゆるものが清浄でないものはない。どうしてか。彼のあらゆるものは皆な自らの法を愛（著）するからである。

問うていう、「もし諸々の見解にみな過失があるならば、第一義悉檀はどうゆうものが是なのか。」と。

答えていう、「あらゆる語言の道（sarvadeśanā）を断て、心行（cit-

法如涅槃　　說諸行處　　名世界法
說不行處　　名第一義
一切實一切非實　　及一切實亦非實
一切非實非不實　　是名諸法之實相

如是等處處經中說。第一義悉檀。是義甚深難見難解。佛欲說是義故。說摩訶般若波羅蜜經。復次欲令長爪梵志等大論議師。於佛法中生信故。說是摩訶般若波羅蜜經。

---

tavṛtti）の処（sthiti）を滅し、遍ての所依（āśraya）も無く、諸法の（宣）示（dharmānām darśana）もされず。諸法実相にして、初め無く中（間）無く後も無く、尽きることもなく壊れることもない。これを第一義悉檀と名づける。」。と摩訶衍義の偈（Mahāyānārthagāthā）の中に説いている如くである。

語言尽く竟まり、心行もまた訖きぬ。生なく、滅なく。法は涅槃のごとし。

諸々の行く処を説くを、世界法と名づけ、行かざる処を説きて、第一義（悉檀）と名づく。[105]

あらゆるものは実にしてあらゆるものは非実なり。及びあらゆるものは実にして亦た非実なり。あらゆるものは非実にして不実に非ざるなり。[106] 是を諸法の実相[107]と名づく。

これらのことは、処処の経中に説いている。「第一義悉檀は、この義は甚深にして（gambhīra）、見ること難く（durdṛśa）、解すること難い（duravabodha）。」と。仏はこの義を説かんと欲して、『摩訶般若波羅蜜経』を説かれたのである。

また次に長爪梵志（Dīrghanakha）[108]などの大論議師（upadeśācārya）をして、仏法の中において、信（śraddhā）を生じさせようとして、この『摩訶般若波羅蜜経』を説かれたのである。

〔長爪梵志導引〕

有梵志號名長爪。更有名先尼婆蹉衢多羅。更有名薩遮迦摩犍提等。是等閻浮提大論議師輩言。一切論可破。一切語可壞。一切執可轉。故無有實法可信可恭敬者。如舍利弗本末經中說。舍利弗舅摩訶俱絺羅。與姉舍利論議不如。俱絺羅思惟念言。非姉力也。必懷智人寄言母口。未生乃爾。及生長大當如之何。思惟已生憍慢心。爲廣論議故出家作梵志。入南天竺國始讀經書。諸人問言。汝志何求。學習何經。長爪答言。十八種大經盡欲讀之。諸人語言。盡汝壽命猶不能知一。何況能盡。長爪自念。昔作憍慢爲姉所勝。今此諸人復見輕辱。爲是二事故。自作誓言我不剪爪。要讀十八種經書盡。人見爪長因號爲長爪梵志。是人以種種經書智慧力。種種譏刺是法是非法是應是不應是實是不實是有是無。破他論議。譬如大力狂象搪挨蹴踏無能制者。如是長爪梵志以論議力。摧伏諸論師已。還至摩伽陀國王舍城那羅聚落。至本生處問人言。我姉生子今在何處。有人語言。汝姉子者適生八歲。讀一切經

梵志（brahmacārin）がいて、なずけて長爪といった。更に先尼婆蹉衢多羅（Śreṇika Vatsagotra）[109]というものがいた。更に薩遮迦摩犍提（Satyaka Nirgranthīputra）[110]などというものがいた。これらの閻浮提（Jambudvīpa）[111]の大論議師の輩はいった。「あらゆる論（śāstra）を破すことができ、あらゆる語（言）（vāda）を壊すことができ、あらゆる執（著）（grāha）を転ずることができる。（それ）故に実法の信すべき恭敬すべきものも有ることが無い。」と。

『舎利弗本末経』[112]（Sāriputrāvadāna-sūtra）の中に説いているように、舎利弗の舅の摩訶俱絺羅（Mahākauṣṭhila）〔長爪梵志の出家名〕は、姉の舎利（Śāri）と論議して（姉に）及ばなかった。（摩訶）俱絺羅は思惟し念言った。「（これは）姉の力ではない。きっと智（慧）人を懐（妊）して、言を母の口に寄せたのであろう。未だ生まれていないのに、すでにこのようである。生まれて長大になったならば、一体どのようになるのか。」と。（長爪は）思惟し已って憍慢の心を生じ、広く論議するために出家して梵志となり、南天竺国（dakṣiṇāpatha）に入って、始めて（外道の）経（śāstra）書を読んだ。

61 c

諸々の人は問うてい言った。「汝は何を求めようと志し、何の経を学習するのですか。」と。長爪は答えていった。「十八種（類）の大経（śāstra）[113]を尽く読もうと欲う。」と。諸々の人は語って言った。「汝の寿命を尽くし

書盡。至年十六論議勝一切人。有釋種道人姓瞿曇。與作弟子。長爪聞之卽起憍慢。生不信心而作是言。如我姉子聰明如是。彼以何術誘誑剃頭作弟子。說是語已直向佛所。爾時舍利弗初受戒半月。佛邊侍立以扇扇佛。長爪梵志見佛問訊訖。一面坐作是念。一切論可破一切語可壞。一切執可轉。是中何者是諸法實相。何者是第一義。何者性。何者相。不顚倒。如是思惟。譬如大海水中欲盡其涯底。求之旣久。不得一法實可以入心者。彼以何論議道。而得我姉子。作是思惟已而語佛言。瞿曇。我一切法不受。佛問長爪。汝一切法不受。是見受不。佛所質義。汝已飮邪見毒。今出是毒氣。言一切法不受。是見汝受不。爾時長爪梵志如好馬見鞭影卽覺便著正道。長爪梵志亦如是。得佛語鞭影入心。卽棄捐貢高慚愧低頭。如是思惟。佛置我著二處負門中。若我說是見我受。是負處門麁。故多人知。云何自言一切法不受。今受是見。此是現前妄語。是麁負處門多人所知。第二負處門細。我欲受之。以不多人知故。作是念已。答佛言。瞿曇

たとしても、なお一つを知ることさえ不可能である。どうして能く(究め)尽すことができようか。」と。長爪は自ら念った。「昔、憍慢(心)をおこして姉の勝つところとなり、今、此の諸々の人にまた軽んじ辱かしめられる」と。この二事のために、自から誓言をおこした。「我は爪(nakha)を剪らずして、要らず十八種(類)の経書を読み尽くそう」と。人々は爪の長いのを見て、因ってなづけて長爪梵志といった。この人は、種々の経書の智慧力を以って、種々にこれは法、これは非法、これは応、これは不応、これは実、これは不実、これは有、これは無なりと譏刺って、他の論議を破(斥)したのである。譬えば大力の狂った象が搪挨こみ蹴踏けて、能く制(止)させる者の無いようなものである。

このように長爪梵志は、論議の力を以って、諸々の論師を摧伏せ已った。還って摩伽陀国(Magadha)の王舎城(Rājagṛha)の那羅聚落(Nāḷaka-grāma)[114]に至った。本生の処にゆき、人に問うていった。「我が姉の生んだ子は、今、何処に在るのか」と。人有って語っていった。「汝の姉の子は、適ま生まれて八歳にして、あらゆる(外道の)経書を読み尽くした。年が十六(歳)に至って、論議ではあらゆる人より勝れていた。釈種の道人〔出家者〕で姓は瞿曇(Gautama)という(お方が)あった。そのため弟子(śiṣya)と作った。」と。長爪は之を聞いて、即ち憍慢(心)を起こし、不信の心を生じて、このようにいった。「我が姉の子〔舎利弗〕こそは、聰明なることはこのようである。彼〔仏陀〕は何なる術を以て誘

一切法不受。是見亦不受。佛語梵志。汝不受一切法。是見亦不受。則無所受。與衆人無異。何用自高而生憍慢如是。長爪梵志不能得答。自知墮負處。卽於佛一切智中起恭敬生信心。自思惟。我墮負處。世尊不彰我負。不言是非。不以爲意。佛心柔濡。第一清淨。一切語論處滅。得大甚深法。是可恭敬處。心淨第一。佛說法斷其邪見故。卽於坐處得遠塵離垢。諸法中得法眼淨。時舍利弗聞是語得阿羅漢。是長爪梵志出家作沙門。得大力阿羅漢。若長爪梵志。不聞般若波羅蜜氣分離四句第一義相應法。小信尙不得。何況得出家道果。佛欲導引如是等大論議師利根人故。說是般若波羅蜜經。

---

誑し、頭を剃って弟子としたのか。」と。（長爪は）この語を説い已って、直ちに仏の所に向った。

爾の時、舍利弗は、初めて受戒（upasaṁpanna）して半月であった。仏の辺に侍立て扇で仏を扇いでいた。長爪梵志は、仏に見て問訊し訖った。一面に坐り、この（ような）念をなした。「あらゆる論（議）を破すことができ、あらゆる語（言）をうちやぶることができ、あらゆる執（著）を転ずることができる。その中で何者がこれ諸法実相（satyalakṣaṇa）なのか、何者がこれ第一義（paramārtha）（悉檀）なのか、何者が（本）性（lakṣaṇa）なのか、何者が（自）相（svabhāva）であって、顚倒（viparyāsa）（すること）がないのか。」と。このように思惟して、譬えば、大海の水の中でその涯底を（究め）尽くそうとするようなものであった。これを求めて既に久かったが、一法さえも、実に心（の中）に入ることさえできなかった。「彼は、何なる論議の道を以って、我が姉の子を得たのか。」と。この思惟をなし已って、仏に語っていった。「瞿曇よ、我はあらゆる法を受けません。」と。仏は長爪に問われた。「汝はあらゆる法を受けない（という）。この見を受けるかどうか。」と。仏が質されたところの義は、汝は已に邪見の毒（mithyādṛṣṭi-viṣa）を飲んでいる。今、この毒気を出して、あらゆる法を受けないといった。この見を汝は受けるかどうか（ということである）。

62 a

爾の時、長爪梵志は、好れた馬が鞭の影を見ただけで即ぐ覚り便ちに正

道に著くように、長爪梵志もまたこのように、[115]仏の語の鞭の影を得て、心に入れて、即ちに貢高（の心）を棄捐って、慚愧て頭を低げ、このように思惟した。「仏は、我を置て二処の負門(nigrahasthāna)[116]の中に著かされた。若し我が、この見を我れ受くと説ったならば、この負処門は麁(audarika)〔雑語〕となり、もとより多くの人が知っている。どうして自ら、あらゆる法を受けないといったのか。今、この見を受ける（といえば）、此是は現前（において）妄語（mṛṣāvāda）であるからである。この麁の負処門は、多くの人の知る処である（からである）。第二の負処門は細（sūkṣma）の（論議）である。我はこれ（一切法）を受けない（といったならば）、多くの人の知らない（ところで）ある。」と。この念をなし已って、仏に答えていった。「瞿曇よ、あらゆる法を受けない（という）この見もまた受けない。」と。仏（陀）は梵志に語られた。「汝は、あらゆる法を受けない（という）。この見もまた受けないのであれば、すなわち受けるところは（何も）なく、衆くの人と異ならないではないか。何して自らを高ぶらして、憍慢（の心）をこのように生ずるのか。」と。長爪梵志は（何も）答えることができなかった。

自ら負処に堕ちた（ことを）知って、すなわち仏の一切智(sarvajñāna)[117]の中において、恭敬（の心）を起こし、信心が生じ、自ら思惟した。「我は負処に堕ちた。（けれども）世尊は、我が負けたことを（表面に）彰わされないし、是非もいわれないし、（いやな）意を（生じさせ）られない。

〔諸佛二種說法〕

復次諸佛有二種說法。一者觀人心隨可度者。二者觀諸法相。今佛欲說諸法實相故。說是摩訶般若波羅蜜經。如說相不相品中。諸天子問佛。是般若波羅蜜甚深。云何作相。佛告諸天子。空則是相無相無作相無生滅相無行之相常不生如性相

仏は心が柔濡（snigdhacitta）っており、第一清浄（paramaśuddha）であり、あらゆる論議の処が滅して、大いなる甚深の法（mahāgambhīradharma）を得ておられる。是れ（こそ）恭敬べき処である。心が（清）浄なることは第一である。仏は法を説いて、その邪見を断じようとされたのである。すなわち坐処において、塵や垢を遠離しておられる。諸法中に法眼浄（dharmacakṣurviśuddha）[118]を得ておられる」と。

時に舎利弗は、このことを聞いて阿羅漢（果）を得た。この長爪梵志は出家して沙門（śramaṇa）と作り、大力の阿羅漢（果）を得たのである。もし長爪梵志が般若波羅蜜の気分で、四句（分別）（cātuḥkoṭikavarjita）を離れて、第一義（悉檀）の相応の法（paramārthasaṁprayuktā）[119]を聞かなかったならば、小信すらなお得ることはできない。どうして出家の道果（pravrajitamārgaphala）〔阿羅漢果〕を得ることができようか。仏は、これらの大論議師の利（れた機）根の人を（仏法に）導引しようとして、この『般若波羅蜜経』を説かれたのである。

62 b

また次に諸仏には二種の説法がある。一には人の心に随って度すべき者を観るのと、二には諸法の相を観るのとがある。いま仏は諸法実相を説こうとして、この『摩訶般若波羅蜜経』を説かれたのである。相不相品（Lakṣanālakṣaṇa-parivarta）[120]の中に説くごとくである。諸の天子（deva）が仏に問うた。「この般若波羅蜜は甚深（gambhīra）であるのに、ど

寂滅相等。復次有二種說法。一者諍處。二者不諍處。諍處如餘經中說。今欲明無諍處故。說是般若波羅蜜經。有相無相有物無物有依無依有對無對有上無上世界非世界亦如是。問曰。佛大慈悲心但應說無諍法。何以說諍法。答曰。無諍法。皆是無相常寂滅不可說。今說布施等及無常苦空等諸法。皆爲寂滅無戲論故說。利根者知佛意不起諍。鈍根者不知佛意。取相著心故起諍此般若波羅蜜。諸法畢竟空故無諍處。若畢竟空可得可諍者。不名畢竟空。是故般若波羅蜜經名無諍處。有無二事皆寂滅故。復次餘經中多以三種門說諸法。所謂善門不善門無記門。今欲說非善門非不善門非無記門諸法相故。說摩訶般若波羅蜜經。學法無學法非學非無學法。見諦斷法思惟斷法無斷法。可見有對不可見有對不可見無對。上中下法小大無量法。如是等三法門亦如是。復次餘經中說四念處隨聲聞法門。於是比丘觀內身三十六物。除欲貪病。如是觀外身觀內外身。今於四念處。欲以異門說般若波羅蜜。如所說菩薩觀內身。於身不生覺觀不得身。以無所得故。如

うして相（lakṣaṇa）があるのですか」と。仏は諸の天子に告げられた。「空（śūnya）にはすなわちこれ相がある。（それは）無相無作（abhavākriya）の相、無生滅（anutpādānirodha）の相、無行（anabhisaṁskāra）の相、常不生如性（nityājātatathatā）の相、寂滅（nirvāṇa）の相などである」と。

また次に二種の説法がある。一には諍う処（raṇasthāna）と、二には不諍い処（araṇasthāna）とがある。諍う処は余の経の中に説かれている。いま無諍い処を明かすために、この『般若波羅蜜経』を説かれたのである。有相と無相、有物と無物、有依と無依、有対と無対、有上と無上、世界と非世界もまた同様である。

問うていう。「仏は大慈悲心（mahāmaitrikaruṇācitta）であるから、ただ、無諍法（araṇasthāna-dharma）を説くべきである。どうして諍法を説くのか。」と。答えていう。「無諍の法は、みなこれ無相であり常に寂滅であって説くことができない。いま布施（dāna）など（の六波羅蜜）および無常（anitya）、苦（duḥkha）、空（śūnya）などの諸法を説いて、（それらが）みな寂滅（śānta）で無戲論（niṣprapañca）となすために説いたのである。利根の者は、仏の意を知って、諍いを起こさない。鈍根の者は仏の意を知ることなく、相に取り、心に（執）着するから諍いを起こすのである。この般若波羅蜜は諸法が畢竟空であるから、諍う処がない。若し畢竟空（であるもの）で、得ることができたり諍うことがあるなら

是觀外身觀內外身。於身不生覺觀不得身。以無所得故。於身念處中。觀身而不生身覺觀是事甚難。三念處亦如是。四正勤四如意足四禪四諦等。種種四法門亦如是。復次餘經中佛說五衆無常苦空無我相。今於是五衆欲說異法門故。說般若波羅蜜經。如佛告須菩提。菩薩若觀色是常行不行般若波羅蜜。受想行識是常行。不行般若波羅蜜。色無常行不行般若波羅蜜。受想行識無常行不行般若波羅蜜。五受衆五道。如是等種種五法門亦如是。餘六七八等。乃至無量法門亦如是。如摩訶般若波羅蜜無量無邊。說般若波羅蜜因緣亦無量無邊。是事廣故。今略說摩訶般若波羅蜜因緣起法竟。

摩訶般若波羅蜜初品如是

---

ば、畢竟空と名づけない。このゆえに『般若波羅蜜経』を無諍処と名づける。有・無の二事は、みな寂滅するからである。」と。

また次に余の経の中には、多く三種の門をもって諸法を説いている。いわゆる善門（kuśala）と不善門（akuśala）と無記門（avyākṛta）である。いま非善門と非不善門と非無記門の諸法の相を説こうとして『摩訶般若波羅蜜経』を説かれたのである。学法（śaikṣadharma）無学法（aśaikṣadh°）、非学非無学法（naivaśaikṣanāśaikṣa-dh°）、見諦の断法（darśanaheya-dh°）、思惟の断法（bhāvanāheya-dh°）、無断法（aheya-dh°）、可見有対（sanidarśanapratigha）、不可見有対（sanidarśanāpratigha）、不可見無対（anidarśanāpratigha）、上・中・下法、小・大・無量法、これらの三法門もまた同様である。

また次に余の経の中には、四念処（smṛtyupasthāna）を説き、声聞の（ための実践）法門（dharmaparyāya）に随っている。ここ〔四念処〕において、比丘は内身（ādhyātmikakāya）の三十六物[121]を観じ、欲貪の病を除くのである。これと同様に外身（bāhyakāya）を観じ、内外身を観ずるのである。いま四念処（smṛtyupasthāna）において、異門（paryāya）を以って般若波羅蜜を説こうとする。所説のように、菩薩は内身を観ずるのに、身の覚観（kāyasaṁjñā）を生ずることがないならば、身を得ることもない。無所得であるからである。このように外身を観じ、内外身を観ずるに、身の覚観を生ずることがないならば、身を得ることもない。無所

62 c

得であるからである。身念処の中において身を観じ、身の覚観を生じない（という）このことは甚だ難かしい。三念処もまた同様である。四正勤(samyakpradhāna)、四如意足(ṛddhipāda)、四禅(dhyāna)、四諦(satya)など種々の四法門もまた同様である。

また次に余の経の中に、仏は五衆〔蘊〕の無常・苦・空・無我の相を説かれている。いまこの五衆において、異法門を説こうとして、『般若波羅蜜経』を説かれたのである。

仏は須菩提に告げられたように、菩薩は若し色はこれ常行(nityapravṛtti)と観ずれば般若波羅蜜を行じないし、受想行識もこれ常行と観ずれば般若波羅蜜を行じない。色は無常行と観ずれば般若波羅蜜を行じないし、受想行識も無常行と観ずれば般若波羅蜜を行じない。五受衆(upādānaskandha)・五道(gati)の、かくのごとき種々の五法門もまた同様である。

余の六・七・八など、ないし無量の法門もまた同様である。摩訶般若波羅蜜は無量無辺であるように、般若波羅蜜の因縁を説くこともまた無量無辺である。このことは広（大）であるので、いま略して、摩訶般若波羅蜜の因縁の法を起こすことを説きおわる。

摩訶般若波羅蜜の初品はかくの如くである。

〔註〕

（1）相義　実相の義か。当偈第二十二句に「大智彼岸実相義」とある。ラモットは「真実の意味」と解す。

（2）聖衆　聖者の群衆のこと。仏および声聞・縁覚・菩薩を含む。

（3）福田　福徳を生みだす田の意。仏・僧・父母・苦しみ悩む衆生に敬いつかえて施せば福徳を得ることを田に喩えて福田という。仏を大福田、最勝福田といい、仏・僧を敬うを敬田、父母・師の恩に報いるを恩田、貧者・病人を憐れむを悲田といい、あわせて三福田という。

（4）学・無学　（有）学とはすでに四諦の理を了達しているが未だ煩悩を断じ尽しておらず、漏尽を得るために三学を学習するもののこと。有部の教学でいう四向四果の前七階の過程にあるものをいう。無学とは最後の阿羅漢果を得たものの称であって、すでに学ぶもののない境位にあることをいう。広義には、大・小乗を通じて最高の悟りを得たものを指す。

（5）荘厳　うるわしいもので身や国土を飾ることで、『涅槃経』巻二十七では智慧で身を飾る智慧荘厳と布施・持戒等で飾る福徳荘厳を二種荘厳として挙げる。（T一二・七八三a以下）

（6）我所　我所有と同じ。自己に所属するものと執着されるものの意。〔維摩経、巻上〕法無有我離我垢故。法無寿生死故。法無有人前後際断故。……法無我所離我所故。法無分別離諸識故。（T一四・五四〇a）

（7）事業　〔倶舎論、巻二二〕以諸弟子捨俗生具及俗事業。為求解脱帰仏出家。（T二九・一一七a）

（8）真浄　〔法華経・如来神力品〕我等亦自欲得是真浄大法。受持読誦解脱書写。而供養之。（T九・五一c）

（9）救世弥勒仏　慈氏と訳す。仏位を継ぐ補処の菩薩として兜率天にて天人のために説法しているが、仏の予言〔授記〕により、その寿四千歳〔人寿五十六億七千万年〕を経て下生成仏して衆生を済度するといわれる。〔賢愚経、巻十二、波婆離品第五十〕（T四・四三二―四三六）

（10）智慧第一舎利弗　〔増一阿含経、第三〕智慧無窮。決了諸疑。所謂舎利弗比丘是。（T二・五五七b）

（11）無諍　阿蘭那は音写。論争しないこと。〔維摩経・弟子品〕汝得無諍三昧。一切衆生。亦得是空。（T一四・五四〇c）

（12）空行　欲界・色界の一切の物質的な形態を離れ無辺の空を観ずる境地。空無辺所定のこと。〔注維摩経、第五〕行心平等者。則入空行。（T三八・三七六c）

（13）無諍空行須菩提　十大弟子中、解空第一として知られ、仏は須菩提をして般若の空理を説かしめる〔増一阿含経、第三〕恒楽空定。分別空義。所謂須菩提比丘是。（T二・五五八b）

（14）如力　わたしの力を尽しての意か。慧影は『智度論釈』に「斉我所知。随力随分。欲演斯指。故如力等也」という。

(15) 無事　原因・理由のないこと。〔倶舎論、巻二五〕見所断惑計有我等。非諸諦境有我等相。以無事故。（T二九・一二九c）

(16) 中阿含本末経　中阿含、第六六経『説本経』（T一・五〇八）のことか。

(17) (授)記　仏が菩薩・弟子に未来世における成仏の保証を与えること。記別、授決ともいう。

(18) 念仏三昧　〔大方等大集経、菩薩念仏三昧分七〕若諸菩薩摩訶薩欲得成就諸仏所説念仏三昧欲得常覩一切諸仏承事供養彼諸世尊欲得疾成阿耨多羅三藐三菩提（T一三・八五六c）

(19) 端正殊妙　〔観普賢菩薩行経〕身相端厳。如紫金山。端正微妙。（T九・三九八b）

(20) 『摩訶般若波羅蜜経』第一序品では、

爾時世尊在師子座上、座、於三千大千国土中、其徳特尊、光明色像・威徳巍々・遍至十方如恒河沙等諸仏国・譬如須弥山王光色殊特、衆山無能及者。……我得阿耨多羅三藐三菩提時、十方如恒河沙等世界中衆生聞我名者、必須阿耨多羅三藐三菩提。欲得如是等功徳者、当学般若波羅蜜（T八・二一九c―二二一a）

と見える。ただしこの初品には念仏三昧のことはみられない。

(21) 四顧　〔荘子、天地〕方且四顧而物応。

大智度論和訳（中祖・諏訪・大野・吉田）

(22) 最末後身　最後有、最後身ともいう。生死の世界における最後の生存の意で阿羅漢位にあること。

(23) 観見　〔韓非子、外儲説左上〕王曰吾欲観見之。〔中阿含経、第二〇〕従頭至足。観見種々不浄充満（T一・五五六a）

(24) 由旬　インドの里程の単位。八または四倶盧舎（krośa＝大牛の吼声の聞き得る距離）を一由旬とし、軛（くびき）をつけた牡牛の一日の旅程とするが諸説あり一定でない。

(25) 跋伽婆　世尊出家してこの師を訪い教を受けたという。〔仏本行集経、巻二〇〕（T三・七四五a）

(26) 僧伽梨　大衣のこと。街や王宮に入る時に着る衣である。

(27) 智慧功徳力　〔法華経・薬王菩薩本事品〕此菩薩成就。如是功徳智慧之力。（T九・五四b）

(28) 一切智人　〔十住婆沙論、四十不共法難一切智人品〕（T二六・七三c）。〔真諦・倶舎釈論、巻二三〕若爾仏世尊。不応成一切智人。何以故。無有心及心法。能知一法刹那刹那生滅故。（T二九・三〇六b）

(29) 般若波羅蜜初品中説　末詳。

(30) 千輻輪　仏の具える三十二相の一つで、足裏にある千の車輻をもつ輪の紋様であること。一切を駕御する法王の相を示す。『観無量寿経』に「足下有千輻輪相」とある。また『仏所行讃』巻一（T四・二c）等に出ず。

(31) 仏入三昧王三昧　……皆令大明　『摩訶般若波羅蜜経』第一

序品には、

（世尊）入三昧王三昧、一切三昧悉入其中。是時世尊、従三昧、安詳而起、以天眠観視世界。挙身微笑。従足下千輻相輪中、放六百万億光明、足十指両踝……肉髻、各各放六百万億光明。……普照三千世界。（T八・二一七b）

と見える。疑結九結（愛・恚・慢・無明・見・取・疑・嫉・慳の各結）の一つ。

(32) 貢高　〔維摩経・仏道品〕我心憍慢者。為現大力士。消伏諸貢高。令住無上道。（T一四・五五〇b）

(33) 特尊　〔法華経・信解品〕威徳特尊。（T九・一六c）

(34) 覆護　〔勝鬘経、第一〕哀愍覆護我。（T一二・二一七b）

(35) 十力　仏の全智者であることを示す。十の智慧力。〔大智度論、巻二五〕問曰。仏有十力四無所畏。菩薩有不。答曰有。何者是。一者発一切智心堅深牢固力。二者具足大慈。故不捨一切衆生力。三者不須一切供養恭敬利。故具足大悲力。四者信

(36) 四無所畏　仏菩薩が法を説く時に畏れをもたない四種の智慧のこと。

(37) 聖主　〔法華経・見宝塔品〕聖主世尊。雖久滅度。在宝塔中。（T九・三三c）

(38) 三十七（道）品　涅槃を実現する智慧を得るための三十七の実践の道。四念処、四正勤、四如意足、五根、五力、七覚支、八正道。

(39) 大医王　仏の異名、仏が衆生の機根に従って法を説くことを名医に喩えていう。〔無量義経〕医王大医王。分別病相。暁了薬性。（T九・三八四c）

(40) 華上仏　華台上本仏（毘盧遮那仏）のこと。

(41) 金山　〔法華経・序品〕身色如金山。端厳甚微妙。（T九・四a）

(42) 密迹経　不詳。

(43) 三密　身口意の三つのはたらきが仏のはたらきとなるとき不可思議の力として顕現することをいう。

(44) 言　〔有部毘奈耶雑事、巻二〇〕菩薩生時帝釈親自牛承置蓮花上不仮扶。侍（＝持）足踏。七花行七歩已。遍観四方手指上下作如是語。此即是我最後生身。天上天下唯我独尊。梵王捧傘大帝執払。於虚空中龍王注水。（T二四・二九八a）

(45) 身分　身体のなりたち、特徴のこと。〔倶舎釈論〕初名柯羅邏（kalala）。次生頞浄陀（arbuda）。従此生俾尸（peśi）。此生伽那（ghana）。伽那生捨指。及髪毛爪等。幷有色諸根。次第生身分。（T二九・二〇四c）

(46) 人法　〔雑阿含経、第四八〕時彼天子説偈問仏。与何人同処。復与誰共事知何等人法名為勝非悪。爾時世尊説偈答曰。与正士同遊。正士同其事。解知正士法。是則勝非悪。（T二・三五四c）

(47) 五欲　五根の対象である色声香味触の五をいい、総じて感覚的欲望の対象全般を指す。〔大智度論、巻一七〕哀哉衆生。常為五欲所悩而、求之不已。此五欲者得之転劇。如火炙疥。(T二五・一八一a)

(48) 鬱特伽・阿羅洛　仏在世時の修定家。仏陀出家の後、まず阿仙に就いて空無辺処定を修し、ついで鬱仙の下で非想非非想処定を了じたが、そのいずれにも満足せず両師の下を去ったという。一説には両師とも数論師であったとも伝える。〔仏所行讃、第一二〕(T四・二二以下)

(49) 二辺　中道を離れた二つの極端に執することで、有無、常無常等に執われること。〔中論、巻四〕若天即是人則堕於常辺天則為無生　常法不生故。若天異於人　是即為無常　若天異人者　是則無相続。若半天半人　則堕於二辺　常及於無常是屋則不然。(T三〇・三八b)

(50) 有為道　作為、造作を有するもののことで、因縁和合によって造作された現象的世界の諸存在をいう。永久不変の絶対的存在である無為に対するもの。〔倶舎釈論〕此五蘊摂一切有為、已至聚集因縁所作、故名有為。(T二九・一六二c)

(51) 第一義　勝義、真諦ともいう。最高の法、道理、究極の真理であり、(世)俗諦に対して勝義諦という。〔中論、巻三〕無我無我所者。於第一義中亦不可得。無我無我所者。能真見諸法。凡夫人以我我所障慧眼故不能見実。(T三〇・二四c)

(52) 舎利塔品　不明。

(53) 阿鞞跋致　不退(転)の意で、退とは退歩、退堕のことで悪趣や二乗地に退堕して菩薩位を失うこと。〔大智度論、第二九〕有菩薩。未入菩薩位。未得阿鞞跋致受記別故。若遠離諸仏。便壊諸善根没在煩悩。(T二五・二七五c)

(54) 魔　人の生命を奪い、善事をさまたげる魔のこと。本論第五巻では諸法実相を除くすべてを魔としている。

(55) 記別　授記のこと。修行者(菩薩・弟子)が未来において悟りを得ることを仏が予言し保証を与えること。

(56) 無余涅槃　部派仏教では涅槃を分けて有余涅槃と無余涅槃に分ける。前者は煩悩はすでに断じ尽しているが残余の依身すなわち肉体はなお残存する状態をいい、後者はすべてが滅した状態(灰身滅智)をいう。大乗では必ずしもこれを最高位の涅槃とせずその上に無住処涅槃をおき、涅槃の境地に停滞しないことを理想とする。

(57) この授記の内容は、インドにおける般若経流伝の経路を明かす記事として重視されてきたが、般若経南方起源の確証はなお見出し難い。現在では北方有部との関連性がむしろ注目されている。

(58) 四種悉檀　siddhānta の音写、悉檀とは教えの立て方・宗義・定説の意で、仏は衆生をして仏道を成就させる方法として以下に挙げられる四種の宗義を立てたのである。

た。

(59) 十二分経　十二部経ともいう。仏典の内容を叙述の形式から十二に分類したもの。(1)修多羅（契経）sūtra、(2)祇夜（重頌）geya、(3)伽陀 gāthā、(4)尼陀那（因縁）nidāna、(5)伊帝目多伽（本事）itivṛttaka、(6)闍多伽（本生）jātaka、(7)阿浮達磨 adbhuta-dharma、(8)阿波陀那（譬喩）avadāna、(9)優婆提舎（論議）upadeśa、(10)優陀那（自説）udāna、(11)毘仏略（方広）vaipulya、(12)和伽羅（授記）vyākaraṇa の十二分類をいう。

(60) 八万四千法蔵　八万四千という数は数の多いことを表わす。法蔵は法聚ともいい仏の教えの蔵、集まりということで仏の説かれた教えの無尽蔵であることをいっている。

(61) 経　不明。

(62) 法句（経）　漢訳では『法集要頌経』巻二（T四・七八八c）の己身品に相当する。

(63) 神　我・我者・己・自・性・自性・身・自身・体・体性・己体・神・神我・自己・我体などと漢訳される。なお、漢字の「神」は、たましい・こころ・性などの義がある。『法集要頌経』の本文は「自己心為師、不随他為師、自己為師者、獲真智人法」とある。〔註〕(106) 参照

(64) 瓶沙王迎経　不明。『仏書解説大辞典』巻九には「瓶沙王経」の項があり、これは欠本、失訳とされ、参考として出三蔵記三、四、法経録三、仁寿録五、静泰録五、開元録四・十五、貞元録六・二五を挙げている。

(65) 二夜経　不明。

(66) 般涅槃　円寂と訳す。釈尊の入滅を指す。

(67) 如如　ありのままの真実、そのようにあること、真如に同じ。五法の一。

(68) 法性　諸法の真実なる本性、存在の真実性、本来のすがた。

(69) 実際　存在の究極的すがた。真如・如如・法性に同じ。

(70) 仮りの名（仮名）　仮説・施設ともいい、仮に立てて名づけられたもの。〔中論巻二二〕空則不可説　非空不可説　共不共巨説　仮以仮名説（T三〇・三〇b）。〔同巻二四〕衆因縁生法　我説即是無　亦為是仮名　亦是中道義（T三〇・三三b）

(71) 心行　心のはたらき、心に起こる分別意識、善悪の所念。

(72) 経　不明。

(73) 雑報業　鬼畜、人天・四生（卵胎湿化）のような雑多の苦果を感ずる業因。

(74) 破群那経　破群邪経か。題名と内容から破外道四宗論（提婆菩薩破楞伽経中外道小乗四宗論）や破外道小乗涅槃論（提婆菩薩釈楞伽経中外道小乗涅槃論）、是法非法経や邪見経の類を想起せしめる。

(75) 断滅見　断見に同じ。世間や我の断無を執する辺邪の見。人

間の死後、再生したりすることなく、また善悪の行為やその報いもないと執する妄見。常見の対。

(76) 破群那　ここでは経名ではなかろう。一説にArjunaの別名というから外道の固有名詞と思われる。

(77) 我　自我、常一主宰、己我の主体、不変・不動・無活動の霊体。

(78) 神　purusa 神我、(77)の我と同じ。数論などに説く。〔百論巻上・破神品〕神為主常、覚相、処中、常住不壊不敗、摂受諸法（T三〇・一七〇c）とある。

(79) 計　計度。分別して事物を考えること。「計有我」「計我我所」などの用法があり、妄念により邪に道理を推し計ること。

(80) 有法　有というもの、有るもの、体用の無ならざるもの。無法の対。

(81) 対治　智慧により煩悩を断ずること。対症療法的な煩悩を断ずる方法として「五停心観」や「四念処観」などがある。

(82) 不浄観　五停心観の一、四念処中の身念処。九想・五種不浄など、身体の不浄を観じて貪欲を治すこと。

(83) 慈心　慈悲観を指す。五停心観の一。慈悲の念をもって瞋恚を治すこと。

(84) 因縁観法　縁起観を指す。五停心観の一。十二縁起を観じ、愚痴を治すこと。

(85) 邪観　観ずる心と観ずるものが相応しないこと。正観の対。

(86) 細心巧慧　細心にしてたくみでさといこと。巧慧は巧敏ともいう。

(87) 相似相続　相続している如くであること。〔玄奘訳・倶舎論、巻一〕「相似相続説随流、善与不善名浄不浄、為簡諸得相似相続」とある。実際は、無常であり、相続していない。

(88) (観)無常　四念処の一、心念処。心は無常であると観ずること。

(89) 有為法　形成されたもの、またそのあり方。因縁によって作られたあらゆるもの。

(90) 行業　行為、身口意の所作、修行。業異熟ともいい、行為の結果が熟すること。

(91) 破散　破は破斥、散は分散の意。〔阿毘達磨倶舎論巻、第二〕若言相触。二手相槌則応相著。石投石亦爾。若爾微聚相槌云何不散。風界所持故。何以故。有風界能破散。（T二九・一七一b）

(92) 変易　生滅変化して移りかわること。時間的経過によって変化すること。〔阿毘達磨倶舎論、巻第二二〕若先無苦於最後時。何為欲然生於苦覚。由身変易分位別故。如酒等後時有甘醋味起。是故楽受実有理成。由此定知。（T二九・一一六a）

(93) 衆義経　失訳。ただし〔阿毘曇毘婆沙論、巻第一六〕（T二八・一一八a）に名目を出し、また巻第一八（T二八・一三

三c）には、『大智度論』の偈とは異なっているが、『衆義経』の偈を引いている。

(94) 戯論起諍競　〔法華経、巻第五・安楽行品〕又亦不応戯論諸法。有所諍競。（T九・三八b）

(95) 受法　〔阿毘達磨倶舎論、巻第一二〕又不可説彼無慈悲。為摂有情現神通故。又不可説無受法機。爾時有情亦有能起世間離欲対治道故。（T二九・六四b）

(96) 甘露味　仏法の妙法・妙味を表現する際の譬喩として用いられる。

(97) 五熱　地獄のことで、罪業によっていたる極苦の処所をいう。五熱とは、(1)等活（鉄棒や利刀）、(2)黒縄（熱鉄の縄で縛る）、(3)衆合（赤熱のくちばしをもつ鷲など）、(4)叫喚（熱湯の大釜や大火）、(5)大叫喚をいう。これに(6)極熱・(7)無間を加えて八大熱地獄・八熱地獄という。

(98) 尼犍子　尼健陀・尼乾陀・泥犍連他・呢揭爛陀・尼乾に作り、離繫・無繫・不繫・無結・無縛と訳す。ジャイナ教徒の裸形外道（無縛外道・露形外道）で、裸体で修行する修行者のこと。外道四執の一、外道十六宗の一、二十種外道の一に数えられる。〔四分律、巻第七〕（T二二・六〇八c―六〇九c）。〔究竟一乗宝性論、巻第三〕（T三一・八二八c）。〔阿毘曇毘婆沙論、巻第五三〕（T二八・三八三c）。〔法華経、巻第五・安楽行品〕（T九・三七a）などに引く。

(99) 犢子比丘　犢子部 Vātsīputrīya の祖である。仏陀在世当時の人で、舎利弗の法系を受け継ぐ小乗二十部の一である。〔異部宗輪論〕には、「有犢子部本宗同義。謂補特伽羅非即蘊離蘊。依蘊処界仮施設名。諸行有暫住。亦有利那滅諸法若離補特伽羅。無従前世転至後世。依補特伽羅可説有移転」（T四九・一六c）と記している。『大智度論』の引文と直接重ならないが、大体において同趣旨の文である。文中の「補特伽羅」は、pudgala の音写であり、生まれ変わり死に変わる主体のことをいう。外道の六十二見の一に数えて我の異名ともする。仏教は無我を説くから、一般に生死する主体としての実の補特伽羅の実在を認めない。ただ人を仮に補特伽羅と名づけるに過ぎないとする。ただし、部派仏教において、この犢子部や、他に正量部・経量部などではこれを認める。

(100) 犢子（比丘）阿毘曇中　〔阿毘達磨大毘婆沙論、巻第一一〕問何故作此論。等為止他宗顕己義故。謂或有執補特伽羅。自体実有。如犢子部。彼作是説。我許有我。可能憶念本所作事。先自領納今自憶故。若無我者。何縁能憶本所作事（T二七・五五a）と述べる。『大智度論』の引文と違っているが、趣旨内容は同様である。

(101) 第五不可説法蔵中　犢子部の主張とするところを表詮した語であり、「非即非離蘊の我をたてる」ことをいう。この非即非離の我によって、諸法は前世より転じて後世に至ることを

得るとなし、また仏陀が無我と説くのは、外道の説く即蘊離蘊の我が無いということであって、非即非離の我が無いというのではないという。「第五不可説法蔵」とは、一切所知の法を分類して、過去・未来・現在・無為・不可説の五種の法蔵を挙げる。有為法を分けて、過去・未来・現在の三法蔵とし、無為法は三世ではないので、別に一蔵を立てる。非即非離の補特伽羅は、有為、無為に摂すべきものでないので、第五に不可説法蔵を立てる。古来よりこの犢子部の補特伽羅実有の説を破斥し、これを付仏法の外道と称する。五法蔵の説は、〔大般若波羅蜜多経、巻第四九〇〕(T七・四八九c—四九〇b)、〔十住毘婆沙論、巻第一〇(T二六・七三c)などに説かれている。

(102) 説一切有道人輩　説一切有部に属する論師のことである。小乗二十部の一であり、上座部に属する。三世一切法皆実有の説に依処するのでこの称がある。〔異部宗輪論〕には、「説一切有部本宗同義者。謂一切有部諸是有者。皆二所摂。一名二色。過去未来体亦実有。一切法処皆是所知。亦是所識及所通達。生老住無常相。心不相応行蘊所摂。有為事有三種。無為事亦有三種。三有為相別有実体三諦是有為。一諦是無為。四聖諦漸現観。依空無願二三摩地。俱容得入正性離生思惟。欲界行入正性離生」(T四九・一六a—b)と説く。

(103) 神人　「神」には多種の意味がある。①霊妙な働きをもつもの、神々のことをいい、龍神・阿修羅神・樹神などをいう。〔長阿含経、巻第二〕(T一・一二b)。〔那先経〕(T三二・六九四a)など。②心・たましい・精神。〔無量寿経〕(T一二・二六五c)。③生きもの・生命あるもの。〔雑阿含経、巻三八〕(T二・二八一a)。④霊魂・たましい・アートマン(我)のこと。〔那先経〕(T三二・六九八a)。〔中論釈〕(T三〇・一三b)。⑤識別作用をいい、十二因縁の第三の識のこと。〔法句経・心意品〕(T四・五六三a)。〔那先経〕(T三二・七〇二c・七一一b・七一八b)。「神人」とは神我ātmanすなわち「衆生神我」〔雑阿含経、巻第一〇〕(T二・四四四c)のことか。霊魂が死後に生存するか否かが『阿含経』などで盛んに論議されている。とくにサーンキヤ学派やヴァイシェーシカ学派の説であるが、三世一切法の実有を説く説一切有部でも用いられたようである。

(104) 方広道人　方広は大乗の異称である。大乗仏教徒でありながら、空の真義を知らず、無と誤解している人をいう。〔華厳経疏、巻第二八〕(T三五・七一三a)には、仏教中の外道の一種としている。

(105) 譬えば、〔中論、巻第三〕(T三〇・二五b)、〔六十華厳経、巻第五〕(T九・四二四c)などにも説かれている。

(106) これは四句分別である。四句分別とは、存在に関する四種の分類法。ものの在り方を分ける四種の範疇をいう。

(107) 諸法実相　すべての存在の真実の在り方を表詮する語である。すなわちすべての存在のありのままの姿をいう。〔法華経、巻第一・方便品〕に、「仏所成就。第一希有。難解之法。唯仏与仏。乃能究尽。諸法実相」（T九・五c）。〔大品般若経、巻第二〕には、「菩薩摩訶薩如是行般若波羅蜜時。但知諸法実相。諸法実相者。無垢無浄」（T八・二三一b）とある。ほかに〔維摩経〕（T一四・五五六b）、〔華厳経、巻第五六〕（T九・七五五c）に説かれる。

(108) 長爪梵志　仏弟子の一人に数えられ、その爪が長いことよりこの名が与えられた。『大智度論』と同趣旨の文が、〔撰集百縁経、巻第一〇・長爪梵志縁〕（T四・二五五a—二五六b）にある。『大智度論』では、摩訶倶稀羅 Mahākauṣṭhilya は、長爪梵志の出家名としているが、〔雑阿含経、巻第三四〕には別人としている。他に長爪梵志について、〔大品般若経、巻第三〕（T八・二三六a—b）、〔別訳雑阿含経、巻第一一〕（T二・四四九a—b）、〔長爪梵志請問経〕（T一四・九六八a—c）、〔大毘婆沙論、巻第九九〕（T二七・五一〇a—b）などに記されている。

(109) 先尼婆蹉衢多羅　外道の一人で、犬や牛のような行いをすることを行とする（犬戒・牛戒行者）ことによって生天の因と考える徒であったが、後に仏弟子となる。〔倶舎論、第一九巻〕（T二九・一〇〇b）に狗戒、牛戒行者の記事がある。

(110) 薩遮迦摩犍提　初めヂャイナ教徒であったが、のち仏陀に会い仏弟子になる。〔雑阿含経、第五〕（T二・三五a）に薩遮尼犍子の名で登場する。

(111) 閻浮提　須弥山の南方にある大陸で、四大州の一つである。須弥山を中心に人間世界を東西南北に分け、閻浮提は南州で、十六の大国・五百の中国・十万の小国から成っており、諸仏が出現するのは、この南州のみという。北に広く、南に狭い地形で、縦横七千ヨージャナあるといい、元来はインドの地を指していたが、後にはわれわれの住む娑婆世界・人間世界をいうようになった。〔長阿含経、巻第一八・閻浮提洲品〕（T一・一一四b—一一九b）、〔維摩経〕（T一四・五四六b）などに説かれる。

(112) 舎利弗本末経　この経は失訳であるが、この記事は、〔撰集百縁経、巻第一〇〕（T四・二五五a—二五六b）に伝えられている。

(113) 十八種（類）大経　バラモン教の聖典のことで、四ヴェーダ（Veda）・六論・八論の十八部からなる。四ヴェーダとは①Ṛg-veda（讃頌）②Yajur-veda（歌頌）③Sāma-veda（祭祀）④Atharva-veda（攘災）をいい、六論とは六つの補助学のことで⑤Śikṣā（音韻）⑥Vyākaraṇa（語法）⑦Kalpa（祭式）⑧Jyotiṣa（天文）⑨Chandas（詩法）⑩Nirukta（語源）をいい、八論とは、⑪Mīmāṁsā（哲学）⑫Nyāya

（論理）⑬ Itihāsaka（古事）⑭ Sāṁkhya（数目）⑮ Yoga（修習）⑯ Dhanur-veda（弓杖）⑰ Gandharva（音楽）⑱ Artha-śāstra（医薬）をいう。〔金七十論、巻上〕、〔仏本行集経、巻第三〕、〔大宝積経、巻第五四〕などに説かれるが、異説あり。〔百論疏〕（T四二・二五一a）参照。

(114) 那羅聚落　マガタ国の迦羅臂拏迦邑 kālapināka, kālapiṇāka のこと。赤沼智善『印度仏教固有名詞辞典』には Nālaの別名であろうとされる（四三八ページ）。この地はのちに那爛陀寺が建立された。現在のビハール州バラガオン村である。

(115) 好馬鞭影即覚便著正道　この語は天台智顗が、『法華玄義』『摩訶止観』中にしばしば引用している。たとえば、〔法華玄義、巻第八下〕には、「若初聞教如快馬見鞭影。即入正路者」（T三三・七八四b）とある。

(116) 二処負門　論議に負けることをいい、堕負・堕負門ともいう。二処とは、麁悪語と細密語をいい、前者が非論理的であるのに対して、後者は理論的であることをいうが、何れも理論に留める限り、仏教においては負門とする。

(117) 一切智　skt, sarvajñā の訳で、薩婆若（多）と音写し、すべての存在に関して該括的に知る智慧を「一切智」という。三智の一である。菩薩が衆生教化のために道の種別を知りつくす智慧を「道種智」といい、すべての存在が平等の相に即して、差別の相を精細に知る知慧を「一切種智」といい、それぞれ声聞や縁覚・菩薩・仏の智慧とする。〔大品般若経、巻第一〕（T八・二一九a—b）、〔方広大荘厳経、巻第四〕（T三・五六〇b）、〔六十華厳経、巻第三五〕（T九・六二三c）などに説かれる。

(118) 法眼浄　五眼の一つで、浄法眼・清浄法眼などという。真理を見る眼の清浄なることである。小乗では見道（初果・預流向）に入ったとき、初めて四諦の理を明了にみることをいい、大乗では初地において無生法忍を得るとして、五眼中の法眼を大乗の法眼浄とする。〔雑阿含経、巻第一〇〕（T二・一〇四a）、〔法華経、巻第七・本事品〕（T九・六一a）、〔維摩経〕（T一四・五三九a）などに説かれる。

(119) 相応法　相応については、〔大品般若経、巻第一・習応品〕（T八・二二一c—二二五a）に詳しく説かれ、とくに般若波羅蜜と相応する諸相について述べ、つづいて、「是の空の相応の名は、第一相応と為す」（T八・二二四c）と、空の相応を究竟とする。

(120) 相不相品　〔大品般若経、巻第一・習応品〕（T八・二二一c—二二五a）のこと。

(121) 三十六物　人間の身体の内にある三十六種の不浄物で、外相十二、身器十二、内含十二をいう。諸説不同あり。

摩訶般若波羅蜜初品如是

我聞一時釋論第二

〔如是―信力〕

經如是我聞一時　論問曰。諸佛經何以故初稱如是語。答曰。佛法大海信爲能入。智爲能度。如是義者卽是信。若人心中有信淸淨。是人能入佛法。若無信是人不能入佛法。不信者言是事不如是。是不信相。信者言是事如是。譬如牛皮未柔不可屈折。無信人亦如是。譬如牛皮已柔隨用可作。有信人亦如是。復次經中說信如手。如人有手入寶山中自在取寶。有信亦如是。入佛法無漏根力覺道禪定寶山中。自在所取。無信如無手。無手人入寶山中。則不能有所取。無信亦如是。入佛法寶山。都無所得。佛言。若人有信。是人能入我大法海中。能得沙門果不空。剃頭染袈裟。若無信是人不能入我法海中。如枯樹不生華實。不得沙門果。雖剃頭染衣讀種種經能難能答。於佛法中空無所得。以是故。如是義在佛法初。善信相故。復次佛法深遠。更有佛乃能知。人有信者雖未作佛。以信力故能入佛法。如梵天

---

摩訶般若波羅蜜の初品の「是の如く我聞けり。一時」の釈論第二

63 a

經是の如く我聞けり。一時。(evaṁ mayā śrutam ekasmiṅ samaye) 論問うていう。「諸仏の（説かれた）経は、なぜ初めに『是の如く(evam)』と。いう語を称えるのか。」と。答えていう。「仏法の大海(mahāsamudra) は信 (śraddhā) によって能く入ることができ、智 (jñāna) によって能く度ることができる。『是の如く』の義は即ち信ということである。若し人の心中に信 (śraddhā) が清浄 (viśuddhi) であればその人は能く仏法に入ることができる。若し信がなければ、その人は仏法に入ることができない。不信というのは、この事がこのようでないことをいう。これが不信の相 (āśrāddhyalakṣaṇa)〔特徴〕である。信というのは、この事がこのようであることである。譬えば、牛皮が未だ柔らかでないと折り曲げることができないように、信のない人もまたこれと同様である。譬えば、牛皮が已に柔らかであると用途に随って（自在に）作りなすことができるように、信のある人もまた同様である。」と。

また次に、経の中に信は手のようなものであると説いている。人は手があれば宝の山 (ratnaparvata) の中に入って自在に宝 (ratna) を取ることができるようなものである。信があればまた同様である。仏法の無漏なる根 (anāsravendriya)・力 (bala)・覚道 (bodhimārga)・禅定[1] (dhyā-

王請佛初轉法輪。以偈請佛。

閻浮提先出　多諸不淨法
願開甘露門　當說清淨道

佛以偈答。

我法甚難得　能斷諸結使
三有愛著心　是人不能解

梵天王白佛。大德。世界中智有上中下。善濡直心者。易可得度。是人若不聞法者。退墮諸惡難中。譬如水中蓮華。有生有熟。有水中未出者。若不得日光則不能開。佛亦如是。佛以大慈悲憐愍衆生故爲說法。佛念。過去未來現在三世諸佛法皆度衆生爲說法。我亦應爾。如是思惟竟。受梵天王等諸天請說法。爾時世尊以偈答曰。

我今開甘露味門　若有信者得歡喜
於諸人中說妙法　非惱他故而爲說

佛此偈中不說布施人得歡喜。亦不說多聞持戒忍辱精進禪定智慧人得歡喜。獨說信人。佛意如是。我第一甚深法微妙無量無數不可思議不動不猗不著無所得法。非一切智人則不能解。是故佛法中信力爲初。信力能入。非布施持戒禪定智慧

---

na) の宝の山の中に入って自在に（これらを）手に入れられる。信がないのは手がないようなものだ。手のない人は宝の山の中に入っても、手にいれられるものをもつことができない。信のないことも、またこれと同様である。仏法の宝の山に入ってもまったく得るところがない。仏はいわれている。「若し人に信があれば、この人は能く我が大いなる法の海の中に入って、能く沙門の果報[2] (śrāmaṇyaphala) を得て空しいということがない。頭を剃り、袈裟 (kāṣāya) を染めていても若し信がないならば、この人は我が法の海の中に入ることができない。枯れた樹が華や実を生じないように、沙門の果報を得ることが出来ない。頭を剃り、衣を染めて、種々の経を読み、能く（他を）論難し、能く（他の論難に）答えることができても、仏法の中において空しく、得るところがないであろう。」と。このようなわけで、「是の如く」という義が仏法の初めにあるのである。善く信ずることの相であるからである。

また次に、仏法は深遠 (gambhīra) である。更に仏にしてはじめて能く（これを）知り給うのである。人に信があれば、未だ仏に作らなくても、信の力があるから能く仏法に入ることができる。梵天王 (Brahmadevarāja) が、仏に初めに法輪を転ずること[3] (dharmacakrapravartana) を請うたようなものである。偈をもって仏に請うている。

閻浮提[4] (Jambudvīpa) は先に出ずるも。

諸の不浄の法多し。

等能初入佛法。如説偈言。

世間人心動　愛好福果報
而不好福因　求有不求滅
先聞邪見法　心著而深入
我此甚深法　無信云何解

如提婆達大弟子倶迦梨等。無信法故墮惡道中。是人無信於佛法。自以智慧求不能得。何以故。佛法甚深故。如梵天王教倶迦梨説偈。

欲量無量法　智者所不量
無量法欲量　此人自覆沒

願くは甘露（amṛta）の門を開きて、
当に清浄の道を説くべし。
仏は偈をもって答えられた。
我が法甚だ得難し、
能く諸の結使（saṁyojana）を断ずれども、
三有(5)に愛着せる心（tribhavatṛṣṇā-citta）あらば、
是の人解すること能はず。

梵天王は仏にいった。「大徳（bhadanta）よ。世界（lokadhātu）の中の智（jñāna）に上・中・下がある。善濡で直心（susnig-dharjucitta）な者は得度することが易しい。この人が若し法を聞かなかったならば、諸の悪難の中に堕ちてしまうであろう。譬えば、水中の蓮華（utpala）に生いものがあり、熟したものがあり、未だ水中から出ないものがある。若し日光がなかったならば開くことができない。仏もこれと同様である。仏は大いなる慈悲心（mahāmaitrikaruṇā）をもって衆生を憐愍み給うがゆえに法を説き給うたのである。」と。仏は「過去（atita）・現在（anāgata）・未来（pratyutpanna）の三世（tryadhvan）の諸仏の法は皆、衆生（sattva）を度わんがために法を説いたのである。我れもまた同じようにしよう。」と念われた。このように思惟しおわって、梵天王等の諸天の（勧）請（adhyeṣaṇā）を受けて法を説き給うたのである。その時、世尊は偈をもって答えていわれた。

63 b

我今甘露味の門（amṛtadvāra）を開けり、
若し信ある者らば歓喜（pramoda）を得ん。
諸人の中に於て妙法（saddharma）を説くは、
他を悩ますんとして故に説くには非ず。

仏はこの偈の中で布施をする人（dāyāka）が歓喜を得るとは説いていない。また、多聞（bahuśruta）・持戒（śīla）・忍辱（kṣānti）・精進（vīrya）・禅定（dhyāna）・智慧（prajñā）ある人が歓喜を得るとも説いていない。ただ、「信ある人は」と説いている。仏の意はこのようなものである。「我が第一で（parama）甚だ深い法（gambhīradharma）は、微妙（sūkṣma）・無量（apramāṇa）・無数（asaṁkhyeya）・不可思議（acintya）・不動（acala）〔動じないこと〕・不倚（anāśraya）・不著（nirāsaṅga）・無所得（nirālambana）の法であって、一切智（sarvajña）の人でなければ解することができない。だから、仏法の中で信の力を第一とするのである。信の力（こそ）能く（仏法に）入ることができるのである。布施（dāna）・持戒（śīla）・禅定（dhyāna）・智慧（prajñā）などによって初めてよく仏法に入るのではない。偈に説かれているとおりである。

世間の人は心動じて、
福の果報（phala）を愛好す。
而も福の因（hetu）を好まず、
有（bhāva）を求めて滅（nirvāṇa）を求めず。

〔如是―不諍法〕

復次如是義者。若人心善直信。是人可聽法。若無是相則不解。如所説偈。

聽者端視如渇飲　一心入於語議中
踊躍聞法心悲喜　如是之人應爲説

復次如是義在佛法初。現世利後世利涅槃利。諸利根本信爲大力。復次一切諸外道出家心念。我

先に邪見（mithyādṛṣṭi）の法を聞きて、
心著して深く入れり。
我が此の甚深の法は、
信なくして云何ぞ解せんや。

提婆達（多）（Devadatta）の大弟子である俱迦離[6]（Kokālika）などは法を信ずることがないから悪道（durgati）に堕ちたのである。この人は仏法を信ずることなく、自らの智慧をもって求めたけれども、得ることができなかった。なぜかというと、仏法は甚深で（gambira）あるからである。梵天王が俱迦離に教えて次のように説いている。

無量（aprameya）の法を量らんと欲すれども、
智者も量らざるところなり。
無量の法を量らんと欲せば、
此の人は自ら覆没せん。[7]

また次に、「是の如く」の義は、若し人の心が善く直で信があれば、この人は法を聴くことができる。若しこの相がなかったならば（仏法を）解すことができない。偈に説かれているとおりである。

聴く者、端視して渇飲するが如く、
一心に語議の中に入り、
踊躍して法を聞きて心悲喜す。

法微妙第一清淨。如是人自歎所行法。毀他人法。是故現世相打鬪諍。後世墮地獄。受種種無量苦。如說偈。

自法愛染故　　呰毀他人法
雖持戒行人　　不脫地獄苦

是佛法中。棄捨一切愛一切見。一切吾我憍慢。悉斷不著。如栰喩經言。汝曹。若解我栰喩法。是時善法應棄捨。何況不善法。佛自於般若波羅蜜不念不猗。何況餘法有猗著者。以是故佛法初頭稱如是。佛意如是。我弟子無愛法無染法無朋黨。但求離苦解脫不戲論諸法相。如說阿他婆耆經。摩犍提難偈言。

決定諸法中　　橫生種種想
悉捨內外故　　云何當得道

佛答言。

非見聞知覺　　亦非持戒得
非不見聞等　　非不持戒得
如是論悉捨　　亦捨我我所
不取諸法相　　如是可得道

摩犍提問曰。

是の如き人にまさに説くべし。

また次に、「是の如く」の義は仏法の初めにある。現世の利(ihalokasukha)と後世の利(amutrasukha)と、涅槃の利(nirvāṇasukha)との諸の利の根本は信を大力とする。

63 c

また次に、一切の諸の外道(tīrthika)の出家(parivrājaka)は心に念った。「我が法は微妙(sūkṣma)にして、第一清浄(paramaśuddha)である」[8]と。このような人は自分の行なうところの法を讃歎して他人の法を毀す。だから、この世では互いに相争って、死後には地獄(naraka)に堕ちて種々の量り知れない苦を受けることになる。偈に説いているとおりである。

自法(svadharma)に愛染するが故に、
他人の法(paradharma)を呰毀す。
持戒の行人(śīlacaryā)と雖も、
地獄の苦を脫せず。

この仏法の中で一切の愛着(saṅga)や一切の見解[9](dṛṣṭi)や一切の吾我の憍慢(asmimāna)を棄て、ことごとく断ち切って執着してはならない。栰喩経[10](Kolopama-sūtra)に説いてあるとおりである。「おまえたちよ。若し我が栰の喩えの法(kolopama-dharmaparyāya)を解したならば、その時は善い法も捨てさらなければならない。いわんや不善の法はもとよりである。」と。仏は自ら般若波羅蜜において念ずることもな

若不見聞等　亦非持戒得
非不見聞等　非不持戒得
如我心觀察　持啞法得道

佛答言。

汝依邪見門　我知汝癡道
汝不見妄想　爾時自當啞

復次我法眞實餘法妄語。我法第一餘法不實。是爲鬪諍本。今如是義示人無諍法。聞他所說說人無咎。以是故諸佛經初稱如是。略說如是義竟。

---

64 a

く猗ることもない。いわんや、ほかの法に猗着することもない。このようなわけで、仏法の初めに「是の如く」と称うのである。仏の意はこのようなものである。「我が弟子は法を愛することなく、法に染まることもなく、明党もなく、いたずらに離苦（duḥkhakṣaya）・解脱（vimukti）・不戯論（niṣprapañca）の諸の法相（dharmalakṣaṇa）を求めている。」と。阿他婆耆経[11]（Arthavargīya-sūtra）に説かれているとおりである。摩犍提[12]（Mākandika）は（佛）を難ずる偈にいっている。

決定せる（viniścita）諸法の中に、
横に種々の想いを生ず。
悉く内外を捨つるも、
云何にしてか、まさに道を得べけん。

仏が答えていわれた。

見聞（śruti）知覚[13]（jñāna）に非ず、
また持戒（śīla）の得にも非ず。
不見聞等にも非ず、
不持戒の得にも非ず。
是の如きの論を悉く捨て、
また我（ātman）と我所（ātmīya）とを捨つ。
諸の法相を取らず、
是の如くんば道を得べし。

摩犍提が問うていった。

若し不見聞等ならば、
また持戒の得にも非ず。
不見聞等に非すんば、
不持戒の得に非ず。
我が心の観察する如く、
唖（ひこんのぎょう）法を持すもの道を得ん。

仏が答えていわれた。

汝、邪見の門（mithyādṛṣṭidvāra）に依る、
我、汝が癡道（mohamārga）を知る。
汝、妄想（kalpita）を見されば、
爾の時自らまさに唖すべし。

また次に、我が法は真実（satya）であって、ほかの法は妄語（mṛṣāvāda）である、我が法は第一（parama）であってほかの法は真実でない、（とすること）、これらは闘諍（あらそい）の原因（vivādamūla）である。いま「是の如く」という義（いみ）は、人に無諍[14]（nirdvandva）の法を示すにある。他人の所説を聞いても説く人に咎は無いのである。こういうわけで諸の仏の〔説かれた〕経の初めに「是の如く」と称うのである。略して「如是」の義（いみ）を説きおわった。

〔我〕

我者今當說。問曰。若佛法中言一切法空一切無有吾我。云何佛經初頭言如是我聞。答曰。佛弟子輩雖知無我。隨俗法說我。非實我也。譬如以金錢買銅錢人無笑者。何以故。賣買法應爾。言我者亦如是。於無我法中而說我。隨世俗故不應難。如天問經中偈說。

有羅漢比丘　諸漏已永盡
於最後邊身　能言吾我不

佛答言。

有羅漢比丘　諸漏已永盡
於最後邊身　能言有吾我

世界法中說我非第一實義中說。以是故諸法空無我。世界法故雖說我無咎。復次世界語言有三根本一者邪見。二者慢。三者名字。是中二種不淨一種淨。一切凡人三種語邪慢名字。見道學人二種語。慢名字。諸聖人一種語名字。內心雖不違實法。而隨世界人故共傳是語。除世界邪見。故隨俗無諍。以是故除二種不淨語本。隨世故用一種語。佛弟子隨俗故說我無有咎。復次若人著無

---

「我（mayā）」について今から説こう。問うていう。「若し仏法の中に、一切の法は空（śūnya）であり、一切のものに吾我（ātman）というものは存在しないというならば、どうして仏（の説かれた）経の初頭に『是の如く我聞く（evaṁ mayā śrutam）』といったのか。」と。答えていう。「仏弟子の輩は、無我（anātman）を知っているけれども俗法（lokasaṁvṛtidharma）に従って我を説き、実我（を説くわけ）ではない。譬えば、金貨で銅貨を買っても人が笑わないのと同じである。なぜならば、売買の法はこのようにするのであるからである。我というのもまたこれと同じである。無我の法において我を説くのは世俗に従っているのだから、非難すべきではない。天問経[15]（Devaparipṛchā-sūtra）の中の偈に説いているとおりである。

羅漢比丘（Arhat-bhikṣu）ありて、
諸漏（āsrava）已に永く尽く。
最後辺の身[16]に於て、
能く吾我を言うや不や。

仏は答えていわれた。

羅漢比丘ありて、
諸漏已に永く尽く。
最後辺の身に於て、

吾我相。言是實餘妄語。是人應難。汝一切法實相無我。云何言如是我聞。今諸佛弟子一切法空無所有。是中心不著。亦不言著諸法實相。何況無我法中心著。以是故不應難言何以說我。如中論中偈說。

若有所不空　應當有所空
不空尚不得　何況得於空
凡人見不空　亦復見於空
不見見無見　是實名涅槃
非二安隱門　能破諸邪見
諸佛所行處　是名無我法

略說我義竟。

能く吾我有りと言ふ。

世界法 (lokadharma) で我を説くのは第一実義 (paramārtha) で説くのではない。こういうわけで諸法は空であって無我であるが、世界法であるから我を説いても咎がない。

また次に、世界の語言 (lokābhilāpa) に三つの根本 (mūla) がある。一つには邪見 (mithyādṛṣṭi)、二には慢 (māna)、三には名字 (saṁketa) である。この中で二種は不浄 (aśubha) であって、一種は浄 (śubha) である。一切の凡人 (pṛthagjana) には三種の語がある。邪と慢と名字とである。見道 (dṛṣṭimārga) の学人[17]には二種の語がある。慢と名字である。諸の聖人 (ārya) には一種の語がある。名字である。内心では実法 (saddharma) を（弁えていて）違ことはないけれども、世界の人に隨っているから、ともにこの語を用いるのである。世界の邪見 (lokamithyādṛṣṭi) を除くのであるから、世俗 (saṁvṛti) に従っても諍うこと (vivāda) がない。こういうわけで二種の不諍の語のもとを除いて世俗に従うから一種の語を用いるのである。仏弟子は世俗に隨うから我を説くけれども、咎があるのではない。

64 b

また次に、若し人が吾我のない相にとらわれて「これは真実 (satya) であって、その他のものは妄語 (moha) である。」といったならば、この人はまさしく非難されるべきであろう。「汝の（説く）一切の法は実相であり、無我である。どうして『かくの如く、我聞く』というのか。」と。

いま諸の仏弟子は、一切法は空であって所有するところがない〔不所有(ākiṁcanya)〕のであるから、その中に心は執着することがなく、また諸法実相(bhūtalakṣaṇa)に執着するともいわない。いわんや、無我の法の中に心が執着することがない。こういうわけで、非難して「どういうわけで我を説くのか。」といってはならない。中論(Madhyamaka-śāstra)の中の偈[18]に説かれているとおりである。

若し空ぜざるところ有らば、
応当(まさ)に空ずるところあるべし。
空ぜざるものすら尚ほ得ず、
何ぞ況んや空を得んや。
凡人は空ぜざるものを見、
また復た空をも見る、
見と不見とを見ず、
是を実に涅槃、

非二(advaya)安隠(穏)[19](yogakṣema)の門と名ずく。
能く諸の邪見を破し、
諸仏の行ずる処、
是を無我の法と名ずく。

「我」の義を略説しおわった。

〔聞〕

聞者今當說。問曰。聞者云何。聞用耳根聞耶。用耳識聞。用意識聞耶。若耳根聞。耳根無覺知故不應聞。若耳識聞。耳識一念故不能分別。不應聞。若意識聞。意識亦不能聞。何以故。先五識識五塵。然後意識識。意識不能識現在五塵。唯識過去未來五塵。若意識能識現在五塵者。盲聾人亦應識聲色。何以故。意識不破故。答曰。非耳根能聞聲。亦非耳識亦非意識能聞聲事從多因緣和合故得聞聲。不得言一法能聞聲。何以故。耳根無覺故不應聞聲。識無色無對無處故。亦不應聞聲。聲無覺亦無根故不能知聲。爾時耳根不破。聲至可聞處。意欲聞情塵意和合故耳識生。隨耳識卽生意識。能分別種種因緣得聞聲。以是故不應作是難。誰聞聲。佛法中亦無有一法能作能見能知。如說偈

有業亦有果　無作業果者
此第一甚深　是法佛能見
雖空亦不斷　相續亦不常
罪福亦不失　如是法佛說

大智度論和訳（中祖・諏訪・大野・吉田）

「聞く（śrutam）」ことについて今、説こう。問うていう。「聞くとはどういうことか。聞くとは耳根（śrotrendriya）によって聞くのか。耳識（śrotravijñāna）によって聞くのか。意識（manovijñāna）によって聞くのか。若し耳根によって聞くならば、耳根には覚知（avabodha）することがないから聞くことはないはずである。若し耳識によって聞くとすれば、耳識は一瞬（ekakṣanika）の念いのうちだから、分別することができないし、聞くこともないはずである。若し意識で聞くならば、意識もまた聞くことはできない。なぜなら、先ず五識（vijñāna）が五塵[20]（viṣaya）を識って、その後で意識が（それを）識るのだからである。意識は現在（pratiutpanna）の五塵を識ることができない。ただ過去（atita）と未来（anāgata）の五塵を識るだけである。若し意識がよく現在の五塵を識るならば、盲聾の人でもまた声（śabda）や色（rūpa）を知るはずである。なぜならば、意識は破れないからである。」と。答えていう。「耳根はよく声を聞くことができない。また耳識でもできないし、意識でもできない。よく声を聞くこと〔ができうるの〕は、多くの因縁（hetupratyaya）が和合する（saṁnipāta）ことによって、声を聞くことができるのである。一つの法でよく声を聞くということはできない。なぜなら、耳根には覚がないから声を聞けないはずである。識は無色（arūpin）、無対（apratigha）〔対象性がないこと〕、無処（adeśastha）〔空間性がないこと〕であるから

64 c

略説聞竟

〔一〕

一者今當説。問曰。佛法中數時等法實無。陰入

また声を聞くことはないはずである。声には覚(avabodha)がなく、また根（器官）が無いから声を知ることはできない。その時、耳根は破れておらず、声は聞かれるところにあり、意は聞こうという情によって塵(viṣaya)と意(manas)とが和合(saṁnipāta)するから耳識が生ずるのである。耳識に随って即ち意識が生じ、よく種々の因縁を分別して声を聞くことができるのである。こういうわけで、この論難をおこすべきではない。声を聞くといっても、仏法の中にはまた一法として、能作(kāraka)・能見(draṣṭṛ)・能知(jñānin)があることはない。」と。偈に説くとおりである。

業(karman)あり亦た果(phala)あるも、
業果を作すこと無し。
此れ第一(parama)・甚深(gambhīra)にして、
是の法を仏能く見たまふ。
空なりと雖も亦た断(uccheda)ならず、
相続(prabandha)すれども亦た常(śāsvata)ならず、
罪(puṇya)と福(āpatti)も亦た失せず、
是の如き法を仏説けり。

「聞く」を略説しおわった。

「一(ekasmin)」について今から説こう。問うていう。「仏法の中に数(saṁkhya)・時(kāla)などの法は実にないのである。（それは）陰

持所不攝故。何以言一時。答曰。隨世俗故有一時無有咎。若畫泥木等作天像。念天故禮拜無咎。說一時亦如是。雖實無一時隨俗說一時無咎。問曰不應無一時。佛自說言。一人出世間多人得樂。是者何人。佛世尊也。亦如說偈。

我行無師保　志一無等侶
積一行得佛　自然通聖道

如是等佛處處說一。應當有一。復次一法和合故物名爲一。若實無一法。何以故。一物中一心生非二非三。二物中二心生非一非三。三物中三心生。非二非一。若實無諸數。一物中應二心生。二物中應一心生。如是等三四五六皆爾。以是故。定知一物中有一法。是法和合故。一物中一心生。答曰。若一與物一。若一與物異。二俱有過。問曰。若一有何過。答曰。若一瓶是一義。如因提梨釋迦。亦是一義。若爾者在在有一者應皆是瓶。譬如在在有因提梨。亦處處有釋迦。今衣等諸物皆應是瓶一。瓶一故如是處處一皆應是瓶。如瓶衣等。悉是一物無有分別。復次一是數法。瓶亦應是數法。瓶體有五法。一亦應有五

(skandha)・入(āyatana)・持〔界〕(dhātu)に摂まっていないからである。なぜ一時というのか。」と。答えていう。「世俗にしたがうから一時があるのでも咎はない。画・泥・木などで天像(21)(devapratimā)を作り、天を念ずるから礼拝(vandana)しても咎のない。一時と説いてもまた同じである。実際に一時はないけれども、世俗にしたがって一時と説いて咎はない。」と。問うていう。「一時がないということはありえない。」と。仏が自ら説かれている。「一人が世間にでると多くの人が楽を得る。」と。これは誰か。仏世尊(Buddha Bhagavad)である。またつぎのように偈に説いている。

65 a

我が行(caryā)は師保(22)(ācāryā)無く、
志(chanda)一にして等侶無し(23)。
一行を積んで仏を得、
自然に聖道(āryamārga)に通ず。

このように仏は至るところで「一」を説かれている。きっと「一」は有るのである。

またつぎに、一つの法(dharma)が和合(saṁyoga)しているから、物(dravya)の名を一とするのである。もし、実際に一つの法が無かったならば、どうして一つの物の中には一つの心(citta)が生じて二(心)でも三(心)でもなく、二つの物の中には二つの心が生じ一(心)でも、二(心)でもなく、三つの物の中には三心が生じて二(心)でも、一(心)

法。瓶有色有對。一亦應有色有對。若在在一不名爲瓶。今不應瓶一。一若說一不攝瓶。若說瓶亦不攝一。瓶一不異故。又復欲說一應說瓶。欲說瓶應說一。如是則錯亂。問曰。一中過如是。異中有何咎。答曰。若一與瓶異。瓶則非一。若瓶與一異。一則非瓶。若瓶與一合。瓶名一者。今一與瓶合。何以不名一爲瓶。是故不得言瓶異一。問。雖一數合故瓶爲一。然一不作瓶。答曰。諸數初一。一與瓶異。以是故瓶不作一。一無故多亦無。何以故。先一後多故。如是異中一亦不可得。以是故二門中求一法不可得。不可得故。云何陰持入攝。但佛弟子隨俗語言名爲一心。實不著知數法名字有。以是故。佛法中言一人一師一時不墮邪見咎。略說一竟。

---

でもないのか。もし実際に諸の数がなかったならば、一物の中に二心が生じなければならないし、二物の中に一心が生じなければならないことになる。このようにして、三・四・五・六もみなそのようである。こういうわけで、はっきり分る。「一物の中には一つの法があり、その法が和合しているから一つの物から一つの心が生ずるのである。」と。答えていう。「もし一と物とを一（eka）であるといい、またもし一と物とを異（anya）であるといったならば、二つともに過（doṣa）である。」と。問うていう。「もし一であれば何の過があるのか。」と。答えていう。「もし一瓶というのは一の義があり、因提梨釈迦[24]（Indraśakra）がまたこゝに一の義があるのと同じである。もしそうであるなら、いたるところに一があって、みな瓶ということになってしまう。たとえばいたるところに因提梨（Indra）がおり、またいたるところに釈迦（Śakra）がいることになるようなものである。いま、衣などの諸の物も皆瓶と一つになってしまう。瓶と一であるから、このようにいたるところの一は皆瓶となってしまう。瓶、衣などのように、ことごとく一物ということになれば分別することは無い。またつぎに、一は数の法（saṁkhyādharma）であり、瓶もまた数の法ということになる。瓶の（自）体（svabhāva）に五つの法〔存在〕があれば一にもまた五つの法があることになる。瓶が有色、有対であれば、一もまた有色・有対である。もしあちこちに一を名づけて瓶としなかったならば、いま瓶と一ということにならない。一をもし一と説かなかったならば瓶を摂

めないことになる。もし瓶を説いたならばまた一を摂めないことになる。瓶と一と異ならないからである。また一を説こうと欲すれば瓶を説くことになるし、瓶を説こうと欲すれば一を説くことになる。このようであったならば、錯乱（vyāmoha）する。問うていう。「一について過がこのようであるとすれば、異についてどのような咎があるのか。」と。答えていう。「もし一が瓶と異なるならば、瓶はすなわち一ではない。もし瓶が一と異なるならば一はすなわち瓶でない。もし瓶と一とが合して瓶を一と名づけたならば、いま、一と瓶とは合する。どうして一と名づけて瓶としないのか。こういうわけで、瓶は一と異なるということはできない。」と。問う。「一という数が合するので瓶を一とするといっても、しかし一は瓶と作らない。」と。答えていう。「諸の数の初めは一である。一は瓶とは異なっている。そうであるから、瓶は一と作らない。一は無であるから多もまた無である。なぜなら、先は一であって後は多であるからである。」と。このように、異についての一もまた不可得である。こういうことから、二門の中に一つの法を求めても不可得である。不可得であるならどうして陰（skandha）・持〔界〕（dhātu）・入（āyatama）に摂むことができようか。いたずらに仏弟子は、世俗の語言にしたがって、名づけて一心とするけれども、実際には執着しないで数の法という名字（saṁketa）があることを知っている。このようなわけで、仏法の中に、一人、一師、一時といっていても邪見（mithyādṛṣṭi）の咎に堕ちることはない。一を略説しおわった。

65 b

〔時〕

時者今當說。問曰。天竺說時名有二種。一名迦羅。二名三摩耶。佛何以不言迦羅而言三摩耶。答曰。若言迦羅俱亦有疑。問曰。輕易說故應言迦羅。迦羅二字。三摩耶三字。重語難故。答曰。除邪見故。說三摩耶。不言迦羅。復次有人言。一切天地好醜皆以時爲因。如時經中偈說。

時來衆生熟　時至則催促
時能覺悟人　是故時爲因
世界如車輪　時變如轉輪
人亦如車輪　或上而或下

更有人言。雖天地好醜一切物非時所作。然時是不變。因是實有。時法細故。不可見不可知。以華果等果故。可知有時。往年今年久近遲疾見此相。雖不見時可知有時。何以故見果知有因故。以是故有時法。時法不壞故常。答曰。如泥丸是現在時。土塵是過去時。瓶是未來時。時相常故。過去時不作未來時。汝經書法。時是一物。以是故過去世。不作未來世。亦不作現在世。雜

「時（samaye）」について、今から説こう。問うていう。「天竺では時を説く名（称）に二種類ある。一は迦羅（kāla）と名づけ、二は三摩耶（samaya）と名づける。仏はどうして迦羅といわず三摩耶といったのか。」と。答えていう。「もし迦羅といえばともにまた疑いがあることになる。」と。問うていう。「軽くて説い易いから迦羅というのである。迦羅は二字で、三摩耶は三字である。重いことばは（説い）にくいからである。」と。答えていう。「邪見（mithyadṛṣṭi）を除くのであるから三摩耶といって、迦羅といわないのである。」と。またつぎに、ある人はいう。「一切の天地の好醜はみな時が原因である。」と。時経（Kāla-sūtra）中の偈に説かれているとおりである。

時来れば衆生熟し、
時至れば則ち催促し。
時能く人をして覚悟せしめ、
是の故に時を因となす。
世界は車輪の如く、
時の変ずること輪の転ずるが如し。
人も亦車輪の如く、
或は上り或は下る。

さらにある人はいう。「天地の好醜の一切のものは時の所作ではないか。

過故。過去世中亦無未來世。以是故無未來世。現在世亦如是。

問曰。汝受過去土塵時。若有過去時。必應有未來時。以是故實有時法。答曰。汝不聞我先說。未來世瓶。過去世土塵。未來世不作過去世。墮未來世相中。是未來世相時。云何名過去時。以是故過去時亦無。

問曰。何以無時。必應有時。現在有現在相。過去有過去相。未來有未來相。答曰。若令一切三世時有自相。應盡是現在世。無過去未來時。若今有未來不名未來應當名現在。以是故是語不然

問曰。過去時未來時。非現在相中行。過去時過去世中行。未來世未來時中行。以是故各各法相有時。答曰。若過去復過去。則破過去相。若過去不過去。則無過去相。何以故自相捨故。未來世亦如是。以是故時法無實。云何能生天地好醜及華果等諸物。如是等種種除邪見故。不說迦羅時。說三摩耶。見陰界入生滅。假名爲時無別時。所謂方時離合一異長短等名字出。凡人心著。謂是實有法。以是故。除棄世界名字語言

65 c

しかも、時は変わることはない (avyaya)。因 (hetu) は実有 (dravyataḥ sat) であるけれども、時の法 (dharma) は（微）細で (sūkṣma) あるから見ることもできず (adṛśya)、知ることもできない (ajñeya)。華や実などの果 (phala) によって時のあることが知られる。住年・今年・久い・近い・遅い・疾い、のこの相 (lakṣaṇa) を見れば、時を見なくとも、時のあることが知られる。なぜならば、果 (phala) を見て因 (hetu) あることを知るからである。こういうわけで、時という法はある。時という法は壊れない (avyaya) から常 (nitya) である。」と。答えていう。「泥の丸などは現在 (pratiutpanna) の時であり、土塵は過去 (atīta) の時であり、瓶は未来 (anāgata) の時である。時の相は常 (nitya) であるから、過去の時は未来の時と作らない。そなたの経書の法では時は一物 (ekadravya) である。こういうわけで過去世は未来世とは作らず、また現在世とも作らない。雑 (saṁsṛṣṭa) の過 (dośa) となるから、過去世の中にまた未来世はない。このようなわけで未来世はない。現在世もまた同様である。」と。

問うていう。「汝が過去の土塵を受ける時、もし過去の時があるとするならば、必ず未来の時もあることになる。こういうわけでまことに時の法は有る」と。答えていう。「汝はわたしが先に説いたことが聞っていない。未来世は瓶であり、過去世は土塵である。未来世は過去世とならない。未来世の相の中に堕ちれば、それは（すでに）未来世の相の時である。どう

法。問曰。若無時。云何聽時食。遮非時食是戒。答曰。我先已說世界名字法。有時非實法。汝不應難。亦是毘尼中結戒法。是世界中實。非第一實法相。吾我法相實不可得故。亦爲衆人瞋呵故。亦欲護佛法使久存。定弟子禮法故。諸三界世尊結諸戒。是中不應求。有何實。有何名字等。何者相應。何者不相應。何者是法如是相。何者是法不如是相。以是故是事不應難。

問曰。若非時食時藥時衣皆是柯邏。何以不說三摩耶。答曰。此毘尼中說白衣不得聞。外道何由得聞。而生邪見。餘經通皆得聞。是故說三摩耶令其不生邪見。三摩耶詭名。時亦是假名稱。又佛法中多說三摩耶。少說柯邏。少故不應難。如是我聞一時五語各各義略說竟。

大智度論卷第一

---

して過去時と名づけるのか。このようなわけで、過去時もまたない。」と。問うていう。「どうして時がないのか。必ず時というものは有るはずである。現在（pratyutpanna）には現在の相（lakṣaṇa）があり、過去（atita）には過去の相があり、未来（anāgata）には未来の相がある。」と。答えていう。「もし一切の三世の時に自相（svalakṣaṇa）があるとすると、すべてこれは現在世であって、過去や未来の時があることではないことになる。もしいま未来が有っても未来と名づけなければまさに現在と名づけるべきである。そのようなわけでこの語（vāda）は適当でない。

問うていう。「過去時と未来時とは現在の相の中の行（ākāra）ではない。過去時は過去世の中の行であり、未来世は未来時の中の行である。このようなわけで各々の法の相（ekaika-dharma-lakṣaṇa）に時がある。」と。答えていう。「若し過去がまた過ぎ去ったならばすなわち過去の相を破す。若し過去が過ぎ去らなかったならばすなわち過去の相は無い。どうしてなのか。自相（svalakṣaṇa）が捨てられるからである。未来世もまた同じである。こういうわけで時の法は実ではない。どうしてよく天地の好醜や華果などの諸物（dravya）を生じようか。このように種々に邪見（mithyādṛṣṭi）を除けるので迦羅の時を説かないで三摩耶を説くのである。陰（skandha）・界（dhātu）・入（āyatana）の生滅（utpāda-nirodha）をみて、仮名（prajñapti）して時とするのであって、別の時があるのではない。いわゆる方時（deśa-kāla）・離合（viyoga-saṁyoga）・一異（ekatva-

nānātva)・長短(dirghatva-hrasvatva)などの名字(nāma-saṁketa)
66 a が出ると、凡人は心に(執)着ができ、これを実有の法(sadbhūta-dharma)
という。こういうわけで、世界の名字や語言の法を除き棄るのである。」
と。

問うていう。「若し時(kāla)が無かったならば、どうして時食(kāla-bhojana)を聴して非時食(akālabhojana)を遮じて戒(śīla)とするのか。」と。答えていう。「我はさきに已に、世界(laukika)の名字(sāṁketika)の法には時は有るけれども実法ではない、と説いた。汝は(そのことを)非難してはならない。またこの毘尼(Vinaya)の中の結戒の法は世界の中での実であって、第一〔義〕実法の相(paramasatyadharmalakṣaṇa)ではない。吾我(ātman)の法相は実に不可得であるから、また衆人の瞋呵となるから、また仏法を護り久しく存(続)させようとして弟子の礼法を定めるために、三界の世尊(Bhagavad)は諸戒(śīla)を結められたのである。(だから)この中に、「どんな実(satya)があるのか、どんな名字(nāmasaṁketa)などがあるのか、何が相応(saṁyukta)なのか、何が相応(viprayukta)しないのか、何が法如是の相であり、何が法不如是の相であるのか。」と〔いうことを〕求めてはならない。こういうわけでこの事を難じてはならない。

問うていう。「若し時食(kālabhojana)・時薬(kālabhaiṣajya)・時衣(kālavastra)が皆柯邏ではないとすれば、どうして三摩耶を説かない

のか。」と。答えていう。「これは毘尼（vinaya）の中の説であって白衣（ざいけにん）（avadātavasana）は聞くことができない。外道（tīrthika）はどうして聞くことができ邪見を生ずるのか。余（ほか）の経は通じて皆聞くことができる。このわけで三摩耶を説いてその邪見（mithyadṛṣṭi）を生じさせないようにしたのである。三摩耶は詭名（きみょう）であり、時もまた仮名（けみょう）（prajñapti）の称（よびな）である。また仏法の中では多く三摩耶を説いて、少しく柯羅を説いている。少ないからといって非難すべきではない。」と。「是の如く、我聞く。一時」の五語の各々の義（いみ）を略説しおわった。

〔註〕

(1) 無漏根力覚道禅定　無漏は煩悩の異名。漏れ出る不浄なもののないこと、汚れのないこと。諸の有情をして貪瞋痴の煩悩を生ぜしめない智をいう。仏及び阿羅漢だけの有する徳力の一つ。

根・力・覚道　三十七道品を構成する実践徳目。五根は解脱に至るための五つの機根（信・精進・念・定・慧）のこと。五力はその力。七覚支は悟に至るに資する七つの支分（択法・精進・喜・軽安・捨・定・念）のこと。〔維摩経、仏国品第一〕菩薩成仏時念処正勤神足根力覚道衆生来生其国（T一四・五三八b）

(2) 沙門果　出家者の功徳のこと。また阿羅漢に至る階程（四向四果）のうちの四果をさす。〔倶舎論、巻二四〕世道所得断聖所得雑故　無漏得持故　亦名沙門果（T二九・一二八b）

(3) 転法輪　輪を回して車を前に進めるように仏が教え（法）の輪を転ずること。輪は古代インドの戦車の輪をいい、車輪が転じて敵を打砕くように、仏の教えが衆生の迷いを砕破することに擬したもの。また一般に仏の説法をいう。

(4) 閻浮台　須弥山を中心として人間世界を東西南北の四洲に分ける。閻浮提はその南洲であって、形状は北に広く南に狭いといわれるから具体的にはインド大陸が想定されている。また娑婆世界とも称され人間の住む現実世界のことをいう。

〔維摩経、文殊師利問疾品第五〕於二閻浮台聚落城邑及天下諸天龍王鬼神宮殿一亦不二迫迮一（T一四・五四六b）

(5) 三有　欲・色・無色の三種の生存領域。

(6) 倶迦離　提婆達多の親友で、舎利弗、大目蓮を謗すと見える。〔別訳雑阿含経、第五〕提婆達多親友瞿迦梨比丘。謗舎利弗及大目蓮、此梵主天即其所。扣瞿迦梨喚言。瞿迦梨、瞿迦梨、汝於舎利弗目蓮当生浄信。彼二尊者心浄柔軟、梵行具足。汝作是謗。（T二・四一一b～c）

(7) 類偈

所無量処所　生心欲籌量　何有黠慧者
而生此覚想　無量而欲量　是陰蓋凡夫
欲量無量法　智者所不応　若測無量法
必所焼害

〔雑阿含経、第五〕（T二・四一一c）

(8) 微妙第一清浄　〔大般若波羅蜜多経、第五二九〕如是菩薩随意摂受種種荘厳無量仏土。此所摂受諸仏土中。微妙清浄離雑染法。（T七・七一七b）

(9) 愛見　愛と見の二煩悩のこと。愛とは個々の事物にとらわれてそれに執着し、悟りに至ることを妨げる情意的な煩悩のこと。見は理智的な煩悩をいう。

(10) 栈喩経　金剛経中の栈の喩えを指しているとみられる。仏の教は人を渡す栈の如きものという喩え。〔金剛経〕栈喩如来

常説汝比丘。知我説法如栈喩者。法尚応除何況非法。（T八・七四九b）

(11) 阿他婆耆経　未詳。

(12) 摩犍提　鬚閑提とも音写する。初め遊行者であったが仏陀が拘留(Kuru)にある時、草の座に坐禅されるのを見て贅沢漢と罵ったが釈尊の教化に会い仏弟子となる。〔中阿含経、梵志品、鬚閑提経第二〕（T一・六七〇a以下）

(13) 見聞知覚　〔維摩経、不思議品〕若行見聞覚知是則見聞覚知非求法也（T一四・五四六a）

(14) 無諍　〔倶舎論、巻二七〕汝莫為破和合僧。勤方便当与僧和合。僧和合故歓喜無諍（T二二・一九五b）――また、

無諍世間智　後静慮不動
三洲縁未生　欲界有事惑

論曰、言無諍者、謂阿羅漢有情苦由煩悩生。自知己身福田中勝。恐他煩悩復縁已生。故思引発如是相智。……此行能息諸有情煩悩諍故得無諍名。（T二四・一四一c）

(15) 天問経　〔雑阿含経、巻二二（五八一経）〕若羅漢比丘自所作已作　一切諸漏尽　持此後辺身　記説言有我　及説我所不（T二、一五四b）

(16) 最後辺身　最後の身体。生死の世界における最後の生存のことで具体的には阿羅漢位をさす。〔釈論第一注（22）参照〕

諸仏弟子衆　曽供養諸仏　一切漏已尽　住是最後身（法華・方便品、T九・五c）

(17) 見道学人　無漏の正智を発して未曽有の諦理を見証する位であり、小乗では預流向、大乗では初地の位。これ以上を聖者にいれる。

(18) 中論偈　観行品第十三の次の偈ならんか。

若有不空法　則応有空法　実無不空法
何得有空法　大聖説空法　為離諸見故
若復見有空　諸仏所不化（T三〇・一八c）

(19) 安隠　心安らかにして穏やかなこと。悟りの境地。〔有部律雑事三六巻〕已即入勝定、所受諸苦如念皆除安隠而住。（T二四・三八七a）

(20) 五塵　色声香味触の五つの対象のこと。五識の執着の対象となり、迷いの因となることから五塵という。数論(sāṁkhya)では五唯(tanmātra)という。〔金七十論、第三十四偈（T五四・一二五三c）〕

(21) 天像　神像のこと。神devaは常に天と漢訳されている。

(22) 無師保　もともと師保は君子を教え補佐するもののことをいう。〔周易、繫辞下〕无有師保。如臨父母。〔増一阿含一四〕我成阿羅漢　世間最無比　天及世間人　我今最為上　我亦無師保　亦復無与等　独尊無過者　冷而無復温　今当転法輪往詣加尸邦　今以甘露薬　開彼盲冥者（T二・五一八c）

また〔中本起経・巻上〕八正覚自得　無離無所染　愛尽破欲網　自然無師受　我行無師保　志独無伴侶　積一行作仏　従是通聖道（T四・一四八a）。〔一切経音義、巻四六〕師保…礼記出則有保。入則有師。保安也。謂以道安人也。保守也。説文保養也（T五四・六〇一a）

(23) 無等侶　〔涅槃経〕有等侶者如有国王有隣国等。夫解脱者則無如是。無等侶者謂転輪聖王。無有能与作斉等者。解脱亦爾無有等侶。（T一二・三九二b）

(24) 因提梨　因抵・因提・因達羅・天主帝・天帝釈。ヴェーダ以来の有力神であって、元来雷霆神であるが仏教に取り容れられて梵天とともに守護神の代表となった。

大智度初品總說如是我聞釋論

第三※卷第二

〔如是我聞—佛語〕

如是我聞一時。今當總說。問曰。若諸佛一切智人自然無師。不隨他教不受他法不用他道不從他聞而說法。何以言如是我聞。答曰。如汝所言。佛一切智人自然無師。不應從他聞法而說。佛法非但佛口說者。是一切世間眞實善語。微妙好語皆出佛法中。如佛毘尼中說。何者是佛法。佛法有五種人說。一者佛自口說。二者佛弟子說。三者仙人說。四者諸天說。五者化人說。復次如釋提桓因得道經。佛告憍尸迦。世間眞實善語微妙好語皆出我法中。如讚佛偈中說。

諸世善語　皆出佛法　善說無失
無過佛語　餘處雖有　善無過語
一切皆是　佛法之餘　諸外道中
設有好語　如虫食木　偶得成字
初中下法　自共相破　如鐵出金
誰當信者　如伊蘭中　牛頭栴檀
如苦種中　甘善美果　設能信者

大智度の初品の総説の「是の如く我聞く」を釈するの論　第三(1)卷第二

「かくの如く我聞く。一時。(2)」を今、総説しよう。問うていった。「若し諸仏が一切智 (sarvajña) の人で、自然から無師(3) (anācāryaka)〔無師独悟〕で、他の教え (paradeśanā) に随わず、他の法 (paradharma) に随わず、他の道をとらず、他人から法を聞いて説くものでなかったならば、どうして『是の如く我聞く(evaṁ mayā śrutam)』と言うのか。」と。答えていった。「汝が言うように、仏は一切智の人で自然無師で、他人から法を聞いて説かれるのではない。（しかし）仏法はただ仏が口で説いたものだけではない。この一切世間の真実 (satya) の善語(4) (subhāṣita)、微妙な (nipuṇa) 好語は、皆仏法の中から出たものである。仏が毘尼 (Vinaya) のうちに次のように説いている通りである。『何がこの仏法 (buddhadharma) なのか。仏法には五種の人の説がある。一つは仏自らの口説 (buddhabhāṣita)、二つには仏の弟子の説 (śrāvakabhāṣita)、三つには仙人の説 (ṛṣibhāṣita)、四つには諸天の説 (devabhāṣita)、五つには化人の説 (upapādukabhāṣita) である。』と。」

66 b

また次に釈提桓因得道経(5) (Śakradevendrābhisaṁbodhi-sūtra) に、仏が憍尸迦(6) (Kauśika) に「世間の真実の善語、微妙な好語は皆我が法の中から出たものである。」というとおりである。讃仏偈 (Buddhastotra-

是人則信　外經書中　自出好語
諸好實語　皆從佛出　如栴檀香
出摩梨山　除摩梨山　無出栴檀
如是除佛　無出實語

※二

gātha）の中に説いている。
諸々の世間の善語は、
皆、仏法から出でしもの。
善説には過失なく、
過なきは仏語なり。
余処に善にして過なき語あれども、
一切は皆、これ仏法の余のもの。
諸々の外道のうちに、
たとい好語ありても、
虫が木を食いて、
たまたま字〔の形〕をなすをうる如きもの。
初中下の法(7)、
自ら共にあい破れ、
鉄より金を出すごと、
誰か信ぜんものあらん。
〔臭き〕伊蘭(8)（eraṇḍa）の中に、
牛頭の栴檀(9)（gośīrṣacandana）のあるがごとし。
苦き種の中の、
甘き善き美わしき果実のごとし。
たといよく信ぜんものあるも、

〔如是我聞弟子語〕

復次如是我聞。是阿難等佛大弟子輩說。入佛法相故名爲佛法。如佛般涅槃時。於俱夷那竭國薩羅雙樹間。北首臥將入涅槃。爾時阿難親屬愛未除未離欲故。心沒憂海不能自出。爾時長老阿泥盧豆語阿難。汝守佛法藏人。不應如凡人自沒憂海。一切有爲法是無常相。汝莫愁憂。又佛手付汝法。汝今愁悶失所受事。汝當問佛。佛般涅槃後我曹云何行道。誰當作師。惡口車匿云何共

その人則ち信ぜん。
外典の経書の中より、
自ら好語を出せるならんと。
諸々の好き（真）実の語は、
皆、仏より出ずるもの。
栴檀の香りの、
摩梨山(10) (maraya) より出ずるがごとし。
摩梨山にあらずんば、
栴檀を出すことあらじ。
かくのごと仏にあらずんば、
真実の語出すことあらじ。

また次に「是の如く我聞く」とは、この阿難 (Ānanda) 等の仏の大弟子らの説である。仏の法相(おしえ)に入っているから、仏法と名づける。仏如(まさ)にが般涅槃 (parinirvāṇa) されようとする時、俱夷那竭国 (Kuśinagara) の薩羅 (sāla) の雙樹の間で、北首(きたまくら)に臥し涅槃に入られようとした。

その時、阿難は、親属の愛を除いておらずその欲からも離れていなかった。心は憂いの海に沒(しず)み自ずから抜け出すことが出来なかった。その時、長老であった阿泥盧豆(11) (Aniruddha) が阿難に語った。「汝は仏の法蔵 (dharmapiṭaka) を守る人である。凡人 (pṛthagjana) の如く自ら憂いの海に

住。佛經初作何等語。如是種種未來事應問佛。阿難聞是事。悶心小醒得念道力。助於佛末後臥床邊。以此事問佛。佛告阿難。若今現前。若我過去後自依止法依止不餘依止。云何比丘自依止法依止不餘依止。於是比丘內觀身。常當一心智慧勤修精進。除世間貪憂。外身內外身觀亦如是。受心法念處亦復如是。是名比丘自依止法依止不餘依止。從今日解脫戒經卽是大師。如解脫戒經說。身業口業應如是行。車匿比丘我涅槃後。如梵法治。若心濡伏者。應教刪陀迦旃延經。卽可得道。

復次我三阿僧祇劫所集法寶藏。是藏初應作是說。如是我聞一時佛在某方某國土某處樹林中。何以故。過去諸佛經初。皆稱是語。未來諸佛經初。亦稱是語。現在諸佛末後般涅槃時。亦教稱是語。今我般涅槃後。經初亦應稱如是我聞一時。

是故當知是佛所教非佛自言如是我聞。佛一切智人自然無師故。不應言我聞若佛自說如是我聞。有所不知者。可有此難。阿難問佛。佛教是語。

---

66 c

没んでいてはいけない。一切の有為法（saṁskṛtadharma）はこれ無常の相（anityalakṣaṇa）である。汝は愁しみ憂いてはならない。又仏は手ずから汝に法を付嘱たのであるから、汝が今愁しみ悶えたら（仏から）受けたところのものを失うことになる。汝はまさに仏に問うべきである。「仏が般涅槃された後に、我らはどのようにして道を行き、誰を師としたらよいのか、悪口の車匿[12]（Chandaka）とどのようにして共住するのか、仏経は初めどんな語ではじまるのか、このように種々の未来の事を仏に問わねばならない。」と。阿難はこの事を聞き、悶しい心がやや醒れて道（を得たものの）力の助けを念ずることが出来、仏の末後の臥床の辺でこの事を仏に問うた。仏は、阿難に告げられた。「若し今現前に若しくは私が過ぎさった後には、自ずからに依止（ātmaśaraṇa）し法に依止（dharmaśaraṇa）しその余のものに依止するな。」と。どうして比丘は自らに依止し法に依止しその余のものに依止するなのか。ここにおいて比丘は内身を観じ[13]常にまさに一心に智慧（prajñā）をもって勤修（prayatna）し精進（vīrya）して、世間の貪愛を除くべきである。外身、内外身の観[14]もまたこのようにすべきである。受（vedanā）、心（citta）、法（dharma）の念処[15]（smṛty-upathāna）もまたこのようにすべきである。これが、比丘が自らに依止し法に依止しその余のものに依止するな、というのである。今日より解脫戒経[16]（Pratimokṣa-sūtra）が即ちそのまま大師（mahācārya）なのである。解脫戒経には次のように説いている。「身業（kāyakarman）、口業

是弟子所言。如是我聞。無有咎。

---

(vākkarman) はこのように行ずべきである。車匿比丘は我が涅槃の後は梵法[17] (brahmadaṇḍa) にしたがって治すのである。若し心濡かにしたがったならば、刪陀迦旃延経[18] (Saṁthakātyāyana-sūtra) を教えるべきである。ただちに道をうることが出来よう。」と。

また次に我が三阿僧祇劫[19] (asaṁkhyeyakalpa) の間に集めたところの法の宝蔵 (dharmaratnapiṭaka) は、この法蔵の初めにこのように説いている。『かくの如く我聞く。一時、仏、某方、某国土、某処の、樹林の中におられて』と。何故ならば、過去の諸仏 (atītabuddha) の〔説く〕経の初めは皆、この語をとなえた。未来の諸仏 (anāgatabuddha) の〔説く〕経の初めはまた、この語をとなえるであろう。現在の諸仏 (pratyutpannabuddha) の末後の、般涅槃の時も、またこの語をとなえるように教えている。今、我が般涅槃した後、その経の初めにまた『かくの如く我、聞く。一時。』ととなえなければならない。」と。

67 a

このようなわけで、これは仏が教えられたものであるが、仏が自ら「かくの如く我聞く。一時。」といわれたものではないことを知るべきである。仏は一切智の人で自然無師であるから、「我聞く」とは言われる筈はない。若し仏が自ら「かくの如く我聞く」といわれたとすれば、知らないことがあることになり、この（一切智人ということと）難があることになる。阿難が仏に問い、仏がこの語を教え、この弟子の言うところの「かくの如く我聞く」というのは、咎があるのではない。

〔三藏結集の因緣〕

復次欲令佛法久住世間故。長老摩訶迦葉等諸阿羅漢問阿難。佛初何處說法。說何等法。阿難答。如是我聞一時佛在波羅捺國仙人鹿林中。爲五比丘說是苦聖諦。我本不從他聞法。中正憶念得眼智明覺。是經是中應廣說。如集法經中廣說。佛入涅槃時。地六種動諸河反流。疾風暴發黑雲四起。惡雷擊電雹雨驟墮。處處星流師子惡獸哮吼喚呼。諸天世人皆大號咷。諸天人等皆發是言。佛取涅槃一何疾哉。世間眼滅。當是時間。一切草木藥樹華葉一時剖裂。諸須彌山王盡皆傾搖。海水波揚地大震動山崖崩落。諸樹摧折四面煙起。甚大可畏。陂池江河盡皆嬈濁。彗星晝出。諸人啼哭諸天憂愁。諸天女等郁伊哽咽涕淚交流。諸學人等默然不樂。諸無學人。念有爲諸法一切無常。如是天人夜叉羅刹揵闥婆甄陀羅摩睺羅伽及諸龍等皆大憂愁。諸阿羅漢度老病死海。心念言。

已渡凡夫恩愛河　老病死劵已裂破
見身箇中四大蛇　今入無餘滅涅槃

大智度論和訳（中祖・諏訪・大野・吉田）

また次に、仏法を世間に久えにとどめようということから、長老の摩訶迦葉（Mahākāśyapa）ら諸々の阿羅漢（arhat）が阿難（Ānanda）に問うた。「仏は初め何処で説法され、どのような法を説かれたのか。」と。阿難は問えた。「かくの如く我聞く。一時、仏が波羅捺（Vārāṇasī）国の仙人鹿林（Ṛṣipatana mṛgadāva）の中にましまして、五比丘のために、この苦聖諦（duḥkhāryasatya）をとかれた。「我はもとより他人から法を聞かず、中正に憶念（yoniśomanasikāra）し、眼智明覚を得た」と。この経はこのうちに広く説かれている筈である。集法経（Dharmasaṁgrahasūtra）のうちに（次のように）広説されている通りである。「仏が涅槃に入られた時、大地は六種に動れ、諸河はさかまき流れ、疾風は暴しくあれ、黒雲は四方に起り、悪雷は擊電し、雹雨は驟りに堕り、処々に星が流れ、師子や悪獣が哮吼し、喚呼び、諸天や世人はみな、大いに号び咷いた。諸々の天人らはみな、このような言葉を発った。『仏が涅槃に入られること一に何んと疾いことか。世間眼（loka-cakṣus）は滅びる』と。この時間にあたって、一切の草木・薬樹・華葉は一時に剖裂けて、諸々の須弥山（王）は尽く皆傾揺り、海水の波はさかまき、大地は大いに震動し山崖は崩れ落ち、諸々の樹は摧け折れ、四面に煙たち起り、〔それらは〕甚大だ畏るべきものであった。陂池や江河は尽く皆、さかまき濁り、慧星は昼に出でて、諸人は啼げき哭しみ、諸天は憂い愁んで、諸天女らは郁伊

諸大阿羅漢。各各隨意於諸山林流泉谿谷處處捨身而般涅槃。更有諸阿羅漢。於虛空中飛騰而去。譬如鷹王。現種種神力。令衆人心信清淨。然後般涅槃。六欲天乃至遍淨天等。見諸阿羅漢皆取滅度。各心念言。佛日既沒種種禪定解脫智慧弟子光亦滅。是諸衆生有種種婬怒癡病。是法藥師輩今疾滅度。誰當治者。無量智慧大海中生弟子蓮華今已乾枯。法樹摧折。法雲散滅。大智象王既逝象子亦隨去。法商人過去。從誰求法寶。如偈說。

佛已永寂入涅槃　諸滅結衆亦過去
世界如是空無智　癡冥遂增智燈滅

爾時諸天禮摩訶迦葉足。說偈言。

耆年欲恚慢已除　其形譬如紫金柱
上下端嚴妙無比　目明清淨如蓮華

如是讚已。白大迦葉言。大德迦葉。仁者知不。法船欲破。法城欲頽。法海欲竭。法幢欲倒。法燈欲滅。說法人欲去。行道人漸少。惡人力轉盛。當以大慈建立佛法。

爾時大迦葉心如大海澄靜不動。良久而答。汝等

---

67 b

え哽咽し涕涙交も流れ、諸々の有学の人らは黙然として楽しまず、諸々の無学の人は有為の諸法は一切無常なのだと念った。このようにして、天人（deua）、夜叉（yakṣa）、羅殺（rakṣa）、犍闥婆（gandarva）、甄陀羅（kimnara）、摩睺羅伽（makoraga）及び諸龍（nāga）らは皆、大いに憂い愁んだ。諸々の阿羅漢は老（jarā）、病（vyādhi）、死（maraṇa）の海を渡り、心に念って言った。

已に凡夫の恩愛の河を渡りて、
老や病や死の券[25]（pattra）は已に裂け破れぬ。
身をみるに箇中にいる四大〔＝地水火風〕の蛇[26]（のごと）、
今は無余滅の涅槃（nirupadhiśeṣanirvaṇa）に入らん。

諸の大阿羅漢は各々意に隨って諸の山林や流泉や谿谷の処処に、身を捨てて般涅槃した。更に諸の阿羅漢がいて虛空（ākāśa）に飛騰って去った。譬も鴈王[27]（haṁsarāja）が種々の神通力（ṛddhibala）を現わして衆人の心の信を清浄ならしめたようである。その後に般涅槃した。六欲天（kāmaloka）から遍浄天（śubhakṛtsnadeva）等まで[28]、諸々の阿羅漢が皆、滅度するをみて、各々心に念じて言った。「仏日はすでに沒くなられ、種々の禅定（dhyāna）、解脫（vimokṣa）、智慧（prajñā）のある弟子の光もまた滅んだ。この諸々の衆生には種々の婬（rāga）、怒（dveṣa）、癡（moha）（という三毒）の病があるのに、この法藥の師[29]（bhaiṣajyācārya）らは今、疾くも滅度した。誰が（その病を）治すというのか。無量の智慧の大海中

善說實如所言。世間不久無智盲冥。於是大迦葉默然受請。爾時諸天禮大迦葉足。忽然不現各自還去。是時大迦葉思惟。我今云何使是三阿僧祇劫難得佛法而得久住。如是思惟竟。我知是法可使久住。應當結集修妬路阿毘曇毘尼作三法藏。如是佛法可得久住。未來世人可得受行。所以者何。佛世世勤苦慈愍衆生故。學得是法爲人演說。我曹亦應承用佛教宣揚開化。是時大迦葉作是語竟。住須彌山頂。撾銅揵稚。說此偈言。

佛諸弟子　若念於佛　當報佛恩
莫入涅槃

是揵稚音大迦葉語聲。遍至三千大千世界。皆悉聞知。諸有弟子得神力者。皆來集會大迦葉所。爾時大迦葉告諸會者。佛法欲滅。佛從三阿僧祇劫。種種勤苦慈愍衆生學得是法。佛般涅槃已。諸弟子知法持法誦法者皆亦隨佛滅度。法今欲滅。未來衆生甚可憐愍。失智慧眼愚癡盲冥。佛大慈悲愍傷衆生。我曹應當承用佛教。須待結集經藏竟。隨意滅度。諸來衆會皆受教住。爾時大迦葉選得千人。除善阿難。盡皆阿羅漢得六神

---

に生じた弟子である蓮華（puṇḍarīka）は今は已に乾き枯れ、法樹は摧け折れ、法雲は散り滅えた。大智の象王はすでに逝き、象子もまた随って去った。法の商人は過ぎ去った。誰に従って法宝を求めるのか。」と。偈に次の通り説いている。

仏、已に永に寂し涅槃に入りたもう、
諸の結を滅せる衆もまた過ぎ去りぬ。
世界はかく如く空しくして智なし、
愚癡の冥は遂てまし、智の燈は消えさりぬ。

その時、諸天は摩訶迦葉（Mahākāśyapa）の足もとに礼して偈を説いて言った。

耆年は貪欲（rāga）、瞋恚（āghāta）、慢（māna）をすでに除けり、
その形は、譬えば紫金の柱の如し。
上より下まで端厳にして妙えにして比びなく
目明らけくて清浄なること蓮華の如し。

かくの如く讃嘆しおわって、大迦葉に白して言った。「大徳の迦葉よ、仁者は知っておられるのか。法の船（dharmanāva）は破われようとし、法の城（dharmanagara）は頽れようとし、法の海（dharmadhārā）は竭こうとし、法の幢（dharmapatākā）は倒れようとし、法の燈（dharmapradīpa）は滅えようとし、法を説く人は去ろうとしている。道を行ずる人は漸に少く、悪人の力は転ん盛んである。まさに大慈（mahāmaitrī）

通。得共解脱無礙解脱。悉得三明禪定自在。能逆順行諸三昧皆悉無礙。誦讀三藏知內外經書。諸外道家十八種大經盡亦讀知。皆能論議降伏異學。

---

をもって仏法を建立しなければならない。」と。

この時、大迦葉の心はあたかも大海が静かに澄みきって動かないようだった。ややしばらくして答えた。「汝らは善く説った。実に言うとおりである。世間は久しからずして無智して盲冥になるだろう。」と。ここにおいて大迦葉は黙然として請いを受けた。その時、諸天は大迦葉の足もとに礼し、忽然として(姿を)あらわさず、それぞれ自ずから還り去った。この時、大迦葉は思惟った。「我は今、どのようにして三阿僧祇劫 (asaṁkhyeya-kalpa) にも得難い仏法を久しく住めさせられるのか。」と。このようにして思惟い竟った。「我はこの法を久しく住めさせられることを知った。まさに修妬路 (Sūtra)、阿毘曇 (Abhidharma)、毘尼 (Vinaya) を結集し三法蔵 (Dharmapitaka) を作らなくてはならぬ。このようにしたら仏法を久しく住めることが出来よう。未来世の人も受け行ずることが出来よう。その所以は何か。仏は世々に勤苦して衆生を慈愍 (anukompā) するが為に、この法を学び得て、人々のために演説されたのである。我らも亦、まさに仏の教えを承用ぎ宣揚し開化しなくてはならぬ。」と。この時、大迦葉はこの語をいいおわると、須弥山の頂きに住まり、銅の揵稚 (gaṇḍi) を撾ち、この偈を説いて言った。

67 c

仏の諸々の弟子よ、
若し仏を念ぜんとせば、
まさに仏の恩に報ずべく、

涅槃に入ることなかれ。

この揵稚の音と大迦葉の語声は遍ねく三千大千世界にとどろいた。皆、悉く聞き知った。諸有の弟子の中の神（通）力を得たものが皆やって来て大迦葉の所に集会した。その時、大迦葉は諸の会った者に告げた。「仏の法が滅びようとしている。仏は三阿僧祇劫（asaṁkhyaya-kalpa）より種々に勤苦し衆生を慈愍（anukampā）してこの法を学び得られたのだ。仏が般涅槃しおわり、諸の弟子のうちの法を知り法を持し法を誦する者が皆、また仏に随って滅度した。法は今、滅びようとしている。未来の衆生はおおいに憐愍すべきである。智慧の眼を失い愚痴で盲冥となるのだ。仏は大慈悲（mahāmaitrīkaruṇā）をもって衆生を愍傷まれた。われらは広当に、仏の教えを承け用ぎ、すべから経蔵を結集しおへるを待って、意に随って滅度すべきである。」と。諸の来った衆会のものは皆、教をうけてとどまった。その時、大迦葉は千人を選び得たが善き阿難を除いた。（彼等は）尽く皆、阿羅漢であり、六神通（abhijñā）〔神足通、天眼通、天耳通、他心通、宿命通、漏尽通〕を得て、共解脱[30]（vimokṣa）、無礙解脱[31]（apratighavimokṣa）を得て悉く三明〔宿命明、天眼明、漏尽明〕を得て、禅定自在で、よく逆順に諸の三昧（samādhi）を行じ、皆悉く礙わりなく、三蔵を誦読して、内外の経書を知って、諸の外道家（tīrthika）の十八種の大経[32]を尽くまた読み知って、皆よく論議して異学（pāṣaṇḍa）のものを降伏させていた。

〔王舎城千人比立供養—經藏結集因縁〕

問曰。是時有如是等無數阿羅漢。何以故正選取千人不多取耶。答曰。頻婆娑羅王得道。八萬四千官屬亦各得道。是時王敎勅宮中。常設飯食供養千人。阿闍貰王不斷是法。爾時大迦葉思惟言。若我等常乞食者。當有外道强來難問廢闕法事。今王舍城。常設飯食供給千人。是中可住結集經藏。以是故選取千人。不得多取。是時大迦葉與千人俱到王舍城耆闍崛山中。告語阿闍世王。給我等食日日送來。今我曹等結集經藏不得他行。是中夏安居三月初十五日說戒時。集和合僧。大迦葉入禪定。以天眼觀今是衆中誰有煩惱未盡。應逐出者。唯有阿難一人不盡。餘九百九十九人。諸漏已盡清淨無垢。大迦葉從禪定起。衆中手牽阿難出言。今清淨衆中結集經藏。汝結未盡不應住此。是時阿難慚恥悲泣而自念言。我二十五年。隨侍世尊供給左右。未曾得如是苦惱。佛實大德慈悲含忍。念已白大迦葉言。我能有力久可得道。但諸佛法阿羅漢者。不得供給左右使令。以是故我留殘結不盡斷耳。大迦葉言。

68 a

問うていった。「この時、このような無数の阿羅漢がいるのに、どうゆうわけで、ちょうど千人を選び取って（これより）多くを取らなかったのか」と。答えていった。「頻婆娑羅（Bimbisāra）王は道を得て、八萬四千の官属も亦各々道を得た。この時、王は宮中に教勅じて常に飯食を設け千人に供養した。阿闍貰王（Ajātaśatru）もこの法をやめなかった。その時、大迦葉は思惟して『若し我らが常に乞食したならば、きっと外道（tīrthika）が強来て難問して法事（vidhi）を廃闕にすることになるにちがいない。今、王舎城は常に飯食を設け千人に供給している。この中で、住まって経蔵を結集すべきである。』と言った。このようなわけで千人を選び取って多くを取ることが出来なかったのである。

この時、大迦葉は千人と俱に王舎城、耆闍崛山（Gṛdhrakūṭaparvata）中に到き、阿闍世王に「我らの食事を日々送りよこされよ。今、我らは経蔵を結集して他かの行をすることが出来ない。」と告げ語られた。この中で夏安居（varṣā）すること三ヶ月、初めの十五日に戒（śīla）を説く時に和合僧（saṁgha）を集めた。大迦葉は禅定に入り天眼（divyacakṣus）をもって今のこの衆の中に、誰がまだ煩悩を（滅し）尽さず、逐出すべきものであるかを観た。唯、阿難一人だけ尽さずにいた。余の九百九十九人は諸の漏が已に尽き清浄（viśuddha）、無垢（vimala）であった。

大迦葉は禅定より起ちあがって、衆中から手づから阿難を牽き出して言

汝更有罪。佛意不欲聽女人出家。汝慇懃勸請佛聽爲道。以是故佛之正法五百歳而衰微。是汝突吉羅罪。阿難言。我憐愍瞿曇彌。又三世諸佛法皆有四部衆。我釋迦文佛云何獨無。大迦葉復言。佛欲涅槃時。近俱夷那竭城脊痛。四疊漚多羅僧敷臥。語汝言。我須水。汝不供給。是汝突吉羅罪。阿難答言。是時五百乘車截流而渡令水渾濁。以是故不取。大迦葉復言。正使水濁佛有大神力能令大海濁水清淨。汝何以不與。是汝之罪。汝去作突吉羅懺悔。大迦葉復言。佛問汝。若有人四神足好修。可住壽一劫若減一劫。佛四神足好修。欲住壽一劫若減一劫。汝默然不答。問汝至三。汝故默然。汝若答佛。佛四神足好修。應住一劫若減一劫。由汝故。令佛世尊早入涅槃。是汝突吉羅罪。阿難言。我非惡心而不答佛。大迦葉復言。汝與佛疊僧伽梨衣以足蹈上。是汝突吉羅罪。阿難言。爾時有大風起無人助。我捉衣時風吹來墮我脚下。非不恭敬故蹈佛衣。大迦葉復言。佛陰藏相般涅槃後以示女人。是何可恥。是汝突吉羅罪。阿難

---

った。「今、清浄の衆中で経蔵を結集しようとしている。汝はまだ結を（滅し）尽していないので、ここにとどまってはならない。」と。この時、阿難は慚恥して悲泣し自ら念言った。「我は二十五年の間、世尊に随侍して左右に供給したが、一度もこれまでこのような苦悩にあったことはなかった。仏は実に大徳で慈悲をもって含つみ忍んでくださった。」と。念いおわって大迦葉にいった。「我はよく力があって、はやくから道を得ることが出来た。ただ諸仏の法として阿羅漢は左右に供給し使令えることが出来ない。このようなわけで我は結を留残して尽く断ずることをしなかっただけである。」と。大迦葉は、「汝にはもっと罪がある。仏は意に女人が出家[33]することを聴るそうとはされなかった。汝が慇懃りに勧請って仏は道とすることを聴るされた。このようなわけで仏の正法は五百歳で衰微した。これ汝は突吉羅[34]（duṣkṛta）の罪である。」と言った。阿難は言った。「我は瞿曇弥[35]（Gautamī）を憐愍した。又三世の諸仏の法では皆、四部衆〔比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷〕があるのだから、わが釈迦文仏（Buddha Śākamuni）はどうしてもなくてはならないのだ。」と。

大迦葉はまた言った。「仏が涅槃しようとした時、俱夷那竭城[37]（Kuśinagara）ちかくで背が痛み、漚多羅僧[36]〔衣〕（uttarāsaṅga）を四畳で敷き臥し、汝に『我は水がほしい。』といわれたのに、汝は供給げなかった[38]。これ汝は突吉羅の罪である。」と。阿難は答えて言った。「この時、五百乘の車が流れをよぎって渡り水を渾濁らせてしまった。そのようなわけで取らな

言。爾時我思惟。若諸女人見佛陰藏相者。便自羞恥女人形。欲得男子身修行佛相種福德根。以是故我示女人。不爲無恥而故破戒。大迦葉言。汝有六種突吉羅罪。盡應僧中悔過。阿難言諾。隨長老大迦葉及僧所教。是時阿難長跪合手。偏袒右肩脫革屣。六種突吉羅罪懺悔。大迦葉於僧中手牽阿難出。語阿難言。斷汝漏盡然後來入。殘結未盡汝勿來也。如是語竟便自閉門。爾時。諸阿羅漢議言。誰能結集毘尼法藏者。長老阿泥盧豆言。舍利弗是第二佛有好弟子。字憍梵波提（秦言牛呵）柔軟和雅常處閑居。住心寂燕能知毘尼法藏。今在天上尸利沙樹園中住。遣使請來。大迦葉語下坐比丘。汝次應僧使。下坐比丘言。僧有何使。大迦葉言。僧使汝至天上尸利沙樹園中憍梵波提阿羅漢住處。是比丘歡喜踊躍受僧勅命。白大迦葉言。我到憍梵波提阿羅漢所陳說何事。大迦葉言。到已語憍梵鉢提。大迦葉等漏盡阿羅漢。皆會閻浮提。僧有大法事。汝可疾來是。下坐比丘頭面禮僧右繞三匝。如金翅鳥飛騰虛空。往到憍梵波提所。頭面作禮。語憍梵波提言。軟

---

68 b

かった。」と。大迦葉はまた言った。「正使、[39]水が濁っても、仏は大神通力をもっていられるから大海の濁り水も清浄ならしめられる。汝はどうして与げなかったのか。これ汝の罪である。汝去って突吉羅の懺悔をなせ」と。

大迦葉はまた言った。「仏は汝に『若し人あって四神足（rddhipāda）をよく修めれば、寿を一劫（kalpa）とどめ若しくは寿一劫を減することが出来るのか』と問われた。[40]仏は四神足をよく修めて寿一劫をとどめ若しくは寿一劫を減じようとされたのである。汝は黙然として答えなかった。汝に三たび問われるにおよんだ。汝はもとより黙然としていた。汝が若し仏に答えていれば、仏は四神足をよく修められ、きっと一劫をとどめられ若しは一劫を減ぜられたであろう。汝のための故に、仏世尊は早く涅槃に入られたのである。これ汝は突吉羅の罪である。」と。

阿難は言った。「悪魔が我が心を蔽ったのだ。その故に無言であったのだ。我は悪心があって仏に答えなかったのではない。」と。

大迦葉はまた言った。「汝は仏のために僧伽梨衣[41]（saṅghati）を畳むのに足で上を蹈んだ。[42]これ汝は突吉羅の罪である。」と。阿難は言った。「その時、大風が起ったが人の助けがなかった。我が衣を捉んだとき、風が吹いてきて我が脚もとにおちたのだ。恭敬はなかったから仏の衣を蹈んだのではない。」と。

大迦葉はまた言った。「仏の陰蔵[43]の相を般涅槃の後に女人に示した。[44]これは何と恥ずべきではないか。これ汝は突吉羅の罪である。」と。

善大德少欲知足常在禪定。大迦葉問訊有語。今僧有大法事。可疾下來觀衆寶聚。是時憍梵波提心覺生疑。語是比丘言。僧將無鬪諍事喚我來耶。無有破僧者不。佛日滅度耶。是比丘言。實如所言。大師佛已滅度。憍梵波提言。佛滅度大疾。世間眼滅。能逐佛轉法輪將我和上舍利弗今在何所。答曰。先入涅槃。憍梵波提言。大師法將各自別離。當可奈何。摩訶目伽連今在何所。是比丘言。是亦滅度。憍梵波提言。佛法欲散。大人過去。衆生可愍。問長老阿難今何所作。是比丘言。長老阿難佛滅度後。憂愁啼哭迷悶不能自喩。憍梵波提言。阿難懊惱由有愛結別離生苦。羅睺羅復云何。答言。羅睺羅得阿羅漢故無憂無愁。但觀諸法無常相。憍梵波提言。難斷愛已斷無憂愁。憍梵波提言。我失離欲大師。於是尸利沙樹園中住。亦何所爲。我和上大師皆已滅度。我今不能復下閻浮提。住此般涅槃。說是言已入禪定中。踊在虛空。身放光明。又出水火。手摩日月現種種神變。自心出火燒身。身中出水四道流下。至大迦葉所。水中有聲。說此偈言。

阿難は言った。「その時、我は『若し諸の女人が仏の陰蔵の相をみる者はすなわち自らが女人の形を羞恥し男子の身となり仏の相を修行し福徳の根を種えんとする』と思惟った。このようなわけで我が女人に示したのであり、恥じることなく故に破戒したのではない。」と。

大迦葉が言った。「汝は六種の突吉羅の罪がある。尽く僧伽中で悔過(45)(pratidesanā)すべきである。」と。阿難は言った。「結構です。長老の大迦葉及び僧伽の教に随いましょう。」と。この時、阿難は長跪合手して偏わらに右肩を袒ぎ革屣を脱ぎ六種の突吉羅の罪の懺悔をした。大迦葉は僧伽の中で手づから阿難を牽き出し阿難に語って言った。「汝の漏(āsrava)を断ち尽せ。然る後に入り来れ。残れる結(bandhana)を尽さなければ汝は来てはならぬ。」と。このように語りおわって便ち自から門を閉じた。

その時、諸の阿羅漢は議論して言った。誰かよく毘尼の法蔵を結集できるのか。」と。長老の阿泥盧豆(Aniruddha)は言った。「舎利弗(Śāriputra)はこれ第二の仏であってすぐれた弟子をもっている。憍梵波提(Gavāmpati)「秦」では牛呵(47)という」という。柔軟くて和雅かで常に閑居におり心は寂燕にとどまり、よく毘尼の法蔵を知っている。今、天上の尸利沙樹園(Śirīṣavana)の中に住している。使をつかわして請じ来られよ。」と。大迦葉は下坐の比丘に「汝は次いで僧伽の使いをせよ。」と言った。下坐の比丘は「僧伽のどんな使をするのか」と言った。大迦葉は言った。「僧伽の使として汝は天上の尸利沙園の中の憍梵波提という阿羅漢の

憍梵鉢提稽首禮　　妙衆第一大德僧
聞佛滅度我隨去　　如大象去象子隨

爾時下坐比丘。持衣鉢還僧。是時中間阿難思惟諸法求盡殘漏。其夜坐禪經行慇懃求道。是阿難智慧多定力少。是故不卽得道。定智等者乃可速得。後夜欲過疲極偃息。却臥就枕頭未至枕。廓然得悟。如電光出闇者見道。阿難如是入金剛定。破一切諸煩惱山。得三明六神道共解脫。作大力阿羅漢。卽夜到僧堂門敲門而喚。大迦葉問言。敲門者誰。答言。我是阿難。大迦葉言。汝何以來。阿難言。我今夜得盡諸漏。大迦葉言。不與汝開門。汝從門鑰孔中來。阿難答言。可爾。卽以神力從門鑰孔中入。禮拜僧足懺悔。大迦葉莫復見責。大迦葉手摩阿難頭言。我故爲汝使汝得道。汝無嫌恨。我亦如是。以汝自證。譬如手畫虛空無所染著。阿羅漢心亦如是。一切法中得無所著。復汝本坐。是時僧復議言。憍梵波提已取滅度。更有誰能結集法藏。長老阿泥盧豆言。是長老阿難。於佛弟子常侍近佛。聞經能持佛常歎譽。是阿難能結集經藏。是時長老大迦葉

---

いる処に至け。」と。この比丘は歓喜し踊躍して僧伽の勅命を受けて、大迦葉に「我が憍梵波提の阿羅漢の所に到ってどんなことを陳べ説くのか。」といった。大迦葉は言った。「到ったならば憍梵鉢提〔＝憍梵鉢提〕に、『大迦葉ら漏の尽きた（kṣīṇāsrava）阿羅漢が皆、閻浮提[48]（Jambudvīpa）に会まっている。僧伽の重大な法事である。『汝は疾くここに来なくてはならぬ』と語え。」といった。下坐の比丘は頭面して僧伽に（作）礼して右に三たび繞って（triḥpradakṣiṇīkṛtya）金翅鳥（garuda）の虚空に飛び騰るように、憍、梵波提（Gavāmpati）の所へ往き到った。頭面して作礼し、憍梵波提に、「軟善[49]の大徳（であるあなたは）少欲知足（alpamātreṇa saṁtuṣṭaḥ）で常に禅定にあられる。大迦葉が問訊して『今、僧伽に重大な法事がある。疾く下り来って衆宝の聚りを観られよ』との語です。」といった。

68 c

この時、憍梵波提は心のうちに疑いが生ってくるのを覚って、この比丘に、「僧伽にもしかすると闘諍（vivādavastu）ごとがあって我を喚びようとするのではないか、破和合僧（saṅghabheda）のものがあったのではないのか、仏日が滅度されたのか。」といった。その比丘は、「まことに言れる通りで、大師（mahācārya）である仏が已に滅度されました。」と言った。憍梵波提は「仏が滅度されることはなんと疾いことだ。世間の眼（lokacakṣus）は滅びた。よく仏に逐い、転法輪（dharmacakra）の将[50]のわが和上（upādhyāya）である舎利弗は今どこにおられるのか。」とい

摩阿難頭言。佛囑累汝令持法藏。汝應報佛恩。佛在何處最初說法。佛諸大弟子能守護法藏者皆以滅度。唯汝一人在。汝今應隨佛心憐愍衆生。故集佛法藏。是時阿難禮僧已坐師子床。時大迦葉說此偈言。

佛聖師子王　阿難是佛子
師子座處坐　觀衆無有佛
如是大德衆　無佛失威神
如空無月時　有宿而不嚴
汝大智人說　汝佛子當演
何處佛初說　今汝當布現

是時長老阿難一心合手。向佛涅槃方。如是說言。

佛初說法時　爾時我不見
如是展轉聞　佛在波羅奈
佛爲五比丘　初開廿露門
說四眞諦法　苦集滅道諦
阿若憍陳如　最初得見道
八萬諸天衆　皆亦入道迹

是千阿羅漢聞是語已。上昇虛空高七多羅樹。皆

った。答えて「先に涅槃に入られた。」といった。憍梵波提は「大師、法将がそれぞれ別離れた。どうしたらよいのか。摩訶目伽連（Makāmaudgalyāyana）は今、どこにおられるのか」といった。この比丘は「かれも亦滅度されました。」と言った。憍梵波提は「仏の法は散びようとしている。大人は過ぎ去った。衆生は愍しむべきである。」といった。「長老（āyuṣmat）の阿難（Ananda）は今、どうしておられるのか」と問うた。この比丘は「長老の阿難は仏滅度されて後は、憂いに愁んで啼げき哭しみ、迷い悶えて自ら喩えようもない。」といった。憍梵波提は「阿難の懊悩は愛（欲）の結（anunayabandhana）があるからで、別離に苦しみが生じたのだ。羅睺羅（Rāhula）はまたどうしたのだ。」と言った。「羅睺羅は阿羅漢となったので憂いもなく愁しみもない。ただ諸法の無常の相（anityalakṣaṇa）を観じている。」と、答えていった。憍梵波提は言った。「断ち難い愛を已に断ち、憂い愁しみがない。」と。憍梵波提はいった。「我は欲を離れた（vītarāga）大師を失った。この尸利沙園の中にとどまってまたどうしようもない。我が和上（upādhyāya）の大師は皆すでに滅度した。我は今、もはや閻浮提に下ることは出来ない。ここにとどまって般涅槃しよう。」と。この言をいいおわって、禅定（samādhi）の中に入り、虛空に踊って身より光明（raśmi）を放ちまた水や火を出し、手で日月をなで種々の神変（prātihārya）をあらわして、心より火を出だし身を焼いて、身中より水を出だして四道に流下させ大迦葉の所にとどいた。水中か

69 a

言咄無常力大。如我等眼見佛說法。今乃言我聞。便說偈言。

我見佛身相　猶如紫金山
妙相衆德滅　唯有名獨存
是故當方便　求出於三界
勤集諸善根　涅槃最爲樂

爾時長老阿泥盧豆。說偈言。

咄世間無常　如水月芭蕉
功德滿三界　無常風所壞

爾時大迦葉。復說此偈。

無常力甚大　愚智貧富貴
得道及未得　一切無能免
非巧言妙寶　非欺誑力諍
如火燒萬物　無常相法爾

大迦葉語阿難。從轉法輪經至大般涅槃。集作四阿含。增一阿含中阿含長阿含相應阿含。是名修妬路法藏。

---

ら声がしてこの偈を説いていった。

憍梵鉢提は稽首（vandana）して、
妙衆第一の大徳の僧に礼す。
仏の滅度を聞き我随い去らん、
大象去けるや象子も随うが如くに。

その時下坐の比丘は衣鉢を持って僧伽（saṁgha）に還った。その時の間に、阿難は諸法を思惟して残りの漏（āsrava）を尽すことを求めた。その夜、坐禅し経行して慇懃に道（mārga）を求めた。ここで阿難は智慧（prajñā）は多かったが定力（samādhibala）がたらなかった。そのためにただちに道をうることがなかった。定力と智慧とが等しければすなわち速やかに得ることが出来るのである。後夜がすぎようとして疲れきって偃息もうとした。却いて臥し枕につこうとした。頭が枕にまだつかないとき、廓然として悟りを得た。電光りが出って闇者が道を見たようであった。阿難はこのようにして金剛の定（vajrasamādhi）に入った。一切の諸の煩悩の山を破り、三明（vidyā）、六神通（abhijñā）、共解脱（vimokṣa）を得て、大力（mahābala）の阿羅漢（arhat）となった。即夜、僧堂の門に到き、門を敲いて喚んだ。大迦葉は「門を敲くものは誰か。」と問うていった。「我は阿難である。」と答えていった。大迦葉は、「汝はどうして来たのか。」といった。阿難は「我は今夜、諸の漏を尽すことが出来た。」といった。大迦葉は、「汝のために門を開くことが出来ない。汝は門の鑰孔か

ら入って来い」といった。阿難は、「そうしよう。」と答えていった。すぐに神通力（ṛddhibala）で門の鑰孔から入った。僧たちの足もとに礼拝し懺悔し、「大迦葉よ、これ以上責められることはない。」（と、いった）。大迦葉は手で阿難の頭を摩でていった。「我は故に汝の為に汝に道を得させようとしたのである。汝は嫌い恨むな。我もまたこのようであった。汝の自証を譬えれば、手で虚空に画いて染著するところがないようなものである。阿羅漢の心もまたこのようで、一切法の中にあって執著するもののないことを得るのである。汝の本の座にもどられよ。」と。

この時、僧伽はまた議して、「憍梵波提が已に滅度した。更に誰が法蔵を結集することが出来るのか」と言った。長老の阿泥盧豆は、「この長老の阿難は仏弟子の中で常に仏に近侍し、経を聞いてよく憶持したので仏は常に歎誉えられていた。この阿難がよく経蔵を結集出来よう。」といった。この時、長老の大迦葉は阿難の頭を摩でていった。「仏は汝に嘱累て法蔵を持せしめようとされた。汝は仏の恩に報ずべきである。仏は何処にいまして最初に法を説かれたのか。仏の諸の大弟子でよく法蔵を守護出来るものは皆、すでに滅度し、唯汝一人がいるだけである。汝は今、仏の心に随って衆生を憐愍するが故に仏の法蔵を集むべきである。」と。この時阿難は僧伽に礼しおわって、師子床（siṁhāsana）にすわった。時に大迦葉はこの偈を説いていった。

69 b

仏聖は師子王（siṁharāja）[国][音]にして、

阿難はこれ仏子（buddhaputra）なり。
師子座に処座りて、
衆をみるに仏ましまさず。
かくの如と大徳の衆も、
仏いまさねば威神力（prabhāva）を失えり。
空に月なき時のごと、
宿ありても蔵からず。
汝れは大智人の説をば、
汝れは仏子なればまさに演ぶべし。
何処に仏は初めに説かれしぞ、
今、汝れ、まさに布現すべし。

この時、長老の阿難は一心に手を合せ、仏の涅槃された方に向って、このように説きいった。

仏、初めて法を説かれし時、
その時、我は見ざりき。
かくの如く展転して（paraṁparayā）聞く、
仏、波羅奈（Vārāṇasī）にましまし き。
仏、五比丘のために、
初めて甘露の門（amṛta-dvāra）を開かれぬ。
四真諦の法なる、

苦（duḥkha）・集（samudaya）・滅（nirodha）・道（mārga）の諦（satya）を説かれぬ。
阿若憍陳如（Ājñata-Kauṇḍinya）は、
最初に道を見るを得たり。
八萬の諸天（deva）の衆も、
皆、また道跡（paṭipadā）に入りぬ。[51]
この千人の阿羅漢はこの語を聞きおわった。虚空に、七多羅樹（tāla）の高さほど上昇った。皆、「咄、無常の力（anityatābala）は大きい。我等は眼のあたりに仏の説法を見るようであった。今、そこで『我聞けり』という。」といった。便ち偈を説いていった。

我は仏の身の相を見たり、
あたかも紫金山のごとし。
妙相、衆徳は滅び、
唯、名のみありて独り存す。
この故にまさに方便（upāya）もて、
三界（tridhātu）を出でんと求む。
諸の善根（kuśalamūla））を勤集するに、
涅槃をば最たる楽（sukha）となす。
その時、長老の阿泥盧豆は偈を説いて言う。
咄、世間は無常（anitya）、

水月[52]、芭蕉[53]（kadalī）の如し。
功徳（śubha）、三界に満つれども、
無常の風にて壊せらる。
その時、大迦葉はまたこの偈を説いた。
無常の力は甚と大し、
愚なるも智きも貧しきも富めるも貴きも、
道を得たるもまた得ざるをも、
一切のもの、よく免がるるあたわず。
巧言も妙宝もかなわず、
欺誑も力諍もかなわず、
火の萬物を焼くがごと、
無常の相は法爾（dharmatā）たり。

69 c

大迦葉は阿難にいった。「転法輪経[54]（Dharmacakrapravartana-sūtra）より大般涅槃（経）（Mahāparinirvāṇa-sūtra）に至るまで、集めて四阿含（Āgama）となした。増一阿含（Ekottarāgama）、中阿含（Madhyamāgama）、長阿含（Dīghāgama）、相応阿含（Saṃyuktāgama）である。これらを修妬路法蔵（sūtrapitaka）と名づける。」と。

諸の阿羅漢は更に問うた。「誰が明了と毘尼の法蔵を集められるのか。」と。皆は「長老の憂婆離（Upāli）が五百人の阿羅漢の中で持戒第一であ

〔毘尼結集〕
諸阿羅漢更問。誰能明了集毘尼法藏。皆言。長老憂婆離於五百阿羅漢中持律第一。我等今請。

卽請言。起就師子座處坐說。佛在何處初說毘尼結戒。憂婆離受僧敎。師子座處坐說。如是我聞一時佛在毘舍離。爾時須提那迦蘭陀長者子初作婬欲。以是因緣故結初大罪二百五十戒義。作三部七法八法。比丘尼毘尼增一憂婆利問雜部善部。如是等八十部作毘尼藏。

〔阿毘曇結集〕

諸阿羅漢復更思惟。誰能明了集阿毘曇藏。念言。長老阿難於五百阿羅漢中。解修妬路義第一。我等今請。卽請言。起就師子座處坐。佛在何處初說阿毘曇。阿難受僧敎師子座處坐說。如是我聞一時佛在舍婆提城。爾時佛告諸比丘。諸有五怖五罪五怨不除不滅。是因緣故。此生中身心受無量苦。復後世墮惡道中。諸有無此五怖五罪五怨。是因緣故於今生種種身心受樂。後世生天上樂處。何等五怖應遠。一者殺二者盜三者邪

---

る。我らは今、請おう。」といった。即ぐに請うて、「起って師子座につき処坐って説かれよ。仏は何処にいまして、初めて毘尼の結戒を説かれたのか。」といった。憂婆離は僧伽の教を受けて、師子座に処坐って説いた。「かくの如く、我、聞く。一時、仏、毗舎離（Vaiśālī）にましました。その時、須提那迦蘭陀長者（Sudinna-Kalanda）の子が初めて婬欲をおこした。この因緣があったので、初めて大罪を二百五十戒の義に結られた。三部[56]（trivarga）と七法[57]（saptadharma）と八法[58]（aṣṭadharma）と比丘尼の毘尼（bhikṣuṇīvinaya）と増一[59]（ekottara）と憂婆利問[60]（upāliparipṛcchā）、雑部（kṣudrakavarga）、善部[61]（kuśalavarga）、このような八十部[62]の毘尼蔵（Vinayapiṭaka）を作った。」と。

諸の阿羅漢はまた更に「誰が明了に阿毘曇（Abhidharma）の蔵（piṭaka）を集められるのか。」と思惟った。（皆は）「長老の阿難は五百阿羅漢の中で修妬羅（sūtra）の義を解修すること第一であった。我らは今、請おう。」と、念言った。すぐに請うて言った。「起って師子座にゆき処坐られよ。仏は何処にいまして、初めて阿毘曇を説かれたのか。」と。阿難は僧伽の教を受けて師子座に処坐って説いた。「このように我、聞く。一時、仏、舎婆提城（Śrāvasti 舎衛城）にましました。その時、仏は諸の比丘（bhikṣu）に告げられた。諸有の五怖[63]（bhaya）、五罪[64]（āpatti）、五怨[65]（vaira）を除き滅しなければ、この因緣によって、今生のうちで身心は無

婬四者妄語五者飲酒。如是等名阿毘曇藏。三法藏集竟。諸天鬼神諸龍天女種種供養。雨天華香幡蓋天衣。供養法故。於是說偈。

憐愍世界故　集結三藏法
十力一切智　說智無明燈

〔八犍度阿毘曇・六部阿毘曇〕

問曰。八犍度阿毘曇六分阿毘曇等。從何處出。答曰。佛在世時法無違錯。佛滅度後初集法時亦如佛在。後百年阿輸迦王。作般闍于瑟大會。諸大法師論議異故。有別部名字。從是以來展轉。至姓迦旃延婆羅門道人。智慧利根盡讀三藏內外

量の苦を受け、また後世に悪道（durgati）のうちに堕ちてしまう。諸有（あらゆる）この五怖、五罪、五怨がなければ、この因縁によって、今生のうちで種に身心に楽（sukha）をうけ後世に天上の楽処（sukhavihāra）に生まれよう。どのような五怖を遠ざけるべきか。一には殺 prāṇātipāta、二には盗 adattādāna、三には邪婬 kāmamithyācāra、四には妄語 mṛṣāvāda、五には飲酒 madgāpāna である。このようなものを阿毘曇蔵と名づける。」と。

70 a

三法蔵は集めおわった。諸天、鬼神、諸龍、天女は種々に供養して、天の華（puṣpa）、香（gandha）、幡（patāhā）、蓋（chattra）、天衣（vastra）を雨ふらした。法に供養するが為であった。ここにおいて偈を説いた。

世界を憐愍するが故に、
三蔵の法を集結す。
十力[66]（daśabala）、一切智もて、
説ける智は無明（avidyā）の燈（dīpa）なり。

問うていう。「八犍度阿毘曇[67]（Aṣṭagranthābhidharma）、六分阿毘曇（ṣaṭpādābidharma）〔＝六足論〕[68]等は何処で出されたのか。」と。答えていう。「仏、世にいます時は法は違錯（いそう）することはなかった。仏が滅度した後、初めて法を集めた時もまた仏在（い）ますが如くであった。後百年たって阿輸迦王（Aśoka）が般闍于瑟（はんじゃうしつ）（pañcavarṣapariṣad）大会[69]をおこし、諸の大法

經書。欲解佛語故。作發智經八犍度。初品是世間第一法。後諸弟子等。爲後人不能盡解八犍度故。作鞞婆娑。有人言。六分阿毘曇中。第三分八品之名分別世處分。（此是樓炭經。作六分中第三分。）是目犍連作。六分中初分八品四品。是婆須蜜菩薩作。四品是罽賓阿羅漢作。餘五分諸論議師所作。有人言。佛在時舍利弗解佛語故。作阿毘曇。後犢子道人等讀誦。乃至今名爲舍利弗阿毘曇。摩訶迦旃延佛在時。解佛語作蜫勒。（蜫勒秦言篋藏。）乃至今行於南天竺。皆是廣解佛語故。如說五戒。幾有色幾無色。幾可見幾不可見。幾有對幾無對。幾有漏幾無漏。幾有爲幾無爲。幾有報幾無報。幾有善幾不善。幾有記幾無記。如是等是名阿毘曇。

復次七使。欲染使瞋恚使。有愛使憍慢使。無明使見使疑使。是七使。幾欲界繫幾色界繫幾無色界繫。幾見諦斷幾思惟斷。幾見苦斷幾見集斷。幾見盡斷幾見道斷。幾遍使幾不遍使。

十智法智比智世智他心智。苦智集智滅智道智。盡智無生智。是十智。幾有漏幾無漏。幾有爲幾無爲。幾有漏緣幾無漏緣。幾有爲緣幾無爲緣。

---

師の論議が異ったので、別の部（nikāya）の名字（めいじょう）があった。これより展転して、姓が迦旃延（Katyāyana）という婆羅門道人にいたった。（彼は）智慧が利根（すぐれ）て（tīkṣnendriyavat）、三蔵（tripiṭaka）や内外の経書（ādhyātmikabāhyasūtra）を読み尽した。仏語を理解しようとして『発智経八犍度』（Jñānaprasthānāṣṭagrantha）〔八犍度阿毘曇〕をつくった。初品はこれ「世間第一法」[70]（laukikāgradharma）であるが、後の諸の弟子達は、後人が尽く八犍度（Aṣṭagrantha）を理解しきれない為に、『鞞婆娑』（Vibhāṣā）を作った。[71] 有る人はいう。「六分阿毘曇（ṣaṭpādābhidharma）のうちで、第三分の八品は分別世処分と名づける。[72]（これは樓炭経では六分の中の第三分である。）これ目犍連（Maudgalyāyana）の作である。六分（阿毘曇）のうちで初分の八品のうち四品はこれ婆須蜜菩薩[73]（Vasumitra）の作で、（残りの）四品はこれ罽賓（カシュミール）（Kaśmīra）の阿羅漢の作である。余（ほか）の五分は諸の論議師（upadeśācarya）の作るところである。」と。有る人はいう。「仏がましました時、舎利弗（Śāriputra）は仏語を理解したから阿毘曇を作った。後に犢子道人[74]（Vāsiputrīya）らが読誦し、かくて今に至るまで舎利弗阿毘曇[75]（Śāriputrābhidharma）と名づけている。

摩訶迦旃延（Mahākātyāyana）は、仏がまします時、仏語を理解したので、蜫勒（こんろく）[76]（Paiṭaka）を作った。（蜫勒は秦では篋蔵（きょうぞう）という。）かくて今に至るまで南天竺に行なわれている。皆、これは広く仏語を理解しているからである。

五戒（śīla）を（つぎの）ように説いている。幾か有色（rūpin）、幾か

幾欲界縁幾色界縁幾無色界縁。幾不繫縁。幾無礙道中修。幾解脱道中修。四果得時幾得幾失。如是等分別一切法。亦名阿毘曇。爲阿毘曇三種。一者阿毘曇身及義。略說三十二萬言。二者六分。略說三十六萬言。三者蜫勒。略說三十二萬言。蜫勒廣比諸事以類相從。非阿毘曇。略說如是我聞一時總義竟。

---

無色（arūpin）、幾か可見（sanidarśana）、幾か不可見（anidarśana）、幾か有対（sapratigha）、幾か無対（apratigha）、幾か有漏（sāsrava）、幾か無漏（anāsrava）、幾か有為（saṁskṛta）、幾か無為（asaṁskṛta）、幾か有報（vipāka）、幾か無報（avipāka）、幾か有善（kuśala）、幾か不善（akuśala）、幾か有記（vyākṛta）、幾か無記（avyākṛta）である。このようなものがこれ阿毘曇である。

また次に七使（anuśaya）は、欲染使（kāmarāga）、瞋恚使（pratigha）、有愛使（bhāvarāga）、憍慢使（māna）、無明使（avidyā）、見使（dṛṣṭi）、疑使（vicikitsā）である。この七使には幾か欲界繫[77]（kāmadhātu）、幾か色界繫（rūpadhātu）、幾か無色界繫（ārūpyadhātu）、幾か見諦断（satyadarśanaheya）、幾か思惟断（bhāvanāheya）、幾か見苦断（duḥkhadarśanaheya）、幾か見集断（samudayadarśanaheya）、幾か見尽断（nirodhadarśanaheya）、幾か見道断（pratipaddarśanaheya）、幾か遍使（anuśaya）、幾か不遍使（ananuśaya）である。十智（jñāna）は法智（dharmajñāna）、比智（anuvaya-j°）、世智（lokasaṁvṛti-j°）、他心智（paracitta-j°）、苦智（duḥkha-j°）、集智（samudaya-j°）、滅智（nirodha-j°）、道智（mārga-j°）、尽智（kṣaya-j°）、無生智（anutpāda-j°）である。この十智には、幾か有漏、幾か無漏、幾か有為、幾か無為、幾か有漏縁、幾か無漏縁、幾か有為縁、幾か無為縁、幾か欲界縁（kāmadhātu）、幾か色界縁（rūpa-d°）、幾か無色界縁（ārūpya-d°）、幾か不繫縁（anavaca-

70 b

ra)、幾か無礙道中（ānantaryamārga）の修、幾か解脱道中（vimukti-mārga）の修、四果(phala)を得る時、幾か得(prāpti)、幾か失(aprāpti)である。このように一切法（sarvadharma）を分別（vibhajana）することをもまた、阿毘曇と名づける。

阿毘曇に三種ある。一つは阿毘曇の身及び義（いみ）であり、三十二萬言を略説している。二つは六分（阿毘曇）であり、三十六萬言を略説している。三つには蜫勒であり、三十二萬言を略説している。蜫勒は広く諸の事を比べて類をもって相い従わせる。これは阿毘曇ではない。[78]

「かくの如く我、聞く。一時。」の総義を略説しおわった。

〔註〕

（1）第三　麗本は「第二」に作る。大正蔵本の「第三」は誤りとみられる。

（2）一時　麗本のみに見られる。

（3）自然無師　〔真諦・倶舎釈論・巻九〕於人道中。随有一人。自然無師法爾。所得修入初定。（T二九・二二〇b）とあり、通常は「自然法爾」といわれる。

（4）真実善語　真実のことばの意。〔真諦、倶舎釈論、巻一九〕三有為相。所離故静。真実善故妙。（T二九・二八八b）

（5）釈提桓因得道経　釈提桓因は skt. Śakro devānāṃ Indraḥ の音写。三十三天の主である帝釈天をいう。〔長阿含経、巻第一〇〕（T一・六二b～六六a）釈提桓因問経（Sakraprasnasūtra）については山田龍城著『梵語仏典の諸文献』四四頁を参照。

（6）憍尸迦　婆羅門種であってマカダに生まれ舎利弗に依って帰仏出家する。前註『釈提桓因問経』、『中阿含・釈問経（T一・六三二）』に出ず。

（7）初中下法　初夜・中夜・後夜の教法のことで、仏の悟り得たものは最初・中間・最後において同一なることをいう。〔無量義経・説法品〕而初非中。而中非後。初中後説。文辞雖一。而義各異。（T九・三八六b）

（8）伊蘭　skt. eraṇḍa の音写。植物名でとうごまの一種である。種子には多少の毒分を含有し、しぼった油は下剤に効力がある。芳香ある旃檀に対して用いられる。〔観仏三昧経、巻一〕譬如伊蘭倶旃檀。生末利山。牛頭旃檀生伊蘭叢中。未及長大。在地下時。芽茎枝葉。如閻浮提竹筍。衆人不知。言此山中純是伊蘭無有旃檀。而伊蘭臭。臭苦膠屍薫四十由旬。其華紅色甚可愛楽。若有食者。発狂而死。牛頭旃檀雖生此林。未成就故。不能発香。仲秋月満卒従地出成旃檀樹。衆人皆聞。牛頭旃檀上妙之香。永無伊蘭臭悪之気。（T十五・六四七a）

（9）牛頭旃檀　峰が牛の頭に似た山であることから牛頭といい、その山に育つ木という意でこの名がある。旃檀はびゃくだんのことで、インド、マレーシア等に産する常緑の木である。木村四郎著『本草の植物』四六七頁参照。前註（8）参照。

（10）摩梨山　未利山のこと。註（7）参照。

（11）阿泥盧豆　仏陀の従弟であって天眼第一として十大弟子に加えられる。阿那律ともいう。

（12）車匿 Channa　仏陀出家の時、御者として随伴した人物。闡怒他比丘と親近せず六群の比立に組して悪見を習った。仏これに対して制戒を定められたという。悪口車匿の呼称あり。〔鼻奈耶第九〕（T二四・八八八c）。赤沼辞典一二八頁。

（13）内観身　三本に従い観内身とみる。〔大智度論、巻一〕於是比丘観内身三十六物。除欲貪病。如是観外身。観内外身。（T二五・六二c）身は四念処第一の身であって、父母所生

の肉身をさす。

(14) 外身　内外身註(13)参照。

(15) 念処　身、受、心、法の四つの修行の方法。身は不浄、受は苦、心は無常、法は無我であることを観じ、浄楽我浄の四顚倒を破ること。

(16) 解脱戒経　元魏・般若流支訳『解脱戒経』(T二四・六五九a～六六五b)

(17) 梵法　梵天法、梵壇 brahmadaṇḍa ともいい、黙擯と訳す。戒律における処罰法の一つである。梵王の宮前に一壇を立て、天衆如法でないものがあれば壇上に立たせ、衆僧が黙してその者と語を交えないことをいう。〔長阿含経・巻四〕爾時阿難長跪叉手。前白仏言。闡怒比丘(車匿)虐愆自用。仏滅度後。当如之何。仏告阿難。我滅度後。若闡怒不順威儀。不受教誡。汝等当共行梵檀罰。(T一・二六a)。〔五分律、巻三十〕即問。云何名梵壇法。答言。梵壇法者。一切比丘比丘尼優婆塞優婆夷不得共汝来往交言。(T二二・一九二a)

(18) 刪陀迦旃延経　未詳。

(19) 三阿僧祇劫　菩薩が仏となるまでに経過する無限の時間を三分したもの。第一阿僧祇劫は、十信・十住・十行・十回向の四十位、十地中の初地から七地までを第二阿僧祇劫、八地から十地までと第三阿僧祇劫とする。〔増一阿含経・巻一〕三阿僧祇集法宝。使後四部得聞法(T二・五四九b)

(20) 中正　中道にして正しい行為。〔那先経〕行中正(T三二・六九五c)

(21) 眼智明覚　〔玄奘、倶舎論、第二四〕此苦聖諦。此応遍知。此已遍知。是名三転。即於如是一一転時。別別発生。眼智明覚覚。説此名曰。十二行相。(T二九・一二八c)

(22) 集法経　『法集経』のことか。(T一七・六〇九c以下)

(23) 六種動　六種震動のこと。仏が説法する時の瑞相で、大地が六通りに震動することである。〔摩訶般若波羅蜜経、第一〕爾時世尊。故在師子座。入師子遊戯三昧。……六種震動。東踊西没。西踊東没。南涌北没。北涌南没。辺涌中没。中通辺没。(T一八・三一七c)

(24) 世間眼　仏・菩薩は世人の眼となって道を指示することで、仏・菩薩の尊称である。〔倶舎釈論、巻二二〕大師世間眼已閉。又証教人稍滅散。(T二九・三〇四a)

(25) 券　債券のこと。〔中論(一七・十四)〕不失法如券。業如負財物。(T三十・二二a)

(26) 四大の蛇　〔涅槃経、巻二三〕観身如篋。地水火風。如四毒蛇(T一二・四九九b)

(27) 譬如雁王　〔根本説一切有部毘奈耶出家事、巻四〕曰。捉我衣角。承我神通。而往仏所。即昇虚空。猶如鴈王。(T二三・一〇三七a)

(28) 六欲天乃至遍浄天　六欲天とは四王天三十三天(忉利天)、

夜摩天、都史多天（兜率天）楽変化天、他化自在天をさす。乃至遍浄天とは、この欲界の六欲天に、色界の初禅天（梵天、梵衆天、梵輔天、大梵天）、二禅天（少光天、無量光天、光音天）、三禅天（少浄天、無量浄天、遍浄天）をさす。

(29) 法薬　世の人の病を治す教えとしての薬。〔無量義経、十功徳品第三〕能以法楽。施諸衆生。（T九・三八八c）

(30) 共解脱　倶解脱ともいう。慧解脱に滅尽定の心解脱を得たもの。〔倶舎論、巻二五〕学無学位。有七聖者。一切聖者。皆此中摂。一随信行。……六慧解脱。七倶解脱。（T二九・一三一b）

(31) 無礙解脱　三種阿羅漢のうち慧解脱、倶解脱を得、さらに縁念処を修し、韋陀外道を破した阿羅漢の中の最高位のもの。

(32) 十八種大経　巻一註(113)参照。〔智度論、巻二五〕仏所不説。外諸経書弊迦蘭那僧佉韋陀等。十八種大経書。（T二五・二四三b）。四吠陀、六論、八論の印度外道の十八の経書。

(33) 女人出家　〔十誦律、巻六十〕大迦葉復語阿難。仏不聴女人出家。汝乃至三請。令女人出家。以是事故得突吉羅。是罪如法懺悔。阿難答言。我不軽戒。非不敬仏。但以過去諸仏。皆有四衆。今我世尊。云何独無四衆。是故乃至三請。（T二二・四四九c）

(34) 突吉羅　悪いしわざの意で軽い罪をいう。狭い意では身業による罪のみを指し、故意になしたものは一人の比丘の前で、若し故意でなければ自己の心中で懺悔することになっている。大乗戒では波羅夷罪の外はすべてこれに属す。悪作とも訳す。

(35) 瞿曇弥　摩耶夫人の妹で、夫人の死後は太子を養育した。

(36) 漚多羅（だいえ）　中価衣（ちゅうけえ）ともいう。三衣の中で中位の価値をもつ衣のこと。入衆衣、七条衣ともいう。

(37) 四畳　二度たたんで四つ折りにすること。〔四分律、第四〕自襞僧伽梨四畳。（T三二・五九二c）。〔一切経音義、巻四六〕四畳（徒頰反。蒼頡篇畳重也。積也。論文又作襞。音同畳。説文重衣也。南有畳江県也。二形随作也。）（T五四・六一〇b）

(38) 不供給水　〔十誦律、巻六十〕大迦葉復語阿難。仏語汝。迦拘陀河取一鉢水。汝言。迦拘陀河水濁未清。不即取水。以取事故。汝得突吉羅。是罪如法懺悔。阿難答言。我不軽戒。非不敬仏。時五百乗車。漉渡未久。水濁水清。以是故。不即取水与仏。（T二三・四四九c）

(39) 正使　〔法華経、方便品〕正使出于世。説是法復難。（T九・十a）

(40) 若有人四神足好修……魔蔽我心。〔十誦律、六十〕摩訶迦葉語阿難。仏三語汝。閻浮提地種種事。楽寿命最快。若人有修四如意足。能住寿一劫。苦減一劫。阿難、仏四如意足善修。苦欲住寿一劫、苦減一却、自在能住、汝何以不請仏久住。以是事故、汝得突吉羅罪。是罪汝当如法懺悔。莫覆蔵。阿難

答。我不軽戒非不敬仏故、不請久住。居時魔蔽我心。不自覚知是故不即請仏久住。（T二三・四四九b）

(41) 僧伽梨衣　三衣の中で最大のものをいう。説法や托鉢のため宮中や聚落に入る時着用する衣。

(42) 汝与仏疊僧伽梨衣足蹈上。以足蹈上〔十誦律六十〕大迦葉復語阿難。汝以足襞仏衣。得突吉羅。是罪如法懺悔。阿難答言。我下軽戒。非不敬仏。是時大風卒起。更無余。我蹙仏衣。以是故足躡。（T二三・四四九c）

(43) 陰蔵相　陰部のことをいう。仏の陰蔵は腹部に収まっていて外に現われていないのは馬と同様であることから馬陰蔵ともいう。仏の三十二相の一。

(44) 仏陰蔵相般涅槃後以示女人。〔十誦律六十〕大迦葉復語阿難。仏滅度後、汝何以出仏陰蔵相。以示女人。以是事故、汝得突吉羅。是罪、如法懺悔。阿難答言。是女人福徳浅薄。欲得見仏相。見已厭離女身。後得男子形。以是故示。（T二二・四四九c）

(45) 悔過　波羅提提舎尼法のことで、『四分律』『五分律』で悔過法といって、突吉羅と同様に一人の比丘の前で懺悔することが必要とされる。

(46) 憍梵波提　skt. Gavāmpati の音写。仏弟子の一人で舎利弗を師をする。赤沼智善著『印度仏教個有名詞辞典』一九九頁を参照。



(47) 牛司　慧琳は「一切経音義」巻四六で、牛齣として註している。慧琳のみた智度論では牛齣とあったようである。即ち「又作齝。三蒼作齕。詩伝作呵同。丑之反。韻集。音式之反。尒雅牛日璞。郭璞曰。食之已。復出嚼之也。（T五四・六一〇b）

(48) 閻浮提　〔倶舎論十一〕大雲山北、有香醉山、雲北香南、有大池水。名無熱悩。……於此池側。有贍部林樹。樹形高大。其果甘美。依此林、故名贍部洲。（T二九・五八a）〔智度論三十五〕如閻浮提者。閻浮、樹名。其林茂盛。此樹於林中最大。提名為洲。（T二五・三二〇a）

(49) 軟善→善軟　〔法華経、方便品〕諸仏滅度已。若人善軟心。如是諸衆生。皆已成仏道。（T九・八c）

(50) 転法輪将、仏の教法を伝うべき指導者のことで舎利弗のことをいう。

(51) 入道跡　〔無量義経、十功徳品〕摂苦衆生。令入道跡。（T九・三八八c）

(52) 水月→水中月　水に写った月のように、実体のないことに譬える。〔智度論、巻六〕如水中月者、月実在虚空中。影現於水。実法相月、在如法性、実際虚空中。而凡天人、心水中。有我我所相現。以是故、名如水中月。復次如小児見水中月。歓喜欲取。大人見之則笑。無智人亦如是。（T二五・一〇二b）

(53) 芭蕉　バナナの木名。皮をむいていっても、何も得られないことで、実体がないことに譬えられる。〔普曜経、巻八〕痛痒如泡。思想如芭蕉。（T三・五三三a）〔維摩経、巻二〕是身無常。……是身如炎従渇愛生。是身如芭蕉中無有堅。（T一四・五二九b）

(54) 転法輪経　安世高訳「転法輪経」（T二）、義浄訳「三転法輪経」（T二）がある。梵本などについては、山田龍城著前掲書、四五頁参照。

(55) 二百五十戒　小乗戒で比丘の守るべき戒律が二百五十戒という。波羅夷四、僧残十四、不定二、捨堕三十、単堕九十、提舎尼四、衆学百、滅浄七を含む。

(56) 三部　未詳。

(57) 七法　受具足戒法、布薩法、自恣法、安居法、皮革法、医薬法、衣法。〔十誦律五十一〕爾時長老優波離問仏若論毘尼。時従何処求。仏言、応従比丘、比丘尼戒中求。七法・八法・増一中求。……（T二三・三七八c）

(58) 八法　迦絺那衣法、倶舎弥法、瞻波法、槃茶廬伽法、僧残悔法、遮法、臥具法、諍事法。

(59) 毘尼増一　律蔵の付随的説明の部分をいい、パーリ律蔵のparivāraと部分的に対応する。〔四分律、五八巻〕（T二二・九九四a）

(60) 憂婆利問　憂（優）婆利の問によって戒律（小乗戒）を説いたもの。『優婆離問仏経』に出ず。憎悪に基ずく罪は貪欲による罪より重いとなすなど小乗の戒律が説かれている。

(61) 雑部善部　十誦律などにみる雑誦、善誦毘尼をいう。

(62) 八十部　八十誦律のこと。〔新集律分為五部記録第五、出毘婆沙〕仏泥洹後大迦葉集諸羅漢。於王舎城安居。命優婆離出律。八萬法蔵有八十誦。（T五四・一九c）

(63) 五怖　五怖畏（五恐怖）のこと。不活畏・悪名畏・死畏・悪道畏、大衆威徳畏をいう。

(64) 五罪↓五逆罪（殺母、殺父、殺阿羅漢、悪心出仏身血、破和合僧）か、（殺・盗・邪淫・妄語・飲酒）か。

(65) 五怨　〔十誦律巻六十〕長老摩訶迦葉、復問阿難、仏何処始説阿毘星。阿難答言。如是我聞。一時仏在舎婆提。爾時、仏告諸比丘。若人五怖五罪五怨五滅。是人、五怖罪、怨故。死後、譬如力士屈伸臂頃。堕於地獄。何等五。一者殺。二者偸。三者邪婬、四者妄語、五者飲酒。若人五怖五罪五怨五滅。是人五怖罪怨滅故。死後譬如力士屈伸臂頃。生於天上。何等五。一者、不殺怖罪怨滅。不偸不邪婬、不妄語不飲酒。亦如是怖罪怨滅。（T二三・四四九a）

(66) 十力　如来十力のことで、仏の具有する十種の力をいう。①処非処智力　②業異熟智力　③静慮解脱等持等至智力　④根上下智力　⑤種々勝解智力　⑥種々界智力　⑦遍趣行智力　⑧宿住随念智力　⑨死生智力　⑩漏尽智力

〔智度論、巻二五〕答曰。仏初得道。得一切仏法十力四無所畏等。……問曰仏有十力四無所畏。菩薩有不。答有。（T二五・三四五b～六a）

(67) 八犍度阿毘曇　阿毘曇八犍度とも、迦旃延阿毘曇発智論ともいう。僧伽提婆・竺仏念訳「阿毘曇八犍度論」三十巻（T二六）、玄奘訳「阿毘達磨発智論」二十巻（T二六）がある。

(68) 六分阿毘曇　六足論（識身足論、品類足論、法蘊足論、集異門足論、施設論、界身足論）ともいう。『大正蔵』巻二六に収められる。『出三蔵記集』巻四に失訳として、六足阿毘曇一巻として見える。（T五五・三六a）

(69) 般闍于瑟大会　般闍婆瑟会とも音写する。五歳会・五年会とも漢訳する。五年ごとの大祭で、衆僧や在家信者に対して供養をする儀式。〔十誦律、巻十〕（T二三・三三c）

(70) 世間第一法　僧伽提婆・竺仏念訳「阿毘曇八犍度論」巻第一に「世間第一法跋渠第一」と見える。（T二六・七七一b）

(71) 作鞞婆娑　迦旃延子造・五百羅漢釈・浮陀跋摩・道泰共訳「阿毘曇毘婆娑論」六十巻（下二八）、五百大阿羅漢等造・玄奘訳「阿毘達磨大毘婆沙論」二百巻（T二七）がこれにあたるであろう。

(72) 楼炭経　西晋、法立・法炬共訳「大楼炭経」六巻（T一・二七七頁以下）か。

(73) 婆須蜜菩薩　世友と訳す。説一切有部の第一祖である。

大智度論和訳（中祖・諏訪・大野・吉田）

(74) 犢子道人　犢子部 Vatsiputra の人々のことで、小乗二十部の一つ。仏滅三百年頃、説一切有部より出て、舎利弗の法系を受け、阿毘曇を重視する一派。萬有を有為の三世と無為と不可説の五蔵に分けて説く。

(75) 舎利弗阿毘曇　姚秦・罽賓三蔵、曇摩耶舎・曇摩崛多訳「舎利弗阿毘曇論」三十巻（T二八・五二五c以下）などこれに当るか。

(76) 崐勒　本論によってその存在を知る。箇蔵（三蔵）を奉ずるものという意で小乗四門の一つ。亦有亦空を説く一派。「広く諸事を比して類を以て相従わしめる」（本論）のを本領とする。〔一切経音義、巻四六〕崐勒古塊反。此訳云箧蔵也。望月仏教大辞典巻二、一三八一頁、同項参照。荻原雲来稿「崐勒とは何ぞや」（『哲学雑誌』第二二ノ二四四）。

(77) 欲界繫　欲界に束縛されていること。〔大智度論、巻十一〕檀有三種。或欲界繫、或色界繫、或不繫。（T二五・一四〇c）

(78) 崐勒……非阿毘曇　この文は割註であったものが本文となったものでなかろうか。

〔婆伽婆釋論〕

大智度初品中婆伽婆釋論第四

經婆伽婆　論今當説。釋曰。云何名婆伽婆。婆伽婆者。婆伽言德。婆言有。是名有德。復次婆伽名分別。婆名巧。巧分別諸法總相別相故。名婆伽婆。復次婆伽名名聲。婆名有。是名有名聲。无有得名聲如佛者。轉輪聖王釋梵護世者。无有及佛。何況諸餘凡庶。所以者何。轉輪聖王與結相應。佛已離結。轉輪聖王沒在生老病死泥中。佛已得渡。轉輪聖王爲恩愛奴僕。佛已永離。轉輪聖王處在世間曠野災患。佛已得離。轉輪聖王處在无明闇中。佛處第一明中。轉輪聖王若極多領四天下。佛領无量諸世界。轉輪聖王財自在。佛心自在。轉輪聖王貪求天樂。乃至有頂樂亦不貪著。轉輪聖王從他求樂。佛內心自樂。以是因緣佛勝轉輪聖王。諸餘釋梵護世者亦復如是。但於轉輪聖王小勝。復次婆伽名破。婆名能。是人能破婬怒癡故。稱爲婆伽婆。

---

大智度初品中の「婆伽婆」の釈論　第四

經婆伽婆 (Bhagavat) 論今、（これを）説こう。解釈していう。

どうして婆伽婆[1]と名づけるのか。婆伽婆とは、婆伽 (bhāga) を徳 (guṇa) といい、婆 (vat) を有つという。これを有徳と名づける。また次に婆伽を分別 (vibhāga) と名づけ、婆を巧 (kuśala) と名づける。巧みに諸法の総相 (sāmānyalakṣaṇa) と別相 (svalakṣaṇa) とを分別するので、婆伽婆と名づける。また次に婆伽を名声 (yaśas) と名づけ、婆を有つと名づけ、これを有名声と名づける。その名声を得ることは、仏に如くものはない。転輪聖王[2] (Cakravartin) や釈 (Indra)・梵 (Brahmā)・護世[3] (Lokapāla) も、仏の（名声に）及ぶことはない。まして諸余の凡庶 (pṛthagjana) はなおさらである。理由はどうしてか、（というならば）、転輪聖王は結[4] (bandhana)〔煩悩〕と相応いている (bandhanasaṁyukta) のに、仏は已に結を離れている。転輪聖王は生 (jāti)・老 (jalā)・病 (vyādhi)・死 (maraṇa)〔生死、迷い〕の泥中に没しているのに、仏は已に（涅槃）に渡りおわっている。転輪聖王は恩愛 (anunaya) の奴僕になっているが、仏は已に（恩愛）を永離している。転輪聖王は世間曠野 (Lokakāntāra) の災患に処しているが、仏は已に（それを）離れている。転輪聖王は無明闇[5] (avidyāndhakāra)〔煩悩〕の中に処しているが、仏は第一明[6] (paramāloka)〔智慧〕中に処している。転輪聖王はもし極めて

〔舎利弗因縁〕

問曰。如阿羅漢辟支佛。亦破婬怒癡與佛何異。答曰。阿羅漢辟支佛雖破三毒。氣分不盡。譬如香在器中香雖出餘氣故在。又如草木薪火燒煙出炭灰不盡。火力薄故。佛三毒永盡無餘。譬如劫盡火燒須彌山一切地都盡無煙無炭。如舎利弗瞋恚氣殘。難陀婬欲氣殘。必陵伽婆磋慢氣殘。譬如人被鎖初脱時行猶不便。時佛從禪起經行。羅睺羅從佛經行。佛問羅睺羅。何以羸瘦。羅睺羅說偈答佛

若人食油則得力　　若食酥者得好色

多くても四天下（cāturdvīpaka）を領めるだけであるが、仏は無量の諸世界（apramāṇalokadhātu）を領めている。転輪聖王は財が自在で（vaśitā）あるが、仏は心が自在である。転輪聖王は天楽（devasukha）を貪求するが、仏は有頂の楽（bhagāgrasukha）に至るまでもまた貪著されない。転輪聖王は他によって楽を求めるが、仏は内心において自ら楽しむ。この因縁によって、仏は転輪聖王に勝っている。諸余の釈・梵・護世もまた同様である。但し、転輪聖王より少し勝るだけである。また次に婆伽を破（bhaṅga）と名づけ、婆を能くと名づける。この人、能く婬（rāga）・怒（dveṣa）と痴（moha）を破すので、称して婆伽婆とする。

70 c

問うていう。「阿羅漢（Arhat）や辟支仏（Pratyekabudha）のようなものもまた婬と怒と痴を破す。仏とどのように異なるのか。」と答えていう。「阿羅漢や辟支仏は三毒（triviṣa）を破すが、気分[7]（vāsanā）を尽くしていない。譬えば、香（gandha）が器中にあって香がなくなっているのに余気がなお残っているようなものである。また草木の薪が焼け煙がなくなっているのに炭灰が尽きていないようなものである。火力がわずかに（残っている）からである。仏の三毒（triviṣa）はすっかり尽き残っていない。譬えば、劫尽の火[8]（yugānta-agni）が須弥山（Sumeru）の一切の地を焼きすっかり尽きて煙が無く炭も無いようなものであり、舎利弗[9]（Śāriputra）に瞋恚の気分（dvveṣavāsanā）が残り、難陀[10]（Nanda）に婬欲

食麻滓菜無色力　　大德世尊自當知

佛問羅睺羅。是衆中誰爲上座。羅睺羅答。和上舍利弗。佛言。舍利弗食不淨食。爾時舍利弗轉聞是語。卽時吐食自作誓言。從今日不復受人請。是時波斯匿王長者須達多等。來詣舍利弗所。語舍利弗。佛不以無事而受人請。大德舍利弗復不受請。我等白衣云何當得大信淸淨。舍利弗言。我大師佛言。舍利弗食不淨食。今不得受人請。於是波斯匿等至佛所白佛言。佛不常受人請。舍利弗復不受請。我等云何心得大信。願佛勅舍利弗還受人請。佛言。此人心堅不可移轉。佛爾時引本生因緣。昔有一國王。爲毒蛇所嚙。王時欲死呼諸良醫令治蛇毒。時諸醫言。還令蛇嗽毒氣乃盡。是時諸醫各設呪術。所嚙王蛇卽來王所。諸醫積薪燃火勅蛇。還嗽汝毒。若不爾者當入此火。毒蛇思惟。我旣吐毒。云何還嗽。此事劇死。思惟心定卽時入火。爾時毒蛇舍利弗是。世世心堅不可動也。

---

の気分(rāga-v°)が残り、必陵伽婆磋(11)(Pilindavatsa)に慢(おごり)の気分(māna-v°)が残っているようなものである。譬えば、人が鎖に縛られ初めて脱した時に行(うごき)(動)が不都合であるようなものである。」と。(ある)時に仏が禅定(samādhi)より起って経行された。羅睺羅(12)(Rāhula)は仏に従って経行した。仏が羅睺羅に問う。「どうして羸(やせ)痩ているのか。」と。羅睺羅は偈を説き仏に答えた。

もし人、油を食せばすなわち力を得、
もし、酥を食せば好き色を得、
胡麻、滓、菜を食せば色、力なし。
大德世尊よ、自らまさに知りたもうべし。

仏が羅睺羅に問う。「この衆中、誰が上座(sthavira)であるのか。」と。羅睺羅が答えた。「和上(upādhyāya)の舎利弗です。」と。仏がいわれた。「舎利弗は不浄食(13)(aviśuddhāhāra)を食している。」と。その時、舎利弗は、この語をまた聞きし、すぐに食べたものを吐き、自ら誓いをな
71 a
していった。「今日より二度と人の請いを受けない。」と。この時、波斯匿王(14)(Prasenajit)と長者須達多(15)(Sudatta)などが、舎利弗の所に来詣して舎利弗に語った。「仏は理由なくして人の請いを受けない。大德(āyuṣmat)の舎利弗もまた請いを受けない。我等、白衣(16)(avadāta-vasana)〔在俗者〕は、どのようにして大信の淸浄(śraddhāviśuddhi)なることをうることができるでしょうか。」と。舎利弗がいう。「我が大師の仏が言

〔必陵伽婆蹉〕

復次長老必陵伽婆蹉常患眼痛。是人乞食常渡恒水。到恒水邊彈指言。小婢住莫流。水卽兩斷得過乞食。是恒神到佛所白佛。佛弟子必陵伽婆

う。舎利弗は不浄食を食すと。今は人の請いを受けられない。」と。そこで波斯匿王などが仏の所に至って仏に申し上げた。「仏は常には人の請いを受けられず舎利弗もまた請いを受けないならば、我等はどのようにして心に大信を得られようか。願わくは仏よ、舎利弗に勅じてまた人の請いを受けさせたまえ。」と。仏がいう。「この人の心は堅く、移転させることができない。」と。仏は、その時、本生[17]の因縁（jātakanidāna）を引かれた。昔、ある国王がいて、毒蛇に嚙まれた。王はその時死にそうであったので諸々の良医を呼び蛇の毒をちらさせようとした。その時、諸々の医者が言う。「ふたゝび蛇に毒気を嗽かせればくたばろう。」と。この時、諸々の医者がそれぞれ、呪術（mantra）を設けたところが、王を嚙んだ蛇がすぐに王の所に来た。諸々の医者は薪を積み火を燃やして蛇に勅じた。「ふたたびお前は毒を嗽け。そうでなければ、この火に入らなくてはならない。」と。毒蛇は思惟した。「我は既に毒を吐いた。どうしてまた嗽けようか。この事は死よりも劇いことだ。」と。（蛇は）思惟し、心に定めすぐに火に入った。その時の毒蛇が舎利弗である。世々にわたって心堅く動かすことができない。

また次に長老必陵伽婆蹉は、常に眼痛を患っていた。この人は乞食（piṇḍapāta）して、常に恒河（Gaṅgā）を渡っていた。（ある時）恒河の辺に到って弾指[18]して言った。「小婢（vatsara）よ、住まって流れるな。」

蹉。常罵我言小婢住莫流。水佛告必陵伽婆蹉。懺謝恒神。必陵伽婆蹉即時合手語恒神言。小婢蕩瞋今懺謝汝。是時大衆笑之。云何懺謝而復罵耶。佛語恒神。汝見畢陵伽婆蹉合手懺謝不。懺謝無慢而有此言。當知非惡。此人五百世來常生婆羅門家。常自憍貴輕賤餘人。本來所習口言而已。心無憍也。如是諸阿羅漢。雖斷結使猶有殘氣。如諸佛世尊。若人以刀割一臂。若人以旃檀香泥一臂。如左右眼心無憎愛。是以永無殘氣。

〔栴闍婆羅門女因緣〕

栴闍婆羅門女。木杅謗佛於大衆中言。汝使我有娠。何以不憂與我衣食。爲爾無羞誑惑餘人。是

と。水はすぐに両つに断れ渡ることができ、乞食をした。この恒河の神は仏の所に到り仏に申し上げた。「仏弟子の必陵伽婆蹉は、常って我を罵って、小婢よ、住まって流れるな。」と。仏が必陵伽婆蹉に告げられた。「恒河の神に懺謝しなさい」と。必陵伽婆蹉はすぐに手を合わせ恒河の神に語っていった。「小婢よ。（もう）瞋られるな。今、あなたに懺謝する。」と。この時、大衆（mahāsaṁgha）は、これを笑った。「どうして懺謝してまた罵るのか」と。仏は恒河の神に語られた。「お前は、畢陵伽婆が手を合わせ懺謝したのを見たのか。懺謝して慢（心）がなくてしかもこの言葉がでたのである。（悪んでいるのでないことを）知るべきである。この人は五百世にわたり常に婆羅門の家に生まれ、常に自ら憍貴[19]して余人を軽賤していた。（あの言葉は）本来、習慣的に身についた言葉さきのものなのだ。心には憍りの心はないのだ。」と。このように諸々の阿羅漢には、結使[20]（saṁyojana）〔煩悩〕を断じながらが、残気（vāsanā）があるようなものである。諸仏世尊の如きにおいてあるいは人が刀で一臂を割いても、あるいは人が栴檀香[21]（candanagandha）で一臂を泥ぬっても、左右の眼のように（自由に使い）心に憎愛がないのだ。このようなわけで永たく残気（vāsanā）がないのである。

71 b

栴闍（Ciñcā）婆羅門女[22]は、木杅（を使って）仏を大衆の中で誹謗していった。「あなたは、我を娠ませながら、どうして我に衣食を与えること

時五百婆羅門師等。皆擧手唱言是是。我曹知此事。是時佛無異色亦無慚色。此事卽時彰露地爲大動。諸天供養散衆名華。讚歎佛德佛無喜色。復次佛食馬麥亦無憂慼。天王献食百味具足。不以爲悅。一心無二。如是等種種飲食衣被臥具。讚呵輕敬等種種事中心無異也。譬如眞金燒鍛打磨都無增損。以是故阿羅漢雖斷結得道。猶有殘氣不得稱婆伽婆。

〔多陀阿伽陀〕

問曰。婆伽婆正有此一名更有餘名。答曰。佛功德無量。名號亦無量。此名取其大者。以人多識故。復有異名。名多陀阿伽陀等。云何名多陀阿伽陀。如法相解如法相說。如諸佛安隱道來。佛亦如是來。更不去後有中。是故名多陀阿伽陀。



をおもいわずらおうとしないのか。あなたは、どうして羞らうことなく、余人を誑惑（まどわ）しているのか。」と。この時、五百（人）の婆羅門師等が、皆、手を挙げて唱言した。「そうだ、そうだ。我曹（われら）は、この事を知っている。」と。この時、仏は変わった様子もなく、また慚じる気色もなかった。この事は、すぐに彰露（あらわ）れ、大地は大いに揺れた。諸天は供養して、おおくの名華を散じ、仏の徳を讃嘆したが、仏は喜びの様子はなかった。

また次に、仏は馬麦を食しても、また憂慼（いやが）ることもなかった。天王（devarāja）が食（āhāra）を献じ百味（śatarasa）が具足しても悅びとせず、一心（ekacitta）であって二（心）でなかった。これらのような種々の飲食・衣被・臥具・讃嘆・呵責・軽侮・敬仰など種々の事があっても心中に異なることがなかった。譬えば、真金が焼き鍛え打ち磨いてもすべて増損がないようなものである。この理由で、阿羅漢が結（bandhana）〔煩悩〕を断じ道（mārga）を得ても、残気（vāsanā）があるから、婆伽婆と称することはできない。

問うていう。「婆伽婆は、正（まさ）しくこの一つの名のみがあるのか、さらに余の名があるのか。」と。答えていう。「仏の功徳（guṇa）は無量（aprameāṇa）だから、名号もまた無量です。この名は、その大きなものを取ったのである。人が多く識っているからである。また別の名もある。多陀阿伽陀[23]（Ta-thāgata）等と名づけている。どうして多陀阿伽陀と名づけるの

〔阿羅呵〕

復名阿羅呵。云何名阿羅呵。阿羅名賊。呵名殺。是名殺賊。如偈說。

佛以忍爲鎧　精進爲剛甲
持戒爲大馬　禪定爲良弓
智慧爲好箭　外破魔王軍
內滅煩惱賊　是名阿羅呵

復次阿名不。羅呵名生。是名不生。佛心種子後世田中不生。無明糠脫故。復次阿羅呵名應受供養。佛諸結使除盡得一切智慧故。應受一切天地衆生供養。以是故佛名阿羅呵。

か。法相（dharmalakṣaṇa）のまゝに解し、法相のまゝに説く。諸仏のように安穏な道（yogakṣema-mārga）を来られた。仏もまた同様に来られて、さらに後有（punarbhava）〔最後身〕の中に去られない。この理由で多陀阿伽陀と名づける。

また阿羅呵[24]（Arhat）と名づける。どうして阿羅呵と名づけるのか。阿羅（ara）を賊（ari）と名づけ、呵（hat）を殺（han）と名づけ、ここを（合わせ）賊を殺すと名づけるのである。（次の）偈に説いているとおりである。

仏は、忍辱（kṣānti）を鎧とし、精進（vīrya）を剛甲となし、
持戒（śīla）を大馬となし、禅定（dhyāna）を良弓となし、
智慧（prajñā）を好箭となし、外には魔王の軍（mārasenā）を破し、
内には煩悩（kleśa）の賊を殺す、これを阿羅呵と名づく。

また次に、阿（a）を不と名づけ、羅呵（rahat）を生と名づけ、これを（合わせ）不生と名づける。仏心（buddhacitta）の種子（bīja）は、後世の田（punarbhavakṣetra）の中には生じない。無明（avidyā）の糠（かけら）すらも脱いているからである。また次に、阿羅呵を、供養（pūjā）を受くべきものと名づける。仏は諸結使（saṁyojana）を除き尽くし、一切の智慧（sarvajñatā）を得ているからである。あらゆる天地における衆生の供養を受くべきものである。この理由から仏を阿羅呵と名づける。

71 c

〔三藐三佛陀〕

復名三藐三佛陀。云何名三藐三佛陀。三藐名正。三名遍。佛名知。是名正遍知一切法。問曰。云何正遍知。答曰。

知苦如苦相　知集如集相
知滅如滅相　知道如道相

是名三藐三佛陀。復次知一切諸法實不壞相不增不減。云何名不壞相。心行處滅言語道斷。過諸法如涅槃相不動。以是故名三藐三佛陀。復次一切十方諸世界名號。六道所攝衆生名號。衆生先世因緣未來世生處。一切十方衆生心相。諸結使諸善根諸出要。如是等一切諸法悉知。是名三藐三佛陀。

---

また三藐三仏陀[25] (samyaksaṁbuddha) と名づける。どうして三藐三仏陀と名づけるのか。三藐 (samyak) を正と名づけ、三 (sam) を遍と名づけ、仏 (budh) を知と名づける。これを正遍知一切法と名づける。

問うていう。「どうして正遍知なのか。」と。答えていう。

苦を知ること、苦相 (duḥkhalakṣana) の如く、
集を知ること、集相 (samudaya-l°) の如く、
滅を知ること、滅相 (nirodha-l°) の如く
道を知ること、道相 (mārga-l°) の如し。

これを三藐三仏陀と名づける。

また次に、一切諸法は実に不壞の相 (abhedya) であり、不増 (anadhika)・不減 (anūna) であることを知る。どうして不壞の相と名づけるのか。心の行処 (cittavṛtti)〔心意の作用〕が滅し、言語の道 (abhilāpamārga) が断え、諸法を過えて涅槃の相が動じないようなものである。この理由で三藐三仏陀と名づける。

また次に、一切の十方の諸世界の名号 (adhivacana) 六道 (ṣaṣgati) に摂せられている衆生の名号、衆生の先世 (pūrvajanma) における因縁 (nidāna)、未来世 (anāgatajanma) における生処 (utpādasthāna)、一切の十方の衆生の心相 (cittalakṣaṇa)、諸の結使 (saṁyojana)、諸の善根 (kuśalamūla)、諸の出要[26] (niḥsaraṇa)〔生死を離脱する要道〕、これ

〔鞞侈遮羅那三般那〕

復名鞞侈遮羅那三般那。秦言明行具足。云何名明行具足。宿命天眼漏盡。名爲三明。問曰。神通明有何等異。答曰。直知過去宿命事。是名通。知過去因縁行業。是名明。直知死此生彼。是名通。知行因縁際會不失。是名明。直盡結使不知更生不生。是名通。若知漏盡更不復生。是名明。是三明大阿羅漢大辟支佛所得。問曰。若爾者與佛有何等異。答曰。彼雖得三明明不滿足。佛悉滿足。是爲異。問曰。云何不滿。云何滿。答曰。諸阿羅漢辟支佛宿命智。知自身及他人亦不能遍。有阿羅漢知一世或二世三世十百千萬劫乃至八萬劫。過是以往不能復知。是故不滿天眼明。未來世亦如是。佛一念中生住滅時。諸結使分生時。如是住時。如是滅時。如是苦法忍苦法智中所斷結使悉覺了。知如是結使解脫。得爾所有爲法解脫。得爾所無爲法解脫。乃至道比忍。見諦道十五心中。諸聲聞辟支佛所不覺知。時少疾故。如是知過去衆生因縁漏盡。未來現在

らの一切の諸法を悉く知っていること、これを三藐三仏陀と名づける。

また鞞侈遮羅那三般那[27] (Vidyācaraṇasaṁpanna) と名づける。秦では、明行具足 (vidyā-caraṇasaṁpanna) という。どうして明行具足と名づけるのか。宿命（通）(pūrvanivāsānusmṛti)、天眼（通）(divyacakṣus)、漏尽（通）(āsravakṣaya) を名づけて三明としている。問うていう。「神通 (abhijñā) と明 (vidyā) とはいかなる相違があるのか。」と。答えていう。「直ちに過去 (atītapūrvajanma) における宿命の事を知るのを、通と名づける。過去における因縁 (nidāna) と行業 (karman) を知るを、明と名づける。直ちにこゝに死に、かしこに生ずるを知ることを、これを通と名づける。行 (carita) と因縁 (hetupratyaya) の際会（相応）して失わないことを知るを、これを明と名づける。直ちに結使 (saṁyojana) を尽くし、さらに生と不生とを知らないことを、これを通と名づける。もし、有漏 (āsrava) が尽きてさらにもはや生じないことを知ったならば、これを明と名づける。この、三明は大阿羅漢 (Arhat) と大辟支仏 (Pratyekabuddha) が得るところのものである。」と。

問うていう。「若しそうであれば、仏とどのようなところに相違があるのか。」と。答えて言う。「彼は三明を得たといつも、その明（慧）に満足していないが、仏は悉く満足している。ここに相違がある。」と。問うていう。「どうして不満であり、どうして満足なのか。」と。答えていう。

亦如是。是故名佛明行具足。行名身口業。唯佛身口業具足。餘皆有失。是名明行具足。

〔修伽陀〕

復名修伽陀。修秦言好。伽陀或言去。或言說。

「諸々の阿羅漢と辟支仏の宿命智（pūrvanivāsānusmṛti-vidyā）は、自分自身と他人のを知っているけれども、また能く遍満して（paripūrṇa）いない。阿羅漢は一世、或いは二世、三世、十百千万劫ないし八万劫まで

72 a

を知っていることがあっても、これを以上はもう知ることができない。この理由で天眼明（divyacakṣur-divyā）に満足しない。未来世も同様である。仏は一念（ekakṣaṇa）中に、生（utpāda）住（sthiti）滅（bhaṅga）の時、諸の結使（煩悩）の分が生ずる時、このように住する時、このように滅する時、このように苦法忍[28]（duḥkha-dharmakṣānti）・苦法智[28]（duḥkha-dharmajñāna）の中に断ぜられる結使は、悉く知覚される。このような結使の解脱、そくばくの有為法（saṁskṛtadharma）の解脱をえ、そくばくの無為法（asaṁskṛta-dh°）の解脱を得ることを知り、ないし道比忍[29]（mārgopamakṣānti）〔道類智忍〕を知っている。見諦道（satyadarśanamārga）の十五心の中、諸々の声聞と辟支仏は、覚知しないところのものである。時に少しはやいからである。このように過去（atita）における衆生の因縁（nidāna）と漏尽（āśravakṣaya）を知る。未来（anāgata）、現在（pratyutpanna）もまた同様である。行（carana）は身口業（kāyavākkarman）と名づける。唯だ仏のみは身口業を具足（saṁpanna）している。他は皆な失っている。このようなわけで明行具足と名づける。

また修伽陀[30]（Sugata）と名づける。修（su）は、秦で好といい、伽陀

是名好去好説。好去者。於種種諸深三摩提無量諸大智慧中去。如偈説。

佛一切智爲大車　　八正道行入涅槃

是名好去。好説者。如諸法實相説。不著法愛説。觀弟子智慧力。是人正使一切方便神通智力化之。亦無如之何。是人可度是疾是遲。是人應是處度。是人應説布施。或説戒或説涅槃。是人應説五衆十二因縁四諦等諸法能入道。如是等種種。知弟子智力。而爲説法。是名好説。

〔路迦憊〕

復名路迦憊。路迦秦言世。憊名知。是名知世間。問曰。云何知世間。答曰。知二種世間。一衆生二非衆生。及如實相。知世間世間因。知世間滅出世間道。復次知世間。非如世俗知。亦非

---

(gata) は或いは去と言い或いは説いとう。こゝでは、好去好説と名づける。好去とは種々の諸の深い三摩提 (samādhi) や無量の諸の大智慧 (mahāprajñā) の中に去るのである。（次の）偈に説いているとおりである。

仏、一切智を大車となし、
八正道を行きて涅槃に入りたもう。

これを、好去と名づける。好説とは、諸法実相と説き法愛に執著しないと説くことである。弟子の智慧力を観て、この人には正しく一切の方便 (upāya)・神通 (abhijñā)・智力 (jñānabala) をもってこれを教化するけれども、またこれをどうともすることも出来ない。この人は、済度するに疾(はや)いこともあるし遅いこともある。この人は、ここで済度すべきである。この人には、布施 (dāna) を説いたがよく、或いは戒 (śīla) を説き、或いは涅槃 (nirvāṇa) を説くべきである。この人は、五衆 (pañcaskandha)・十二因縁 (dvādaśahetupratyaya)・四諦 (caturāryasatya) 等の諸法を説いたならば、能く道に入ることで出来るであろう。このように種々に弟子の智力を知って説法をする。これを好説と名づける。

また路迦憊[31] (Lokavit) と名づける。路迦 (loka) とは、秦では世といい、憊 (vit) は知と名づけ、これを（合わせて）知世間と名づける。問うていう。「どうして世間を知るのか。」と。答えていう。「二種の世間を知るのである。一に衆生）（世間 (sattvaloka)、二に非衆生 (asattvaloka) で

外道知。知世間無常故苦。苦故無我。復次知世間相非有常非無常。非有邊非無邊。非去非不去。如是相亦不著。清淨常不壞相如虚空。是名知世間。

〔阿耨多羅〕

復名阿耨多羅。秦言無上。云何無上。涅槃法無上。佛自知是涅槃不從他聞。亦將導衆生令至涅槃。如諸法中涅槃無上。衆生中佛亦無上。復次持戒禪定智慧。教化衆生。一切無有與等者。何況能過。故言無上。復次阿名無。耨多羅名答。一切外道法可答可破。非實非清淨故。佛法不可答不可破。出一切語言道。亦實淨淨故。以是故名無答。

ある。および実相（satyalakṣaṇa）の如に世間と世間の因（hetu）を知り、世間の滅（nirodha）と出世間の道（lokottaramārga）を知ることである。また次に、世間を知るとは、世俗の知（saṁvṛitijñāna）のようなものではなく、また外道の知（tīrthika-j°）でもない。世間は無常（anitya）なので苦であり、苦であるので無我（anātmaka）であると知る。また次に、世間の相は、有常（śāsvata）でもなく無常（aśāsvata）でもなく、有辺（antavat）でもなく無辺（ananta）でもなく、去（cyuta）でもなく不去（acyuta）でもない、このような相にもまた執着せず、清浄にして常に不壊の相（avipraṇāśa）なること虚空のようで（ākāśasama）あることを知るのである。これを知世間と名づける。

72 b

また阿耨多羅[32]（Anuttara）と名づける。秦では無上という。どうして無上（なの）か。涅槃の法は無上であり、仏は自らこの涅槃を知って他から聞かず、また衆生を将導して涅槃に至らせようとする。諸法中の涅槃が無上であるように、衆生中の仏もまた無上である。また次に持戒（śīla）・禅定（dhyāna）・智慧（prajñā）によって衆生を教化するが一切の与い等し い者はあることがない。まして能くこえるものがあろうか。そこで無上と言う。また次に阿（a）を無と名づけ、耨多羅（uttara）を答と名づける。一切の外道の法は答えることができ破ることができ、実ではなく（asatya）清浄ではない（aviśuddha）からである。（ところが）仏法は答えることが

〔富樓沙曇藐婆羅提〕

復名富樓沙曇藐婆羅提。富樓沙。秦言丈夫。曇藐言可化。婆羅提言調御師。是名可化丈夫調御師。佛以大慈大悲大智故。有時軟美語。有時苦切語。有時雜語。以此調御令不失道。如偈說

佛法爲車弟子馬　實法寶主佛調御
若馬出道失正轍　如是當治令調伏
若小不調輕法治　好善成立爲上道
若不可治便棄捨　以是調御爲無上

復次調御師有五種。初父母兄弟親里中官法下師法。今世三種法治。後世閻羅王治。佛以今世樂後世樂及涅槃樂利益故。名師上。四種法治人不久畢壞。不能常實成就。佛成人以三種道。常隨道不失。如火自相不捨乃至滅。佛令人得善法亦如是。至死不捨。以是故。佛名可化丈夫調御師。問曰。女人佛亦化令得道。何以獨言丈夫。答曰。男尊女卑故。女從男故。男爲事業主故。復次女人有五礙。不得作轉輪王釋天王魔天王梵

---

できず破ることができず、一切の語言の道をこえており、また実であり清浄であるからである。この理由で無答と名づける。

また富楼沙曇藐婆羅提[33] (Puruṣadamyasārathi) と名づける。富楼沙 (puruṣa) は、秦では丈夫といい、曇藐 (damya) は、化すことができることをいい、波羅提 (sārathi) は、調御師といい、（これを合わせて）可化丈夫調御師と名づける。仏は、大慈 (mahāmaitrī)・大悲 (mahākaruṇā)・大智 (mahājñāna) によって、ある時は軟美の語[34] (ślakṣṇa)、ある時は苦切の語[34] (paurṣya)、ある時は雑語[34] (ślakṣṇapaurṣya)、これで調御し、道を失わせないようにする。偈に説くごとくである。

仏法を車となせば弟子は馬、
実に法宝主たる仏は調御す。
若し馬が道を出でて正轍を失わば
是の如きは当に治して調伏せしむべし。
若し小しく調せざれば軽法もて治し、
善を好んで成立せば、上道と為す。
若し治すべからざれば便ち棄捨し、
是を以て調御を最高と為す。

また次に調御師 (sārathi) に五種がある。初めは父母・兄姉・親里、中には官法、下に師法がある。今世には（この）三種法の治があり、後世に

天王。仏以是故不説。復次若言佛爲女人調御師。爲不尊重。若説丈夫一切都攝。譬如王來不應獨來。必有侍從。如是説丈夫。二根無根及女盡攝。以是故説丈夫。用是因緣故。佛名可化丈夫調御師。

---

は閻羅王（yama）の治がある。仏は今世の楽（ihatrasukha）、後世の楽（paratrasukha）、および涅槃の楽（nirvāṇasukha）をもって利益するから師上と名づける。四種の法で人を治めるのは間もなく畢に壊れ常に実に成就することはありえない。仏は人を成就させるのに三種の道でもって常に道に随って（道）を失わせない。（それは）火が自らの相を捨てず、（そのまゝ）滅（nirodha）に至るようなものである。仏が人に善法（kuśaladharma）を得させるのもまた同様である。死に至っても捨てない。この理由で仏は、可化丈夫調御師と名づけるのである。問うていう。「女人をも仏はまた化道して得道させる。どうして独り丈夫と言うのか」と。答えて言う。「男は尊く女は卑しいとの立場からである。女は男に従うからであり、男が事業の主であるからである。」と。また次に、女人には五つの障りがある。転輪王（Cakravartin）と（帝）釈天王（Śakradevarāja）と魔天王（Mārādevarāja）と梵天王（Brahmādevarāja）となることはできない。仏は（以上の）理由から説かないのである。また次に、若し仏が女人調御師（strisārathi）になると言ったならば、尊重されないからである。若し丈夫と説くならば、一切は都べて摂せられる。譬えば、王の来（参）するのは単独では来参せず、必ず侍従がいるようなものである。このように丈夫と説くけば二根[36]（ubhayavyañjanaka）・無根（avyañjanaka）および女（stri）を尽く摂するのである。このような理由で丈夫と説くのである。この因緣をもちいるから仏は可化丈夫調御師と名づけたので

72 c

〔舍多提婆魔𤙖舍喃〕

復名舍多提婆魔𤙖舍喃。舍多秦言教師。提婆言天。魔𤙖舍喃言人。是名天人教師。云何名天人教師。佛示導是應作是不應作。是善是不善。是人隨教行不捨道法。得煩惱解脱報。是名天人師。問曰。佛能度龍鬼神等墮餘道中生者。何以獨言天人師。答曰。度餘道中生者少。度天人中生者多。如白色人雖有黑黶子不名黑人。黑少故。復次人中結使薄厭心易得。天中智慧利。以是故。二處易得道。餘道中不爾。復次言天則攝一切天。言人則攝一切地上生者。何以故。天上則天大。地上則人大。是故說天則天上盡攝。說人則地上盡攝。復次人中得受戒律儀見諦道思惟道及諸道果。或有人言。餘道中不得。或有人言。多少得。天人中易得多得。以是故佛爲天人師。復次人中行樂因多。天中樂報多。善法是樂因。樂是善法報。餘道中善因報少。以是故佛爲天人師。

---

ある。

また舍多提婆魔𤙖舍喃[37] (Śāstā-devamanuṣyāṇām) と名づける。舍多 (śāstā) は秦で教師といい、提婆 (deva) は天と言い、魔𤙖舍喃 (manuṣyāṇām) は人という。これを（合わせて）天人教師と名づける。どうして天人教師と名づけるのか。仏は、これは作すべきである、これは作すべからず、これは善 (kuśala) であり、これは不善 (akuśala) であると示導される。この人は（その）教えに随って行い、道法を捨てずに煩悩解脱 (kleśavimokṣa) の報いを得る。それで天人師と名づけるのである。問うて言う。「仏は能く龍 (nāga)・鬼神 (asura) 等が他の道中 (gati) に堕ちて生ずるのを度しているのに、どうして独り天人師と言うのか」と。答えて言う。「他の道中に（堕ちて）生ずる者を度すのは少しであり、天人中に生ずる者を度すのが多いからである。（それは）白色の人にほくろがあっても黒人とは名づけないようなものであり、（その場合）黒は少ないからである。また次に、人の中では結使 (saṁyojana) が薄弱で厭心 (nirvedacitta) を得易く、（そのように）天の中では智慧 (prajñā) は利発 (tīkṣṇā) である。この理由で（この）二処にては得道しやすい。他の道ではそうではない。また次に、天と言えばそのまゝ、あらゆる天を摂し、人と言えばそのまゝあらゆる地上に生ける者を摂している。なぜなれば、天上はそのまま天の広大なること、地上はそのまま人の多大なること（を

〔佛陀〕

復名佛陀。秦言知者。知何等法。知過去未來現在衆生數非衆生數有常無常等一切諸法。菩提樹下了了覺知故。名爲佛陀。問曰。餘人亦知一切諸法。如摩醯首羅天。秦言大自在。八臂三眼騎白牛。如韋紐天秦言遍閲。四臂捉貝持輪騎金翅鳥。如鳩摩羅天。秦言童子。是天擎雞持鈴。捉赤幡騎孔雀。皆是諸天大將。如是等諸天各各言大。皆稱一切智。有人作弟子學其經書。亦受其法。言是一切智。答曰。此不

言い表わす）からである。この理由から天と説けばそのまゝ天上が尽く摂せられ、人と説けばそのまゝ地上が尽く摂せられるのである。また次に、人中に戒律の儀（śīlasaṁvara）を受けて見諦道（satyadarśanamārga）と思惟道（bhāvanāmārga）および諸道の果（mārgaphala）を得る。ある人の言うに、他の道中では得られない、と。（また）ある人のいうに、（他の道中で）多少は得るが、天人の中では得やすく（しかも）多く得る、と。この理由で仏を天人師とするのである。また次に、人中の行には、楽の因が多く、天中では楽の報（sukhaphala）が多い。善法は楽の因（sukhavipāka）であり、楽は善法の報い（sukhadharma）である。他の道中では善（法）の因や報は少ない。この理由から仏を天人師とするのである。

73 a

また仏陀（Buddha）と名づける。秦では、知者と言う。どのような法を知るのか。過去（atīta）・未来（anāgatā）・現在（pratyutpanna）の衆生の数（sattva-saṁkhyātā）や非衆生の数（asattva-s°）、有常（nitya）や無常（anitya）等のあらゆる諸法を知り、菩提樹（bodhivṛkṣa）下にて了（はつきり）と、覚知したので名づけて仏陀とするのである。問うていう。「余の人もまた一切諸法を知っている。摩醯首羅天[38]（Maheśvara）のように、秦では、大自在と言う。八臂（aṣṭa-bhuja）三眼（tryakṣa）で白牛に騎っている〔Nandin〕。韋紐天[39]（Viṣṇu）のように、秦では、遍閲と言う。四臂（caturbhuja）で貝をにぎり輪を持ち、金翅鳥

應一切智。何以故。瞋恚憍慢心著故。如偈說。

若彩畫像及泥像　聞經中天及讚天
如是四種諸天等　各各手執諸兵杖
若力不如畏怖他　若心不善恐怖他
此天定必若怖他　若少力故畏怖他
是天一切常怖畏　不能除却諸衰苦
有人奉事恭敬者　現世不免沒憂海
有人不敬不供養　現世不妨受富樂
當知虛誑無實事　是故智人不屬天
若世間中諸衆生　業因緣故如循環
福德緣故生天上　雜業因緣故人中
世間行業屬因緣　是故智者不依天

---

(Garuḍa) に騎っている。鳩摩羅天[40] (Kumāra) のように、（秦では、童子と言う。）この天は鶏を擎げ鈴を持ち、赤幡 (lohitapatākā) を捉り孔雀に騎っている。みなこれら諸天の大将である。これらのように諸天の各々は、大 (mahat) と言い、みな一切智 (sarvajña) と称する。ある人が弟子となり、その経書を学び、またその法を受けた。これも一切智というのか。」と。答えていう。「これは一切智というべきではない。なぜならば、瞋恚 (dveṣa) と憍慢心 (abhimāna) があり執著心があるからである。」と。偈に説かれているとおりである。

若しくは、彩画像および泥像、
聞経中の天および讃天。
是の如き四種の諸天等は、
各々、手に諸々の兵杖を執る。
若しくは力如かずして他を畏怖せしめ、
若しくは心不善にして他を恐怖せしむ。
この天、定んで必ず若しくは他を怖れ、
若しくは少力の故に他を畏畏せしむ。
この天は一切を常に怖畏せしめ、
諸々の衰苦を除却すること能わず。
人あって奉事し恭敬するもの、
現世にて憂いの海に沒すること免れず。

〔勝一切人（者）〕

〔歸命仏・不應事天〕

復次是三天愛之則欲令得一切願。惡之則欲令七世滅。佛不爾。菩薩時若怨家賊來欲殺。尚自以身肉頭目髓腦而供養之。何況得佛。不惜身時。以是故獨佛應當受佛名號。應當歸命佛。以佛爲師不應事天。

人有って敬せず供養せるも、
現世にて富楽を受くる事を妨げず。
まさに知るべし、虚誑にして実事なきことを、
是の故に智人は天に属せず。
若し世間中の諸々の衆生は、
業因縁の故に循環するが如し。
福徳の縁の故に天上に生じ、
雑業の因縁の故に人中に（生ず）。
世間の行業は因縁に属す、
この故に智者は天に依らず。

73 b

また次にこの三天は、これを愛するならば、則ちあらゆる願を得させようとおもい、これを悪(にく)むならば、則ち七世（にわたって）滅ぼそうとおもう。仏はそうではない。菩薩であった時、怨家(うらみ)をもった賊がやって来て、殺そうとしたときも、なお自からの身(からだ)の肉や頭目や髓脳(のうみそ)をもって、かれに供養した。どうして仏を得ないことがあろうか。（仏は）身を惜しむ時がない。このようなわけで、独り仏のみきっと仏の名号を受くべきである。きっと仏に帰命すべきである。仏をもって師と為して、（諸）天に事(つか)えるべきでない。

復次佛有二事。一者大功德神通力。二者第一淨心諸結使滅。諸天雖有福德神力。諸結使不滅故心不清淨。心不清淨故神力亦少。聲聞辟支佛雖結使滅心清淨。福德薄故力勢少。佛二法滿足故稱勝一切人。餘人不勝一切人。

〔如来の別號〕

婆伽婆名有德。先已說。復名阿婆磨。秦言無等。復名阿婆摩婆摩秦言無等等。復名路迦那他秦言世尊。復名波羅伽秦言度彼岸。復名婆檀陀秦言大德。復名尸梨伽那秦言厚德。如是等無量名號。父母名字悉達陀秦言成利。得道時知一切諸法故。是名爲佛。應受諸天世人供養。如是等得名大德厚德。如是種種隨德立名。

---

また次に仏には二つの事がある。一には大功德（mahāguṇa）・神通力（abhijñā）と、二には第一浄心（paramaśuddhacitta）であって、諸の結使（saṁyojana）を滅しているものである。諸天には福德（puṇyasaṁbhāra）・神力（ṛddhibala）があるけれども、諸の結使を滅していないので、心が清浄でない。心が清浄でないので、神力もまた少ない。声聞（śrāvaka）や辟支仏（pratyekabuddha）は結使を滅していて、心が清浄であるけれども、福德が薄いので力勢が少ない。仏は二法を満足させて（paripūrṇa）いるので、あらゆる人より勝れているもの（sarvanarottama）と称されている。余の人はあらゆる人より勝れているのではない。

婆伽婆(41)（Bhagavad）を有德（guṇavant）と名づけることは、先に已に説いた。また阿婆磨(42)（Asama）とも名づける〈秦では無等という〉。また阿婆摩婆摩(43)（Asamasama）とも名づける〈秦では無等々という〉。また路迦那他(44)（Lokanātha）とも名づける〈秦では世尊という〉。また波羅伽(45)（Pāraga）とも名づける〈秦では度彼岸という〉。また婆檀陀(64)（Bhadanta）とも名づける〈秦では大德という〉。また尸梨伽那(47)（Śrīguṇa）とも名づける〈秦では厚德という〉。これらのような無量の名号がある。父母（から）の名字は悉達陀(48)（Siddhārtha）である〈秦では成利という〉。得道の時、一切の諸法を知ったので、これを名づけて仏とした。当然、諸天・世人の供養（pūjā）を受けるべきである。これらのようにして大德・厚德の

〔一切智人—放牛譬喩〕

問曰。汝愛刹利種。淨飯王子字悉達多。以是故而大稱讚言一切智。一切智人無也。答曰。不爾。汝惡邪故妬瞋佛作妄語。實有一切智人。何以故。佛一切衆生中身色顔貌端正無比。相德明具勝一切人。小人見佛身相。亦知是一切智人。何況大人。如放牛譬喩經中說。摩伽陀國王頻婆娑羅請佛三月。及五百弟子。王須新乳酪酥供養佛及比丘僧。語諸放牛人來近處住。日日送新乳酪酥。竟三月。王憐愍此放牛人語言。汝往見佛還出放牛。諸放牛人往詣佛所。於道中自共論言。我等聞人說。佛是一切智人。我等是下劣小人。何能別知實有一切智人。諸婆羅門喜好酥酪故。常來往諸放牛人所作親厚。放牛人由是聞婆羅門種種經書名字故。言四違陀經中治病法鬪戰法星宿法祠天法歌舞論議難問法。如是等六十四種世間伎藝。淨飯王子廣學多聞。若知此事不足爲難。其從生已來不放牛。我等以放牛秘法問之。若能解者實是一切智人。作是論已前入竹

名を得たのであり、このような種々の徳に随って名を立てたのである。

問うていう。「お前は刹利種（kṣatriya）に愛（著）している。浄飯王（Śuddhodana）の子は悉達多と字ける。こうゆうことから、大いに称讃して一切智（Sarvajña）というが、一切智の人は無いのだ。」と。答えていう。「そうではない。お前は悪邪（の心）であるから、仏を妬み瞋って妄語をなすけれども、実に一切智の人である。どうしてかといえば、仏はあらゆる衆生の中において、身の色や顔貌が端正おり（prasāda-ṛjutva）（他に）比べようがない。相（lakṣaṇa）と徳（guṇa）が明らかに具わっていて、あらゆる人より勝れている。小人も仏の身相（kāyalakṣaṇa）を見るならば、また一切智の人であると知るのである。大人（mahāpuruṣa）においてはなおさらである。」と。『放牛譬喩経』[49]（Gopālakāvadāna-sūtra）の中に説いているように、摩伽陀国（Magadha）の王の頻婆娑羅（Bimbisāra）は、仏を請うこと三ヶ月（に及び）、および五百の弟子（も同様であった）。王は新らしい乳（kṣīra）・酪（navanīta）・酥[50]（sarpis）をもって、仏および比丘僧（bhikṣusaṁgha）に供養しようとして、諸の放牛の人[51]（gopālaka）に語った。「近くの処に来て住しなさい。」と。（放牛の人は）日々新らしい乳・酪・酥を送り、三ヶ月を竟えた。王はこの放牛の人を憐愍で語っていった。「お前達よ、往って仏を見、還って放牛に出なさい。」と。諸の放牛の人は、仏の所に往詣た。（その）道中において

園。見佛光明照於林間。進前覓佛見坐樹下狀似金山。如酥投火其炎大明有似融金。散竹林間上紫金光色。視之無厭。心大歡喜。自相謂言。

今此釋師子　一切智有無
見之無不喜　此事亦已足
光明第一照　顏貌甚貴重
身相威德備　與佛名相稱
相相皆分明　威神亦滿足
福德自纏絡　見者無不愛
圓光身處中　觀者無厭足
若有一切智　必有是功德
一切諸彩畫　寶飾莊嚴像
欲比此妙身　不可以爲喩
能滿諸觀者　令得第一樂
見之發淨信　必是一切智

如是思惟已禮佛而坐。

---

自から共に論じていった。「私達は人の説を聞くところによれば、仏はこれ一切智（sarvajña）の人であるという。私達は下劣の小人である。どうして能く実に一切智の人であることを別ち知ることができようか。諸の婆羅門は、酥や酪を喜び好むので、常に諸の放牛の人の所に来往て、親厚を作んでいる。放牛の人はこれによって、婆羅門の種々の経書や名字を聞い

73 c

ているから、四違〔韋〕陀経[52]（Veda）の中の治病の法（bhaisajya）・闘戦の法（kṣatradharma）・星宿の法（jyotiṣa）・祠天の法（yajñadharma）・歌舞（gītā）・論議（upadeśa）・難問の法（codyadharma）（などの）このような六十四種の世間の伎芸（kalā）を言るのだ。浄飯王の子は、広学で多聞（bahuśruta）である。若しこのことを知っているならば、非難をするに足らない。（しかし仏は）一体、生まれてよりこのかた放牛をしたことがない。私達は放牛の秘法をもって、仏に問おう。若し能く解するならば、実にこれ一切智の人である。」と。この論（議）をなし已って、前んで竹園〔竹林精舎〕（Veṇuvana）に入り、仏の光明が林の間を照しているのを見て、進前んで仏を覓め、樹下に坐しておられる狀を見るに、金山（suvarṇaparvata）に似ていた。酥を火に投げいれて、その炎は大いに明るくなるようであり、融かした金のようであった。竹林の間の上に散らばっている紫金の光色があり、これを視て厭う心がうせて、心は大いに歡喜して、自から相いに謂言った。

「いま、この釈師子（Śākya）は、一切智がないはずはない。これを

〔一切智人—放牛譬喩十一法〕

問佛言。放牛人有幾法成就。能令牛群番息。有幾法不成就。令牛群不增不得安隱。佛答言。有十一法。放牛人能令牛群番息。何等十一。知色知相知刮刷知覆瘡知作煙知好道知牛所宜處知好度濟知安隱處知留乳知養牛主。若放牛人知此十一法。能令牛群番息。比丘亦如是。知十一法能増長善法。云何知色。知黑白雜色。比丘亦如

74 a

見て喜ばないものは無い。この事もまた已に（具）足しておられる。光明第一の照にして、顔貌は甚だ貴重にして、身相と威徳を備えられ、仏の名と相い称っている。

相相が皆な分明であって、威神もまた満ち足り、福徳も自から纒絡っていて、見る者（すべて）愛さないものはなく、円光の身処の中に観る者（すべて）厭足ことはない。[53]

若し一切智が有るならば、必らずこの功徳があろう。あらゆる諸の彩畫・宝飾・荘厳の像も、この妙なる（仏の）身と比べても、もって喩えともなしえない。能く諸の観るものを満（足）させて、第一の楽を得させるのである。これを見るならば、浄心を発して、必らず一切智となるであろう。」と。

このように思惟し已って、仏を礼（拝）して坐した。

仏に問うていった。「放牛の人（gopālaka）は幾の法をなしとおすと、よく牛の群れを番息して、幾の法がなしとげられないと牛の群れを増やすこともできず安隠（yogakṣema）を得ないのか。」と。仏は答えていわれた。「十一（種）の方法があって、放牛の人は能く牛の群を番息している。何が十一なのか。色を知り・相を知り・刮刷ことを知り・瘡を覆ことを知り・煙を作ることを知り・好い道を知り・牛の所宜処を知り・好く度済ことを知り・安隠の処を知り・乳を留めることを知り・養牛の主を知ること

是。知一切色皆是四大四大造。云何知相。知牛吉不吉相。與他群合因相則識。比丘亦如是。見善業相知是智人。見惡業相知是愚人。云何刮刷。爲諸蟲飲血則增長諸瘡。刮刷則除害。比丘亦如是。惡邪覺觀蟲飲善根血增長心瘡。除則安隱。云何覆瘡。若衣若草葉以防蚊虻惡刺。比丘亦如是。念正觀法覆六情瘡。不令煩惱貪欲瞋恚惡蟲刺棘所傷。云何知作煙除諸蚊虻。牛遙見煙則來趣向屋舍。比丘亦如是。如所聞而說除諸結使蚊虻。以說法煙引衆生。入於無我實相空舍中。云何知道。知牛所行來去好惡道。比丘亦如是。知八聖道能至涅槃離斷常惡道。云何知牛所宜處。能令牛番息少病。比丘亦如是。說佛法時得清淨法喜。諸善根增盛。云何知濟。知易入易度無波浪惡蟲處。比丘亦如是。能至多聞比丘所問法。說法者知前人心利鈍煩惱輕重。令人好濟安隱得度。云何知安隱處。知所住處無虎狼師子惡蟲毒獸。比丘亦如是。知四念處安隱無煩惱惡魔毒獸。比丘入此則安隱無患。云何留乳。犢母愛念犢子故與乳。以留殘乳故。犢母歡喜則犢子

---

である。若し放牛の人が、この十一の法を知るならば、能く牛の群を番息すことができる。比丘（bhikṣu）もまた同様に、十一の法を知るならば、能く善法（kuṣaladharma）を増長させることができる。どのようにして色を知るか。黒と白と雑色と（の別）を知るのである。比丘もまた同様である。すべての色はみなこれ四大（mahābhūta）であって、四大の造ったものであると知る。どのようにして相（lakṣaṇa）を知るのか。牛の吉と不吉の相を知って、他の群と合しても相によって則ち識るのである。比丘もまた同様である。善業の相を見て、これ智人（paṇḍita）であると知り、悪業の相を見て、これ愚人（bāla）であると知るのである。どのようにして刮刷のか。諸の虫に血を飲れれば、則ち諸の瘡が増長する。刮刷れば、則ち害を除くことができる。比丘もまた同様である。悪邪覚観の虫が、善根（kuśalamūla）の血を飲めば心の瘡（cittavraṇa）が増長し、除けば則ち安隱となる。どのようにして瘡を覆のか。若くは衣、若くは草の葉をもって、蚊と虻の悪刺を防ぐのである。比丘もまた同様である。正観の法を念じたならば、六情の瘡を覆って、煩悩（rāga）・貪欲（dveṣa）・瞋恚（moha）の悪虫の刺棘で傷つけられることがない。どのようにして煙を作り諸の蚊と虻を除くことを知るのか。牛は遙かから煙を見て、則ち来って屋舍に趣向う。比丘もまた同様である。聞いたそのままを説いて（yathābruta）、諸の結使（saṁyojana）の蚊と虻を除き、説法（dharmadeśanā）の煙をもって衆生を引き、無我（anātman）・実相（satyalakṣaṇa）・空

不竭。牛主及放牛人。日日有益。比丘亦如是。居士白衣給施衣食。當知節量不令罄竭。則檀越歡喜信心不絶。受者無乏。云何知養牛主。諸大特牛能守牛群。故應養護不令羸瘦。飲以麻油。飾以瓔珞。標以鐵角。摩刷讚譽稱等。比丘亦如是。衆僧中有威德大人。護益佛法摧伏外道。能令八衆得種諸善根。隨其所宜恭敬供養等。放牛人聞此語已如是思惟。我等所知不過三四事。放牛師輩遠不過五六事。今聞此說歎未曾有。若知此事餘亦皆爾。實是一切智人。無復疑也。是經此中應廣說。以是故知有一切智人。

---

(śūnya)の舎の中に入れる。どのようにして道を知るのか。牛は行き来たり去るところの好し悪しの道を知っている。比丘もまた同様である。八聖道(āryāṣṭāṅgika-mārga)を知り、能く涅槃(nirvāṇa)に至り、断(見)(uccheda)と常(見)(śāśvata)の悪道[54]を離れる。どのようにして牛の所宜処を知るのか。能く牛をして番息し、病を少なくさせる。比丘もまた同様である。仏法を説く時に、清浄の法喜(viśuddhadharma)を得るならば、諸の善根(kuśalamūla)が増ます盛んになる。どのようにして済(度)を知るのか。た易く入りた易く度るのに、波浪・悪虫のない処を知る。比丘もまた同様である。能く多聞(bahuśruta)の(tīkṣṇa)と鈍比丘の所に至って法を問うのである。説法する者は、前の人の心の利(根)(mṛdu)、-煩悩の軽重を知って、人を好く済い安隠に度ることを得させる。どのようにして安隠の処を知るのか。所住いる処に虎・狼・師子・悪虫・毒獣がいないことを知る。比丘もまた同様である。四念処[55](smṛtyupasthāna)は安隠であって、煩悩(kleṣa)の悪魔・毒獣のいないことを知る。比丘はここ〔四念処〕に入れば、則ち安隠であって患がない。どのようにして乳を留めるのか。犢(子の)母(vatsā)は犢子(vatsa)を愛し念っているので乳を与え、残った乳を留めている。犢(子の)母が歓喜すれば、則ち犢子(の飲む乳も)竭きることがない。牛主および放牛の人は、日々に利益がある。比丘もまた同様である。居士(gṛhapati)・白衣(avadātavasana)が衣食を給施するに、きっと節量を知り、罄竭さ

74 b

〔一切智人―不説〕

問曰。世間不應有一切智人。何以故。無見一切智人者。答曰。不爾。不見有二種。不可以不見故便言無。一者事實有。以因緣覆故不見。譬如

せることがないならば、則ち檀越（dānapati）は歓喜して、信心（śraddhācitta）を絶やすことがなく、受ける者（pratigrāhaka）も乏しいことはない。どのようにして養牛の主を知るのか。養牛の主は大特牛を護り[56]、能く牛の群を守る。だからきっと養護って羸瘦させない。飲ませるのには麻油をもってし、飾るのには瓔珞をもってし、標とするには鉄の角をもってし、摩刷たり讃誉称たりする。比丘もまた同様である。衆の僧の中には、威徳ある大人がいて、仏法を（守）護（利）益し、外道（tīrthika）を摧伏き、能く八衆をして諸の善根を種えさせ、その宜しき所に随って恭敬・供養などを得させるのである。」と。

放牛の人はこの語を聞き已って、このように思惟した。「私達の知るところは三、四の事にしか過ぎない。放牛の師の輩も、遠くも五、六の事にしか過ぎない。いまこの説を聞いて、未曽有で（adbhuta）あると歎じた。若しこの事を知っておられるのであれば、余（の事）もまたみなそのようであろう。実にこれ一切智の人である。もはや疑うことはない。」と。

この（般若）経は、この中に、広く説かれているにちがいない。このようなわけで、一切智の人のあることを知るのである。

問うていう。「世間には一切智の人が有ることはない。なぜならば、一切智の人を見るものがいないからである。」と。答えていう。「そうではない。見ないということに二種があり、見ないということから、便ち無いと

人姓族初及雪山斤兩恒河邊沙數。有而不可知。二者實無無故不見。譬如第二頭第三手。無因緣覆而不見。如是一切智人因緣覆故汝不見。非無一切智人。何等是覆因緣。未得四信心著惡邪。汝以是因緣覆故。不見一切智人。問曰。所知處無量故。無一切智人。諸法無量無邊。多人和合尚不能知。何況一人。以是故無一切智人。答曰。如諸法無量。智慧亦無量無數無邊。如函大蓋亦大。函小蓋亦小。問曰。佛自說佛法不說餘經若藥方星宿算經世典。如是等法。若是一切智人。何以不說。以是故知非一切智人。答曰。雖知一切法。用故說。不用故不說。有人問故說。不問故不說。

いうわけにはいかない。一には事実（際）には有るけれども、（悪）因縁が覆っているから見ない。譬えば人の姓族（gotra）の初め、および雪山（Himālaya）の斤両（gurutva）、恒河の辺りの沙の数（gaṅgānadīvālukāsaṁkhyā）は、有るけれども知ることができないようなものである。二には実（際）に無いから見ない。譬えば第二の頭や第三の手で、（悪）因縁が覆うことがなくしても見えないようなものである。このように一切智の人が（悪）因縁に覆われているので、あなた達が見ないのである。一切智の人が無いというわけではない。何が因縁を覆っているのか。未だ四信(57)(prasāda)を得ないで、心は悪邪に（執）著しているからである。あなた達はこの（悪）因縁が覆っているので、一切智の人を見ないのである。」と。

問うていう。「所知処（jñeya）は無量（apramāṇa）であるので、一切智の人はいない。諸法は無量（apramāṇam）であり無辺（ananta）である。多くの人が和合して（推し量っ）ても、なお知ることはできない。まして一人では知るよしもない。これをもってして一切智の人は無い。」と。

74 c

答えていう。「諸法が無量であるように、智慧（prajñā）もまた無量であり無数であり無辺である。函が大きければ蓋もまた大きく、函が小さければ蓋もまた小さいようなものである。」と。

問うていう。「仏は自から仏法を説かれているが、余経の若きは薬方（bhaiṣajya）・星宿（jyotiṣa）・算経（gaṇanā）・世典（nīti）の、このような法を説かれていない。若し（仏が）一切智の人であるならば、なんで説

〔一切智人—十四難〕

復次一切法略説有三種。一者有爲法。二者無爲法。三者不可説法。此已攝一切法。問曰。十四難不答。故知非一切智人。何等十四難。世界及我常世界及我無常。世界及我亦有常亦無常。世界及我亦非有常亦非無常。世界及我有邊。無邊。亦有邊亦無邊。亦非有邊亦非無邊。死後有神去後世。無神去後世。亦有神去亦無神去。死後亦非有神去亦非無神去後世。是身是神。身異神異。若佛一切智人。此十四難何以不答。答曰。此事無實故不答。諸法有常無此理。諸法斷亦無此理。以是故佛不答。譬如人問搆牛角得幾升乳。是爲非問。不應答。復次世界無窮如車輪。無初無後。復次答此。無利有失墮惡邪中。佛知十四難常覆四諦諸法實相。如渡處有惡虫水不應將人渡。安隱無患處。可示人令渡。復次有

かれないのか。このことをもってして一切智の人でないことを知るのである。」と。答えていう。「一切法を知るといっても、用であるので説き、不用ので説かない。人があって問うから説き、問わないから説かないのである。」と。

また次に一切法を略説するに三種ある。一には有為法(saṁskṛtadharma)、二には無為法(asaṁskṛta-dh°)、三には不可説法[58](anabhilāpya-dh°)である。これらは已に一切法を摂している。

問うていう、「十四の難[59](upārambha)に答えられないので一切智の人でないことを知っているはずである。何らが十四の難であるか。世界(loka)及び我(ātman)は常(śāṣvata)であるか、世界及び我は無常(aśāṣvata)であるか、世界及び我はまた有常であってまた無常であるか世界及び我はまた有常でなくまた無常でなのか、世界及び我は有辺(antavat)であるか、無辺(anantavat)であるか、また有辺であってまた無辺であるか、また有辺でなくまた無辺でないのか。死後に神[60](tathāgata)は後世に去ることがあるか、神は後世に去ること無いのか、また神は去ることも有りまた神は去ることも無いのか、死後にまた神は去ることもあること無くまた神は後世に去ることもないのでもないのか。この身(śarīra)はこれ神であるのか。身は神と異(anya)であるのか、神は身と異であるのか。若し仏が一切智の人であるならば、この十四の難（に対して）いか

人言。是事非一切智人不能解。以人不能知故佛不答。

復次若人無言有。有言無。是名非一切智人。一切智人。有言有。無言無。佛有不言無。無不言有。但說諸法實相。云何不名一切智人。譬如日不作高下亦不作平地等一而照。佛亦如是。非令有作無。非令無作有。常說實智慧光照諸法如一道。人問佛言。大德十二因緣佛作耶。他作耶。佛言。我不作十二因緣。餘人亦不作。有佛無佛生因緣老死。是法常定住。佛能說是生因緣老死乃至無明因緣諸行。復次十四難中若答有過罪。若人問。石女黃門兒長短好醜何類。此不應答。以無兒故。復次此十四難是邪見非眞實。佛常以眞實。以是故置不答。

復次置不答。是爲答。有四種答。一決了答。如佛第一涅槃安隱。二解義答。三反問答。四置答。此中佛以置答。汝言無一切智人。有是言而無義。是大妄語。實有一切智人。何以故。得十力故。知處非處故。知因緣業報故。知諸禪定解脫故。知衆生根善惡故。知種種欲解故。知種種

大智度論和訳（中祖・諏訪・大野・吉田）

なる理由があって答えないのか。」と。答えていう。「此の事は実がない(ayukta)ので答えないのである。諸法は常である（という）この理は無い。諸法は断(uccheda)である（という）のもまたこの理は無い。このようなわけで、仏は答えられないのである。譬えば人が牛の角を搆って、幾升の乳を得るのかと問うようなものである。これは問になっていないので、答える必要もない。」と。

また次に世界は無窮もの(anavastha)であり、車輪のように、初めもなく、後りもない。また次にこれに答えても、（何らの）利もなく、失（のみ）あって、悪邪の中に堕ちる。仏は十四の難が、常に四諦(caturāryasatya)・諸法実相(satyalakṣaṇa)を覆うことを知っておられる。渡る処に悪虫の水があれば、決して人を将つれて渡らせず、安隱であって患な処が無ければ、人に示して渡らせるようなものである。

75 a

また次に人がいていう。「この事は一切智の人でないならば、解すことができない。人が知ることができないので、仏は答えられないのである。」と。また次に若し人が、無(asat)を有(sat)と言い、有を無と言うならば、これは一切智の人ではないという。一切智の人は、有を有と言い、無を無という。仏は有を無ともいわないし、無を有ともいわない。ただ諸法実相のみを説かれている。どうして一切智の人といえようか。譬えば日は高下を作らないし、また平地を作ることもなく、等一に照すようなものである。仏もまた同様である。有を無とするのでもなく、無を有とするので

世間無量性故。知一切至處道故。先世行處憶念知故。天眼分明得故。知一切漏盡故。淨不淨分明知故。說一切世界中上法故。得甘露味故。得中道故。知一切法若有爲若無爲實相故。永離三界欲故。如是種種因緣故。佛爲一切智人。

もない。常に（真）実の智慧の光（によって）諸法を照すことは、一道(ekamārga)のように説かれるのである。

或る人が仏に問うていった。「大徳よ、十二因縁(dvādaśapratityasamutpāda)は仏の作られたものか。他の人が作ったのか。」と。仏がいわれた。「我は十二因縁を作っていない。余の人もまた作っていない。仏あるも仏なきも、生の因縁、老死の因縁があるのだ。この法は常に定まっていて、（もともと）住った。仏は能くこの生の因縁、老死ないし無明(avidya)の因縁の諸行(saṁskāra)を説いたのである。」と。

復た次に十四の難の中に、若し答えれば過罪(doṣa)となる。若し人が、「石女(vandhyā)と黄門[61](paṇḍaka)の児の長短・好醜とは何の類か。」と問へば、これに答えるべきでない。（なぜならば）児がいないからである。

また次にこの十四の難は、これ邪見(mithyādṛṣṭi)であって、真実(satya)ではない。仏は常に真実をもってされる。このようなわけで置て答えられないのである。

また次に置て答えず、これが答えである。（そもそも）四種の答え[62](vyākaraṇa)がある。一には決了答(ekaṁśena vyākarama)で、仏は第一涅槃安隠であるというようなものである。二には解義答(vibhajya-v°)で、三には反問答(paripṛcchā-v°)で、四には置答(sthāpanīya-v°)である。この中で、仏は置答をもってされる。お前達は、一切智の人が無い

〔讃佛偈〕

問曰。有一切智人。何等人是。答曰。是第一大

というが、この言が有っても義がない、これは大妄語（mṛṣnāvāda）である。実には一切智の人がある。なぜかといえば、十力（daśabala）を得ているからであり、処（sthāna）・非処（asthāna）を知っているからであり、因縁（hetupratyaya）・業報（karmavipāka）を知っているからであり、諸の禅定（samādhi）・解脱（vimokṣa）を知っているからであり、衆生の根（sattvendriya）の善悪（varāvara）を知っているからであり、種々の欲解（rāganirmokṣa）を知っているからであり、種々の世間の無量の性（gotra）を知っているからであり、一切の至る処の道を知っているからであり、先の世の行処（caryā）を憶念（manasikāra）して知っているからであり、天眼（divyacakṣus）を分明に得ているからであり、あらゆる漏（āsrava）が尽きることを知っているからであり、浄（śubha）と不浄（aśubha）を分明に知っているからであり、あらゆる世界の中の上れた法を説くからであり、甘露味（amṛtarasa）を得るからであり、中道（madhyama-pratipad）を得るからであり、一切法の若しくは有為、若しくは無為の実相を知っているからであり、永く三界の欲（trailokyarāga）を離れているからである。このような種々の因縁によって、仏を一切智の人となすのである。

75 b 問うていう。「一切智の人があるならば、どのような人がこれに（当る）のか。」と。答えていう。「これ第一の大人（parama-mahāpuruṣa）であ

人三界尊名曰佛。如讃佛偈說。

頂生轉輪王　如日月燈明
釋迦貴種族　淨飯王太子
生時動三千　須彌山海水
爲破老病死　哀愍故生世
生時行七歩　光明滿十方
四觀發大音　我生胎分盡
成佛說妙法　大音振法鼓
以此覺衆生　世間無明睡
如是等種種　希有事已現
諸天及世人　見之皆歡喜
佛相莊嚴身　大光滿月面
一切諸男女　視之無厭足
生身乳餔力　勝萬億香象
神足力無上　智慧力無量
佛身大光明　照曜佛身表
佛在光明中　如月在光裏
種種惡毀佛　佛亦無惡想
種種稱譽佛　佛亦無憙想
大慈視一切　怨親等無異

って三界の尊（trailokyajyeṣṭha）であり、名づけて仏という。讃仏の偈（Buddhastotragāthā）に説いているようである。

「頂生転輪王[64]（mūrdhaja Cakravartin）は、日月の燈明のようであり、釈迦貴種族（śākya）の浄飯王の太子は、生まれた時、三千の須弥山の海水を動かした。老病死を破って、（衆生を）哀愍んで世（間）に生まれた。生まれる時、行くこと七歩にして、光明は十方に満ち、四（方）を観て大音（声）を発して、「我は生胎の分が尽きた」と。成仏して妙法を説き、大音（声）は法鼓を振わせ、これをもって衆生・世間の無明を覚された。これらの種々の希有の事は已に現われ、諸天及び世人は、これを見て皆な歓喜している。

仏の相は荘厳身であって、大光満月の面（のようで）ある。あらゆる諸の男女は、これを視て厭足ことがない。生身の乳を餔なう力は、一萬億の香象より勝れ、神足の力は無上であって、智慧の力は無量である。仏身の大光明は、仏身の表を照曜かし、仏が光明の中に在すことは、月の光の裏に在すようである。

種々の悪をもって仏を毀っても、仏にはまた悪の想はない。種々に仏を称誉ても、仏にはまた喜びの想はない。

大慈（mahāmaitrī）（をもって）一切を視ることは、怨の親と等しくして異なることがない。あらゆる識ある（ものの）類は、咸く皆なこの事を知っている。

一切有識類　咸皆知此事
忍辱慈悲力　故能勝一切
爲度衆生故　世世受勤苦
其心常一定　爲衆作利益
智慈力有十　無畏力有四
不共有十八　無量功德藏
如是等無數　希有功德力
如師子無畏　破諸外道法
轉無上梵輪　度脫諸三界
是名爲婆伽婆。婆伽婆義無量。若廣說則廢餘事。以是故略說。
大智度論卷第二

75 c

忍辱・慈悲の力のゆえに、よく一切のものより勝れている。衆生を（済）度するためのゆえに、世々に勤苦を受けても、この心は常に一定であって、衆（生）のために利益をなしている。智慧の力に十あり、無畏の力に四あり、不共に十八あり、無量の功徳蔵である。これらのような無数の希有（まれ）の功徳力がある。
師子の畏れるものの無いようなものであり、諸の外道の法を破り、無上の梵輪を転じて、諸の三界を度脫されるのである」と。
これを名づけて婆伽婆となす。婆伽婆の義は無量である。若し広説するならば、則ち余の事を廃さなければならないので、略説したのである。

〔註〕

(1) 婆伽婆　婆（薄）伽梵・婆誐鑊。有徳・巧分別・有名声・能破の四義を『智度論』では出している。仏十号の一で一般に世尊と訳される。『仏地経論』では、自在・熾盛・端厳・名称・吉祥・尊貴の六義を挙げている。（T二六、二九二a～b）

(2) 転輪聖王　転輪王・輪王。三十二相を具す世俗界の第一人者。

(4) 結　衆生を迷いの境界に結びつけるもの。束縛の意。煩悩の別名。結使ともいう。九結（愛・恚・慢・無明・見・取・疑・嫉・慳）や十結（貪欲・瞋恚・慢・見・疑・戒禁取・有貪・嫉・慳・無明）などが説かれる。

(5) 無明闇　心の無明な状態を暗黒に譬えたもの。

(6) 第一明　第一の明慧という。『中阿含経』巻四十に「是謂我爾時初夜得此第一明達、以本無放逸、楽住遠離、修行精懃、謂無智滅而智生、闇壊而明成、無明滅而明生、謂憶宿命智作証明達」（T一、六八〇a）とある。

(7) 気分　習慣の気分、すなわち習気。煩悩の余力・余薫の意。

(8) 却尽の火　劫火・劫焔・劫災・劫焼ともいう。世界の住劫の尽きる時にすべてを焼き尽くす火のこと。

(9) 舎利弗　仏十大弟子の第一。

(10) 難陀　釈尊の異母弟、後に出家。

(11) 必（畢）陵伽婆磋　舎衛城の婆羅門出身、憍慢で他人を軽賤する性向であったが、後に出家し仏弟子となる。

(12) 羅睺羅　釈尊の実子、沙弥の第一号、密行第一で知られる。

(13) 不浄食　不浄な食物の得るしかた。これに四種を説く。㈠下口食、㈡仰口食、㈢方口食、㈣四維口食。↓七九c。不正な食物のえかたを不浄活命者という。また正式の法食を正食という。

(14) 波斯匿王　憍薩羅国の舎衛城主。釈尊の外護者の一人。

(15) 須達多　舎衛城の長者。給孤独の別称あり。

(16) 白衣　世俗（在家）の人が着ていた白い衣服から、その在俗者を指す。

(17) 本生　本生譚のこと。仏陀の過去世における菩薩行を語る説話。九分教・十二部経の一つ。

(18) 弾指　指をはじくこと。これに㈠少時・瞬間、㈡一種の合図・許諾・歓喜の意、㈢不浄を払い除いたりするまじない等の義がある。ここでは㈢に近いであろう。

(19) 憍貴　憍慢の意。おごりたかぶり。

(20) 結使　煩悩の異名。結は（3）を参照のこと。使は駈役の意。煩悩は衆生を駈役することからいう。

(21) 栴檀香で一臂を泥ぬって　不明。

(22) 栴闍婆羅門女　戦遮婆羅門女・旃柘摩那とも表記。『法顕伝』巻四・『大唐西域記』巻六・『大毘婆沙論』巻一七三、『興起行経』巻下などに見える。

(23) 多陀阿伽陀　tathāgata を tathā-āgata と tathā-gata に

分け、如来と如去の意があるとするものである。

(24) 阿羅呵　阿羅漢・阿羅訶・阿梨呵などと表記、単に羅漢とも称す。応供・真人・応真・殺賊・離悪などと訳される。

(25) 三藐三仏陀〈Samyak-sambuddha〉　三藐三菩提〈Samyak-sambodhi〉ともいう。仏十号の一。正遍知・等正覚・正等覚・正等正覚などと訳される。

(26) 出要　出離に同じ。輪廻の苦悩から脱すること、出離の要道。

(27) 鞞侈遮羅那三般那　仏十号の一。明行具足・明行足と訳される。

(28) 苦法忍・苦法智　八智・十六心の一。苦法忍は苦法智忍(duhkha-dharmajñāna-kṣānti)の略ともいう。見惑を断じた上の諸法の真理を証った法智、これを信じ疑わない智を苦法智忍と言う。

(29) 道比忍　道比は道類智に同じ。道類智忍に等し。八忍・十六心の一。欲界における道諦を縁じた後、上の色無色の二界における道諦を観じ得て認可決定する心。

(30) 修伽陀　修伽度とも表記する。仏十号の一。好去・好説・善逝と訳される。

(31) 路迦憊　路伽憊とも表記。仏十号の一。世間解・知世間と訳される。

(32) 阿耨多羅　無上・無答と訳される。阿耨多羅三藐三菩提と使われる。



(33) 富楼沙曇藐婆羅提　仏十号の一。調御丈夫・可化調御丈夫師と訳される。

(34) 軟美語　やわらかで美しいことば、やさしいことば。軟語に同じ。苦切語　せめさいなむことば、可責語。麁語ともいう。雑語　雑穢語ともいう。雑然としたかざりたてたことば。

(35) 二根　男根と女根。男女両性所有者。

(36) 無根　根欠。男根、女根のない男女。

(37) 舎多提婆魔瓮舎喃　仏十号の一。天人師・天人教師と訳される。天上界と人間界の導師という意。

(38) 摩醯首羅天　摩醯伊湿伐羅・摩醯湿伐羅とも表記。大自在天と訳される色界の頂上に位置する天神。シヴァ神の別名。

(39) 韋紐天　毘紐・韋粋・毘瑟紐・毘瑟笯とも表記。大自在天の別名。

(40) 鳩摩羅天　鳩摩羅伽天・拘摩羅天とも表記。童子天と訳される。初禅天の梵王名、大自在天の子といわれる。

(41) 婆伽婆　世尊と漢訳する。仏陀の尊称である。『四分律』巻第四二（T二二・八七一a）、『空竟一乗宝性論』巻第一（T三一・八二一b）

(42) 阿婆磨　等しいもののないほど勝れていること。仏陀の尊称である。

(43) 阿婆摩婆摩　等しいものがないほど勝れている。仏陀の尊称である。

(44) 路迦那他　世尊・導師と漢訳する。世界の保護者、世界の主の意である。
(45) 波羅伽　度彼岸と訳す。
(46) 婆檀陀　大徳と訳す。
(47) 尸梨伽那　厚徳と訳す。
(48) 悉達陀　「悉達多」とも書く。目的を達成する、義を成ずるの意で、釈尊が出家前の太子であった時の名である。
(49) 『放牛譬喩経』『仏説放牛経』（鳩摩羅什訳）のことで、以下に述べる放牛の十一種についてもこの経に記す（T二・五四六a―五四七b）。
(50) 乳・酪・酥　牛から乳を出し、これを精製して、乳味・酪味（乳を少し発酵させたもの、ヨーグルトのようなもの）・生酥（つくりたてのバター）・熟酥味（生酥を精製してつくったもの）・醍醐味（上等の味）に順次変化する五味をいう。五味は、『北本涅槃経』巻第一四 聖行品（T一二・四四九a）に述べられている。
(51) 放牛の人　牛を飼養する牧牛者のことをいう。
(52) 四違陀経　四種のヴェーダ聖典のこと。リグ・ヴェーダ（Ṛg-Veda）、サーマ・ヴェーダ（Sāma-Veda）、ヤジュル・ヴェーダ（Yajur-Veda）、アタルヴァ・ヴェーダ（Atharva-Veda）をいう。
(53) 円光身　仏や菩薩が頭頂のうしろから放つ円輪の光明。常に仏身から発している光で常光とも頂光とも後光ともいう。『観無量寿経』（T一二・三四三b）などに説く。
(54) 断（見）と常（見）　我が死後常住（永久不変）であるとするのが常見（有見）で、我が死後断絶するのが断見（無見）である。五見中の辺執見に当る。『別訳雑阿含経』巻第一〇（T二・四四四c）、『雑阿含経』巻三四（T二・二四五b）などに記す。
(55) 四念処　身・受・心・法の四を如実に観ずること。『中阿含経』巻第二十四（T一・八二b以下）、『雑阿含経』巻第二〇（T二・一四〇a）、『長阿含経』巻第三（T一・一六c）、『維摩経』（T一四・五四五c）などに説かれる。
(56) 原本では「諸」につくるが、「護」にしないと読めないので訂正する。
(57) 四信　『法華経』巻第六・分別功徳品には、仏在世時の弟子の信を四段階に分けた。(1)ただ仏の教を信ずるだけでまだ他人に向って説くことのできぬもの。(2)仏の教を言葉や意味の上から大体了解しうるもの。(3)自から深く了解して進んで他人のために説きうるもの。(4)了解した教法を自から観じて体得するものをいう。
(58) 「有為法」とは因縁によって生滅する現象界の一切の事物。種々の原因・条件によって生成された存在をいう。『大毘婆沙論』巻第二三（T二七・一一七b～c）などに説かれる。

「無為法」とは生滅変化を離れた常住絶対の状態。作用をもたないもの。因縁の支配を受けないニルヴァーナなど、輪廻から解脱した境地や縁起の理などいう。「不可説法」とは説き明かそうとしても説くことができない。

(59) 十四の難　十四無記ともいい、異教徒の提出した形而上学的な問題に対して、釈尊が何も答えられなかった十四の問題点をいう。『倶舎論』巻第一九（T二九・一〇三a～c）、同巻第一四（T二九・二五六c～二五七b）『箭喩経』（T一・八〇四a以下）。

(60) 神　には種々の意味があるが、ここでは、霊魂・たましいの意味である。

(61) 石女黄門　生命のない石の女性と、完全な男根を具えていない者のことで、何れも子供を生むことは不可能である。

(62) 四種答　四記答ともいう。他人の問に対して答える四種の方法をいう。(1)決定答また一向記、直ちに肯定する方法をいう。(2)解義答また分別記、問意を分別し、いくつかの場合に分けて答える方法をいう。(3)反問答また反問記、反問して問意を確かめて答える方法をいう。(4)置答また捨置記、答えるべきでないものに対しては、黙して答えない方法をいう。『倶舎論』巻第一九（T二九・一〇三a～c）、同巻第一四（T二九・二五六c～二五七b）にもある。

(63) 十力　仏に特有の十種の智力をいう。(1)処非処智力（道理にかなうことと、道理にかなわぬこと）。(2)業異熟智力（一つ一つ業因とその果報〔異熟〕との関係を如実に知る力）。(3)静慮解脱等持等至智力（四禅・八解脱・三三昧・八等至などの禅定を知る力）。(4)根上下智力（衆生の機根の上下優劣を知る力）。(5)種々勝解智力（衆生の種々の望みを知る力）。(6)種々界智力（衆生や諸法の本性を知る力）。(7)遍趣行智力（衆生が種々のところへおもむくことを知る力）。(8)宿住随念智力（自他の過去世のことを思い起こす力）。(9)死生智力（衆生がここに死んでかの所に生まれることを知る力）。(10)漏尽智力（煩悩を断じた境地と、それに到達するための手段を如実に知る力）をいう。『倶舎論』巻第二七（T二九・一四〇b）。詳しい説明は、『雑阿毘曇心論』巻第六（T二八・九二一b～九二二c）、『阿毘曇心論経』巻第四（T二八・八五五a～c）

(64) 頂生転輪王　インド神話において世界を統一し支配する帝王のことで、天から宝の輪を感得し、これを転がして四方を征服するといわれる。『華厳経』巻第五（T九・四二七c）、『十誦律』巻第三（T二三・一四c）、『法華経』巻第一（T九・二b）などに記す。

〔住王舍城―王舍城因縁〕

大智度初品中住王舍城釋論

第五卷第三

龍樹菩薩造

後秦龜茲國三藏法師鳩摩羅什

奉　詔譯

經住王舍城　論今當說。問曰。何以不直說般若波羅蜜法。而說佛住王舍城。答曰。說方時人。令人心生信故。云何名住。四種身儀坐臥行住是名住。又以怖魔軍衆。自令弟子歡喜入種種諸禪定故。在是中住。復次三種住。天住梵住聖住。六種欲天住法。是爲天住。梵天等乃至非有想非無想天住法。是名梵住。諸佛辟支佛阿羅漢住法。是名聖住。於是三住法中住聖住法。憐愍衆生故。住王舍城。復次布施持戒善心三事故名天住。慈悲喜捨四無量心故名梵住。空無相無作。是三三昧名聖住。聖住法佛於中住。復次四種住。天住・梵住・聖住・佛住。三住如前說。佛住者。首楞嚴等諸佛無量三昧・十力・四無所畏・十八不共法・一切智等種種諸慧。及八萬四

75 c

大智度初品中「王舍城に住したもう」の釈論　第五

經王舍城に住したもう。論今から説こう。問うていう。「どうして直ぐに般若波羅蜜の法を説かずに、仏が王舍城（Rājagṛha）に住したもう、を説くのか。」と。答えていう。「方（deśa）と時（kāla）と人（pudgala）とを説いて、人の心に信（śraddhā）を生じさせようとするためである。どうして住（vihāra）というのか。四種の身体の威儀（īryāpatha）がある。坐（niṣadana）と臥（śayyā）と行（gamana）と住（sthāna）とであるが、これを住という。また、魔軍の衆（mārasenā）を怖れ、自ずと弟子（śiṣya）を歓喜させ種々の諸の禅定（dhyāna）に入らせようとするから、この中に在って住されるのである。

また次に三種の住がある。天住（divyavihāra）・梵住（brāhma-v°）・聖住（ārya-v°）である。六種の欲天（kāmadeva）の住法、これを天住とし、梵天（Brahmā）等ないし非有想・非無想天（naivasaṁjñānāsaṁjñāyatana-deva）の住法、これを梵住と名づけ、諸仏（Buddha）・辟支仏（Pratyekabuddha）・阿羅漢（Arhat）の住法、これを聖住と名づ

千法藏度人門。如是等種種諸佛功德。是佛所住處。佛於中住。略說住竟。王舍城者。問曰。如舍婆提迦毘羅婆波羅榛大城。皆有諸王舍。何以故獨名此城爲王舍。答曰。有人言。是摩伽陀國王有子。一頭兩面四臂。時人以爲不祥。王卽裂其身首棄之曠野。羅刹女鬼。名梨羅。還合其身而乳養之。後大成人力能并兼諸國王。有天下取諸國王萬八千人。置此五山中。以大力勢治閻浮提。閻浮提人因名此山。爲王舍城。復次有人言。摩伽陀王先所住城。城中失火一燒一作。如是至七。國人疲役王大憂怖。集諸智人問其意故。有言宜應易處。王卽更求住處。見此五山周匝如城。卽作宮殿於中止住。以是故名王舍城。

---

76 a

ける。この三の住法の中において聖住の法に住し、衆生（sattva）を憐愍（anukampā）するから王舍城に住したもうのである。[3]

また次に布施（dāna）と持戒（śīla）と善心（kuśalacitta）との三事があるので天住と名づけ、慈（maitrī）と悲（karuṇā）と喜（muditā）と捨（upekṣā）との四無量心（apramāṇacitta）があるので梵住と名づけ、空（śūnyatā）と無相（animitta）と無作（apraṇihita）と、この三つの三昧（samādhi）を聖住と名づける。聖住の法に仏は（その）中に住されるのである。

また次に四種の住がある。天住・梵住・聖住・仏住[4]（buddhavihāra）である。三住は前に説いた通りである。仏住とは、首楞厳（śūraṁgama）等の諸仏の無量三昧、[5] 十力[6]（bala）・四無所畏（vaiśāradya）、十八不共法（āveṇikadharma）、一切智（sarvajñāna）等の種々の諸慧（prajñā）、及び八万四千の法蔵（dharmapiṭaka）は人を済度する門である。このような種々の諸仏の功德（guṇa）が仏の住する処である。仏は（これらの）中に住したもうのである。住について略説し竟った。

王舍城[7]について、問うていう。「舍婆提[8]（Śrāvastī）・迦毘羅（Kapilavastu）・波羅奈[9]（Vārāṇasī）大城のように皆、諸の王舍（rājagṛha）がある。どうゆうわけでひとりこの城を名づけて王舍といったのか。」と。答えていう。「ある人の言うことに、こ摩伽陀国王に子があり、（その子）は一つの頭で両つの面で四つの臂があった。時の人は不祥なことと思っ

〔王舎城因縁—婆藪王〕

復次往古世時。此國有王。名婆藪。心厭世法出家作仙人。是時居家婆羅門。與諸出家仙人共論議。居家婆羅門言。經書云。天祀中應殺生噉肉。諸出家仙人言。不應天祀中殺生噉肉。共諍云云。諸出家婆羅門言。此有大王出家作仙人。

た。王はそこでその身と首を裂き、これを曠野に棄てた。[10] 羅刹の女鬼(rākṣasī) は梨羅 (Līlā) といったがふたゝびその身を合わせて乳を飲ませ養育した。後に大きく成人し、（その）勢力は能く諸国の王を併合した。天下を有し諸国の王一万八千人をとらえて、この五山中に置き、大勢力でもって閻浮提 (Jambudvīpa) を治めた。閻浮提の人は、そこでこの山を名づけて王舎城としたのである。

また次にある人がいった。「摩伽陀王の先に住む所の城があった。城中に失火があり、一たび焼け一たび作り、このようにして七たびに至って、国の民は疲れはてた。王は大いに憂い怖れた。多くの知恵者 (paṇḍita) を集めて、その意味を問うた。ある（人が）言うに、よろしく処を易える(か)べきである、と。王はそこで更に住処を求めた。この五山を見ると周囲が城（壁）のようであった。すぐに宮殿 (rājakula) を作り、その中に止住した。このようなわけで王舎城と名づけたのである。

また次に往古の世の時にこの国に王がいて、婆藪[11] (Vasu) といった。心に世俗の法 (lokadharma) を厭い出家して仙人 (ṛṣi) となった。この時、家に居住していた婆羅門 (gṛhasthabrāhmaṇa) が諸の出家した仙人 (pravrajitaṛṣi) と共に論議した。家に居住していた婆羅門がいった。「経書に天祀 (devayajña) 〔天部の諸神を祠ること〕で生きものを殺し、肉を噉(く)らうべきであるといっている。」と。諸の出家した仙人がいった。「天

汝等信不。諸居家婆羅門言信。諸出家仙人言。我以此人爲證。後日當問。諸居家婆羅門。卽以其夜。先到婆藪仙人所。種種問已。語婆藪仙人。明日論議汝當助我。如是明旦論時。諸出家仙人問婆藪仙人。天祀中應殺生噉肉。諸出家仙人言。婆羅門法天祀中應殺生噉肉不。婆藪仙人言。於汝實心云何。應殺生噉肉不。婆藪仙人言。爲天祀故應殺生噉肉。此生在天祀中死故得生天上。諸出家仙人言。汝大不是。汝大妄語。卽唾之言。罪人滅去。是時婆藪仙人尋陷入地沒踝。是初開大罪門故。諸出家仙人言。汝應實語。若故妄語者。汝身當陷入地中。婆藪仙人言。我知爲天故殺羊噉肉無罪。卽復陷入地至膝。如是漸漸稍沒至腰至頸。諸出家仙人言。汝今妄語得現世報。更以實語者。雖入地下。我能出汝令得免罪。爾時婆藪仙人自思惟言。我貴重人不應兩種語。又婆羅門四圍陀法中。種種因緣讚祀天法。我一人死當何足計。一心言。應天祀中殺生噉肉無罪。諸出家仙人言。汝重罪人。催去不用見汝。於是擧身沒地中。從是以來乃至今

祀の中で生きものを殺し肉を噉らうべきではない。」と。共に諍って云々していた。諸の出家した婆羅門が言いました。「ここに大王で出家して仙人になった者がいる。お前達は、信ずるかどうか。」諸の家に居住していた婆羅門がいった。「信じよう。」と。諸の出家した仙人がいった。「私はこの人を証拠とし、後日に問おう。」と。諸の家に居住していた婆羅門は、
76 b
すぐにその夜、先ず婆藪仙人の所へ到(ゆ)き、種々に問い已り、婆藪仙人に語った。「明日の論議にあなたは、私を助けるべきである。」と。このようにして翌朝、論ずる時、諸の出家した仙人が婆藪仙人に問うていう。「天祀の中で生きものを殺し肉を噉らうべきかどうか。」と。婆藪仙人が言った。「婆羅門の法としては、天祀の中で生きものを殺し肉を噉らうべきである。」と。諸の出家した仙人が言った。「あなたの真実の心ではどうなるのか。生きものを殺し肉を噉らうべきかどうか。」と。婆藪仙人がいった。「天祀のためであるので生きものを殺し肉を噉らうべきである。この生は、天祀の中にあって死んだのであるから天上に生ずることができる。」と。諸の出家した仙人がいった。「あなたは、非常に正しくない。あなたは、大うそつきである。」と。すぐに唾を吐いていった。「罪人は滅び去れ。」と。この時、婆藪仙人は、尋(つ)いで地に陷(はま)入り、踝(くるぶし)を没した。これは、初めて大罪 (mahāpatti) の門を開いたからである。諸の出家した仙人がいった。「あなたは、真実を語るべきである。もし故意にうそをつけば、あなたの身体はきっと地中に陷(はま)入ってしまうであろう。」と。婆藪仙

日。常用婆藪仙人王法。於天祀中殺羊。當下刀時言婆藪殺汝。

〔王舎城因縁—廣車王〕

婆藪之子。名曰廣車。嗣位爲王。後亦厭世法而復不能出家。如是思惟。我父先王出家生入地中。若治天下復作大罪。我今當何以自處。如是

人がいった。「私は天神（deva）のための故に羊を殺し肉を噉（くら）っても無罪であることを知っている。」と。（すると）すぐにまた地に陥（はま）入り膝に達した。このようにして次第に少しずつ没し腰に達し頸に達した。諸の出家した仙人がいった。「あなたは、今、うそを言って現世の報を得たのである。更に真実を語れば、地下に入っても私が能くあなたを出して、罪を免がらせよう。」と。その時、婆藪仙人は自分で思惟していった。「私は身分が高く地位が重い者である。（虚実の）二種の語を使ってはならない。また婆羅門の四圍陀（Veda）の法の中に種々の因縁で天神を祀るを讃える法があり、私が一人死んでも、どうして充分に計ることができようか。」と。一心にしていった。「天祀の中で生きものを殺し肉を噉らっても無罪であるべきである。」と。諸の出家した仙人がいった。「あなたは重罪人である。去るをすゝめる。あなたを見たくない。」と。ここで全身が地中に没してしまった。これより以来、今日まで、常に婆藪仙人王の法を用いて、天祀の中において羊を殺すに、ちょうど刀を下す時に、「婆藪はおまえを殺す」と言うのである。

婆藪の子、名づけて広車（Vipularatha）といった。位を嗣いで王となった。後にまた世俗の法を厭ったがまた出家することができなかった。（そこで）このように思惟した。「わたしの父の先王は、出家して、生きながら地中に入ってしまった。もし天下を治めれば、また大罪をおかことにな

思惟時聞空中聲。言汝若行見難値希有處。汝應是中作舍住。作是語已便不復聞聲。未經幾時王出田獵。見有一鹿走疾如風。王便逐之而不可及。遂逐不止。百官侍從無能及者。轉前見有五山周匝峻固。其地平正生草細軟好華遍地。種種林木華果茂盛。溫泉涼池皆悉清淨其地莊嚴。處處有散天華天香聞天伎樂。爾時乾闥婆伎。適見王來各自還去。是處希有未曾所見。今我正當在是中作舍住。如是思惟已。群臣百官尋跡而到。王告諸臣。我前所聞空中聲言。汝行若見希有難値之處。汝應是中作舍住。我今見此希有之處。我應是中作舍住。卽捨本城於此山中住。是王初始在是中住。從是已後次第止住。是王元起造立宮舍故。名王舍城。略說王舍城本起竟。

---

ろう。私は、今、どのようにして自ら対処したらよいのか。」と。このように思惟した。時に空中に声を聞いた。「あなたは、もし行って値い難いほどの希有な居処を見たならば、あなたはこの中に舍屋を作って住すべきである。」といった。この語をいゝ已って、すぐにもはや声を聞ことはなかった。まだいくばくの時もへずして、王が出かけ狩猟して一匹の鹿が疾走すること風のようであるのを見た。王は、すぐにこれを逐ったが及ぶこと
76 c
ができなかった。かくて逐うことを止めなかった。百官や侍従は、よく及ぶ者がいなかった。轉ま目前に五山があった。周囲は倹峻堅固であった。その地は平らかで生い草は細く軟らかく美しい華が地に遍満していた。種々の林木や華果が繁茂していた。温かい泉や涼しい池は、すべてことごとく清浄でその地は荘厳であった。ところどころで天華（divyapuṣpa）や天香（divyagandha）が散じ、天の伎楽（aivyatūrya）が聞かれた。

その時、乾闥婆（Gandharva）の伎（女）は、適ま王が来たのを見て各自、かえり去った。「ここは、希有にしてまだ見たことのない所である。今、私は、きっとこの中に舍屋を作り住もう。」と、このように思惟し已った。群臣百官は、跡を尋ねて到着した。王が諸臣に告げた。「私が前に聞いた空中の声には、あなたが行って、もし希有にして値い難い処を見たならば、あなたはこの中に舍屋を作って住すべきである、といった。私は今、この希有の処を見た。私はきっとこの中に舍屋を作って住まおう。」と。ただちに本城を捨て、この山中に住した。この王は、初始めてこの中

〔耆闍崛山義〕

經 耆闍崛山中　論 耆闍名鷲。崛名頭。問曰。何以名鷲頭山。答曰。是山頂似鷲。王舍城人見其似鷲。故共傳言鷲頭山。因名之爲鷲頭山。復次王舍城南屍陀林中多諸死人。諸鷲常來噉之。還在山頭。時人遂名鷲頭山。是山於五山中最高大。多好林水聖人住處。

〔住王舍城—舍婆提城因緣〕

問曰。已知耆闍崛山義。佛何以故住王舍城。諸佛法普慈一切。如日照萬物無不蒙明。如漚祇尼大城富樓那跋檀大城阿藍車多羅大城弗迦羅婆多大城。如是等大城多人豐樂而不住。何故多住王舍城舍婆提大城。波羅奈迦毘羅婆瞻婆婆翅多拘

に住した。これより以後、次第に止住したのである。この王が元(はじ)めて宮舎を造立したので王舍城と名づけたのである。王舍城の本起を略説し畢った。

經 耆闍崛山[12] (Gṛdhrakūṭa-parvata) の中に、

論 耆闍 (gṛdhra) を鷲といって、崛 (kūṭa) を頭という。問うていう。「何故に鷲頭山というのか。」と。答えていう。「この山の頂きは鷲に似ている。王舍城 (Rājagṛha) の人はそれが鷲に似ているのをみて、そのために共に鷲頭山といい伝えている。そのようなことからこの山を鷲頭山と名づけている。またついで王舍城の南の屍陀林 (Śita-vana) の中に多くの諸々の死人がある。諸々の鷲が常に来て死人を噉(くら)って、山頂に還ってゆく。時の人はこうして鷲頭山と名づけたのである。この山は五山[13]の中で、最も高くて大きく、多く林水を好む聖人のとどまる処である。」と。

問ていう。「已に耆闍崛山の義(いみ)はわかったが、仏はどうゆうわけで、王舍城にとどまられたのか。諸仏の法は普く一切のものをいくつしむことは、日が萬物を照らして明(ひかり)をうけないものはないようなものである。（それなのに）漚祇尼 (ujjayanī) 大城・富楼那跋檀 (Pūrṇavardhana) 大城、阿藍車多羅 (Ahicchatra) 大城、弗迦羅波多 (Puṣkarāvati) 大城の如き、このような大城は人々多く豊楽(ゆたか)[14]であるのに、とどまられていない。

鞞睒鳩樓城等。雖有住時而多住王舍城舍婆提。云何知多住二處。見佛諸經多在二城說。少在餘城。答曰。佛雖大慈等及。以漚祇尼等諸大城是邊國故不住。又彌離車弊惡人多。善根未熟故。如偈說

如日光等照　華熟則時開
若華未應敷　則亦不强開
佛亦復如是　等心而說法
善根熟則敷　未熟則不開
以是故世尊　住三種人中
利智善根熟　結使煩惱薄

復次知恩故。多住王舍城舍婆提城。問曰。云何知恩故。多住二城。答曰。憍薩羅國是佛所生地。如佛答頻婆娑羅王偈說。

有好妙國土　在於雪山邊
豐樂多異寶　名曰憍薩羅
日種諸釋子　我在是中生
心厭老病死　出家求佛道

又是憍薩羅國主波斯匿王。住舍婆提大城中。佛爲法王亦住此城。二主應住一處故。復次是憍薩

---

何故に多く王舍城と舍婆提大城(15)(Śrāvasti)にとどまられ、波羅奈(Vārāṇasi)や迦毘羅婆(Karilavastu)や瞻婆(Campā)や婆翅多(Sāketa)や拘睒鞞(Kausāmbi)や鳩楼(Kuru)の城等にとどまる時はあっても、多く王舍城と舍婆提にとどまられたのか。どうして多く二処にとどまられたのが知られるのか。仏の諸々の経を見るに、(どうして)多く二城で説かれ、少ししか余かの城で(説かれない)。」と。

答えていう。「仏の大慈(mahāmaitri)は等しく及ぼすのであるけれども、漚祇尼等の諸々の大城は辺国であったから、とどまられなかったのである。又弥離車(16)(Mleccha)は弊悪て人々が多く、善根がまだ熟していなかったからである。偈に(次の)如く説いている。

77 a

あたかも日の光り等しく照らせども、
華熟るれば則ち時に開かれん、
もし華、いまだ敷かざりせば、
則ちまた強いても開かざらん。
仏もまたまたかくの如し、
等しき心(17)(samacitta)もて法を説けども、
善根熟るれば則ち敷き、
いまざ熟れざりせば則ち開かざらん。
これもちての故に世尊は、
三種の人の中の、

羅國佛生身地。知恩故多住舍婆提。問曰。若知恩故多住舍婆提者。迦毘羅婆城近佛生處何不多住。答曰。佛諸結盡無復餘習近諸親屬亦無異想。然釋種弟子多未離欲若近親屬則染著心生。問曰。何以不護舍婆提弟子。而多住舍婆提。答曰。迦毘羅婆弟子多。佛初還國。迦葉兄弟千比丘。本修婆羅門法。苦行山間形容憔悴。父王見之。以此諸比丘不足光飾。世尊卽選諸釋貴人子弟兼人少壯。戶遣一人强令出家。其中有善心樂道。有不樂者。此諸釋比丘不應令還本生處。舍婆提弟子輩不爾。以是故佛多住舍婆提。不多住迦毘羅婆。復次出家法應不近親屬。親屬心著如火如蛇。居家婆羅門子爲學問故。尙不應在生處。何況出家沙門。復次如舍婆提城大。迦毘羅婆不爾。舍婆提城九億家。是中若少時住者。不得度多人。以是故多住。復次迦毘羅婆城中佛生處。是中人已久習行善根熟利智慧。是中佛少時住說法。不須久住度已而去。舍婆提人。或初習行。或久習行。或善根熟。或善根未熟。或利根。或不利根。多學種種經書故研心令利。入種

利智（tīkṣṇajñāna）と善根の熟したる（paripakvakuśalamūla）と、結使（saṁyojana）・煩悩（kleśa）の薄なきものとにとどまりたもう。

また次いで恩を知っているから、多く王舍城と舍婆提城（舍衛城）にとどまられたのである。」と。

問ういう。「どうして恩を知っているから多く二城にとどまられたのか。」と。答えていう。「憍薩羅国（Kośala）はここ仏の生まれられた地である。仏が頻婆娑羅王（Bimbisāra）に答えられた偈に説いているとおりである。

好き妙えなる国土あり、
雪山の辺にありて、
豊楽にして異しき宝多く、
名は憍薩羅（Kośala）といえり。
日種[18]の諸の釈子ありて、
我れその中に生れたり、
心から老病死を厭い、
出家して仏道を求めたり。

又この憍薩羅国の主、波斯匿王（Prasenajit）は舍婆提大城の中に住し、仏は法主（dharmarāja）となって亦この城にとどまられた。二人の主がまさに一処にとどまられるべきであったからである。

種邪見網中。事種種師。屬種種天。雜行人多。以是故佛住此久。如治癰師知癰已熟。破出膿與藥而去。若癰未熟是則久住塗慰。佛亦如是。若弟子善根熟教化已更至餘處。若可度弟子善根未熟則須久住。佛出世間。正爲欲度衆生著涅槃境界安隱樂處故。是故多住舍婆提。不多住迦毘羅婆。佛於摩伽陀國尼連禪河側漚樓頻螺聚落得阿耨多羅三藐三菩提。成就法身故多住王舍城。

また次いでこの憍薩羅国は仏が身体をうけられた地である。恩を知るが故に多く舍婆提〔城〕にとどまられたのである」。

問うていう。「若し恩を知るが故に多く舍婆提〔城〕にとどまられたというならば、迦毘羅婆城は仏の生れられた処に近いのだ。どうして〔そこに〕多くとどまられなかったのか。」と。答えていう。「仏は諸々の結(bandha)が尽きてこれ以上余習(vāsanā)もないのである。諸々の親属(bandhu)に近ずいても、また異ったものであるという想い(nānātvasaṁjñā)もないのである。然し釈種の弟子にはまだ欲を離れていないものが多かった。若し親属に近づいたならば染著の心(saṅgacitta)が生ずるからである。」と。問うていう。「どうして舍婆提〔城〕の弟子を護らずして、多く舍婆提〔城〕にとどまられたのか。」と。答えていう。「迦毘羅婆〔城〕は弟子が多い。仏が初めて国に還られると、迦葉(Kāśyapa)兄弟、千の比丘(bhikṣu)は、もと婆羅門(brāhmaṇa)の法を修め山間に苦行し形容は憔悴していた。父王はこれを見られ、ここの諸々の比丘が世尊をじゅうぶん光飾(19)なかったからとして、即ぐに諸々の釈迦族の貴人の子弟で、兼えて人の少壮なものを選んで、戸ごとに一人を遣せて強いて出家させた。その中には善い心で道を楽しむものもいたが、楽しまないものもいた。〔そこで〕ここの諸々の釈〔迦族の〕比丘には本の生れた処に還らしめなかった。舍婆提〔城〕の弟子の輩にはそうでなかった。そのようなわけで、仏は多く舍婆提〔城〕にとどまられ、多く迦毘羅婆〔城〕にとど

77 b

まられなかったのである。

また次いで出家の法（pravrajitadharma）として親属（bandhusaṅga）に近ずいてはならなかった。親属は火の如く蛇の如く執著心があるからである。居家の婆羅門（gṛhasthabrāhmaṇa）の子が学問（śikṣā）をするためということでも、なお生れた処にいてはならなかった。まして出家した沙門（pravrajitaśramaṇa）はなおさらいてはならぬのである。

また次いで舎婆提城の如きものは大きいが、迦毘羅婆〔城〕はそうでない。舎婆提城は九億の家がある。その中で若し少かな時しかとどまらなかったならば多くの人を度することは出来ない。そのようなわけで多くとどまらなかったのである。

また次に迦毘羅婆城の中には仏の生まれられた処がある。その中の人々は已にながらく習行い善根が熟し（paripakvakuśalamūla）智慧が利か（tikṣṇaprajña）った。この中で仏は少かな時、とどまって説法され、ながらくとどまることを必要とせず、度しおわって去られたのである。舎婆提〔城〕の人は或いは初めて習行い或いはながらく習行い、或いは善根が熟し或いは善根が未熟であり、或いは利れた機根であったり或いは利れない機根であったり、多く種々の経書を学んでいるから、心を研ぎすまし利くなっており、種々の邪見の網（mithyādṛṣṭi-jāla）の中に入り、種々の師（acārya）につかえ、種々の天にしたがって雑行の人が多いのである。このようなわけで仏はここにながらくとどまられたのである。癰を治す師

〔王舎城多住義〕

問曰。已知多住王舎城舎婆提因縁。於此二城。何以多住王舎城。答曰。以報生地恩故。多住舎婆提。一切衆生皆念生地。如偈説。

一切論議師　自愛所知法
如人念生地　雖出家猶諍

以報法身地恩故。多住王舎城。諸佛皆愛法身

大智度論和訳（中祖・諏訪・大野・吉田）

が癰がすでに熟んでいるのがわかると、破って膿を出して薬を与えて去り、若し癰がまだ熟んでいないとここでそのままながらくとどまって塗り慰やすようなものである。仏もまた同様である。若し弟子の善根熟していれば教化しおわって、更にほかの処にゆくのである。若し度すべき弟子の善根がまだ熟していなければ、すなわちながらくとどまらねばならぬ。仏が世間に出られたのは、まさに衆生を渡し涅槃の境界（nirvāṇadhātu）、安隠（yogakṣema）の楽処（sukhavihāra）に著けようとされたがためである。この故に多く舎婆提〔城〕にとどまられ、多く迦毘羅婆〔城〕にとどまられなかったのである。

仏は摩伽陀国（Magadha）の尼連禅河（Nairañjanā）の側、漚楼頻螺（Uruvilvā）聚落で、阿耨多羅三藐三菩提（anuttarasamyaksaṁbodhi）を得られ法身（dharmakāya）を成就されたので、多く王舎城にとどまられたのである。

問う。「已に多く王舎城、舎婆提〔城〕にとどまられた因縁を知った。この二城のうち、どうして多く王舎城にとどまられたのか。」と。答えていった。「生れた土地の恩に報いようとして、多く舎婆提〔城〕にとどまられた。一切衆生は皆、生れた土地を念うのである。」と。偈に説くとおりである。

一切の論議の師（upadeśācārya）は

故。如偈說。

過去未來　　現在諸佛　　供養法身
師敬尊重

法身於生身勝故。二城中多住王舍城。復次以坐禪精舍多故。餘處無有。如竹園鞞婆羅跋恕薩多般那求呵因陀世羅求阿薩簸恕魂直迦鉢婆羅王舍城。有五精舍。竹園在平地。餘國無此多精舍。舍婆提一處。祇洹精舍更有一處。摩伽羅母堂更無第三處。婆羅奈斯國一處。鹿林中精舍名梨師槃陀那。毘耶離二處。一名摩呵槃。二名彌猴池岸精舍。鳩睒彌一處。名劬師羅園。如是諸國。或一處有精舍。或空樹林。以王舍城多精舍坐禪人所宜其處安隱故多住此。

---

自ら知れるところの法を愛す。

人の生まれし地を念い、
出家といえどもなお誇(いき)かうがごとし。

法身（dharmakāya）の地の恩に報いるために、多く王舍城にとどまられた。諸仏は皆、法身を愛されるからである。偈に説くとおりである。

過去と未来と、
現在との諸仏は、
法身に供養し、
師を敬い尊重す。

77 c

法身は生身（jannmakāya）に勝っているから、二城の中で多く王舍城にとどまられたのである。

また次いで坐禅の精舍（vihāra）が〔王舍城に〕多かったからである。ほかの処にはなかったのである。竹園[20]（Veṇuvana 鞞紐婆那）と鞞婆羅跋恕（Vaibhāravana 普広）と薩多般那求呵（Saptaparṇaguhā 車帝七葉窟）と因陀世羅求阿（Indaśailaguhā 帝釈窟）と薩簸恕魂直迦鉢婆羅（Sarpaśauṇḍikaprābhāra 蛇頭巌）の如く王舍城には五精舍があった。竹園は平地にあり。ほかの国にはこのような多くの精舍はなかった。舍婆提には一ヵ所、祇洹精舍[21]（Jetavanavihāra）があり、もう一ヵ所、麻伽羅母堂[22]（Mṛgāramātṛprāsāda〔鹿子母堂〕があるが、更に第三の所はない。波羅奈斯国（Vārāṇasī）には一ヵ所、鹿林（Mṛgadāva）中の精舍で

〔王舎城多住義—六師因縁〕

復次是中有富那羅等六師。自言。我是一切智人。與佛爲對。及長爪梵志婆蹉姓拘迦那大等。皆外道大論議師。及長者尸利崛多提婆達多阿闍貰等。是謀欲害佛不信佛法各懷嫉妬。有是人輩故佛多住此。譬如毒草生處近邊必有良藥。如偈說。

譬如師子　百獸之王　爲小蟲吼
爲衆所笑　若在虎狼　猛獸之中
奮迅大吼　智人所可
諸論議師如猛虎　在此衆中無所畏
大智慧人多見聞　在此衆中最第一

以是大智多聞人皆在王舎城故。佛多住王舎城。

大智度論和訳（中祖・諏訪・大野・吉田）

梨師槃陀那(23) (Ṛṣipatana) といった。毘耶離 (Vaiśālī) には二カ所、一つには摩訶槃(24) (Mahāvana 大林精舎) といい、二つには弥猴池岸(25)精舎 (Markaṭahradatīra-vihāra) といった。鳩睒弥 (Kauśāmbī) には、一カ所、劬師羅 (Kuśinagara) 園といった。このように諸国には或いは一カ所に精舎があり、或いは空しく樹林があっただけである。〔しかし〕王舎城には多くの精舎があり坐禅の人のよいところであって、そこは安隠であるので、多くここにとどまられたのである。

また次いでこの中には、富羅那 (Pūraṇakāśyapa) 等の六師(26)がいた。自ら言った。「わたしは一切智の人 (sarvajña) である。仏と対決しよう。」と。また長爪梵志 (Dīrghanakha)、婆蹉 (Vatsagotra 犢子部)—姓は拘迦那大 (Kokanada)—等の皆、外道 (tīrthika) の大論議の師 (mahopadeśācārya)、及び長者 (āyuṣmat) 尸利崛多 (Śrīgupta)、提婆達多 (Devadatta)、阿闍貰 (Ajātaśatru) らがいて、ここに仏を謀って害さんとし、仏法を信ぜず、各々が嫉妬 (īrṣyā) を懐いていた。このような人輩がいたので、仏は多くここにとどまられたのである。譬えば、毒草 (viṣa-
78 a
tṛṇa) の生えている処の近辺には必ず良薬 (oṣadhi) があるのと同じである。偈に説かれているとおりである。

譬えば師子 (siṁha) は、
百獣の王なれば、

〔王舎城多住義—頻婆娑羅王因縁〕
復次頻婆娑羅王。到伽耶祀舍中。迎佛及餘結髪千阿羅漢。是時佛爲王説法。得須陀洹道。即請佛言。願佛及僧就我王舍城。盡形壽受我衣被飲食臥具醫藥。給所當得。佛即受請。是故多住王舍城。

小さき虫のゆえに吼ゆれば、
みなに笑わる。
若し虎や狼の
猛けき獣の中にありて、
奮迅大吼すれば、
智人のよしとするが如し。
諸の論議の師は猛き虎の如く、
この衆中にありて畏るるところなし。
大智慧の人、多く見聞あれば、
かゝる衆中にありて最第一たり。

この大智多聞の人はみな王舎城にいるから仏は多く王舎城にとどまられたのである。

またついで頻婆娑羅王（Bimbisāra）は伽耶祀舎（Gayaśirṣa）の中にゆき、仏とその他の結髪した千人の阿羅漢（arhat）を迎えた。この時、仏は王のために説法して、〔王は〕須陀洹（srota-āpanna 初果）の道を得た。即ぐに仏に請うていった。「どうか、仏と僧伽（saṅgha）がわが王舎城にゆかれ、形寿が尽きるまで、私の衣被（cīvara）と飲食（āhāra）と臥具（śayanāsana）と医薬（bhaisajya）を受けられ、必要なものをさしお受けとりください。」と。

〔王舎城多住義—阿闍貰王因縁〕

復次閻浮提四方中。東方爲始。日初出故。次第南方西方北方。東方中摩伽陀國最勝。摩伽陀國中王舎城最勝。是中有十二億家。佛涅槃後。阿闍貰王以人民轉少故。捨王舎大城。其邊更作一小城。廣長一由旬。名波羅利弗多羅。猶尚於諸城中最大。何況本王舎城。

〔王舎城多住義—諸天得道因縁〕

復次是中人多聰明皆廣學多識。餘國無此。復次有人應得道者。待時待處待人。佛豫知釋提桓因及八萬諸天。應在摩伽陀國石室中得道。是故佛多住王舎城。

仏はすぐこの請いをうけられた。この故に多く王舎城にとどまられたのである。

また次いで閻浮提（Jambudvīpa）の四方の中で、東方を始めとする。日が初めに出るからである。〔それより〕南方、西方、北方と次第する。東方の中で摩伽陀国（Magadha）が最もすぐれている。摩伽陀国の中で王舎城が最もすぐれている。この中には十二億の家がある。仏が涅槃された後、阿闍貰王（Ajātaśatru）は人民がいささか少いので王舎大城を捨てられ、その辺に更に一小城を作られたのである。広長は一由旬（yojana）であった。波羅利弗多羅（Pāṭaliputra 華氏城）といった。〔この城は〕、それでも〔他の〕諸の城より最も大きい。まして本との王舎城はなおさらである。

また次いで、この中の人は多く聰明でみな広く学び多く識っている。ほかの国にはこれがない。

また次いで人のなかできっと得道しそうなものがあれば、時を待ち処を待ち人を待つのである。仏は釈提桓因[27]（Śakradevendra）及び八萬の諸天がまさに摩伽陀国の石室（śailaguhā）の中で道を得るのだということをあらかじめ知っておられた。その故に仏は多く王舎城にとどまられたのである。

〔王舍城多住義—頻婆娑羅王因縁〕

復次其國豐樂乞食易得。餘國不如。又以三因縁故。一者頻婆娑羅王約勅。宮中常作千比丘食。二者樹提伽。雖人中生常受天富樂。又多富貴諸優婆塞。三者阿波羅邏龍王。善心受化作佛弟子。除世飢饉故常降好雨。是故國豐。如佛涅槃後。長老摩呵迦葉欲集法思惟。何國豐樂乞食易得疾得集法。如是思已。憶王舍城中頻婆娑羅王約勅常設千比丘食。頻婆娑羅王雖死此法不斷。是中食易得易可集法。餘處無如是常供。若行乞食時諸外道來共論議。若共論議集法事廢。若不共論便言諸沙門不如我。如是思惟。擇取最上千阿羅漢。將就耆闍崛山集結經藏。以是三因縁。故知摩伽陀國乞食易得。如阿含及毘尼中說言。毘耶離國時時有飢餓。如降難陀婆難陀龍王兄弟經中說。舍婆提國飢餓。餘諸國亦時時有飢餓。摩伽陀國中無是事。以是故知。摩伽陀國豐樂乞食易得

---

また次いでその国は豊楽で乞食しても得やすく、ほかの国ではそうはいかない。また三つの因縁のゆえにある。一つは頻婆娑羅王が約勅じて宮中で常に千人の比丘の食をつくらせたこと、二つには樹提伽[28] (Jyotiṣka) は人中に生えているけれども常に天の富楽をうけて、又多くの富貴な諸々の優婆塞 (upāsaka) がいること、三つには阿波羅羅[29] (Apalāla) 龍王は善心 (kuśalacitta) で教化をうけて仏弟子となり世の飢饉 (durbhikṣa) をなくしようとして常に好い雨を降らせていたことである。その故に国は豊かであった。仏の涅槃の後の如きは長老の摩呵迦葉 (Mahākasyapa) が法を集めようとして思惟した。「何れの国が豊楽で乞食して得やすく、すみやかに法を集められるのか。」と。このように思惟しおわって、憶った。「王舍城の中の頻婆娑羅王は約勅じて常に千人の比丘の食を設らえた。頻婆娑羅王が死んでもこの法はとだえていない。この中では食事は得やすく法も集められ易い。ほかの処ではこのような平常の供養はない。若し乞食を行じた時、諸々の外道 (tīrthika) が来て共に論議をすることになろうが、若し共に論議をしたならば、法を集める事がなくなるであろう。若し共に論議をしなかったならば、すなわち諸々の沙門 (śramaṇa) は我に及ばないと言うであろう。」と。（仏は）このように思惟われ、最もすぐれた千人の阿羅漢 (arhat) を択び取られ、まさに耆闍崛山にゆき経蔵を結集しようとされた。この三つの因縁があったから、摩伽陀国は乞食して得や

78 b

〔王舎城多住義—坐禪因縁〕

復次王舎城在山中閑靜。餘國精舍平地故。多雜人入出來往易故不閑靜。又此山中多精舍。諸坐禪人諸聖人皆樂閑靜多得住中。佛是聖人坐禪人主。是故多住王舎城。如是等種種因縁故多住王舎城。問曰。若住王舎城可爾。何以不多住竹園而多住耆闍崛山。答曰。我已答。聖人坐禪人樂閑靜處。問曰。餘更有四山。鞞婆羅跋恕等。何以不多住。而多住耆闍崛山。答曰。耆闍崛山於五山中最勝故。云何勝。耆闍崛山精舍近城而山難上。以是故雜人不來。近城故乞食不疲。以是故佛多在耆闍崛山中。不在餘處。

すいことを知るのである。阿含（āgama）及び毘尼（vinaya）の中に説いていうとおり、毘耶離国には時々飢餓があった。降難陀婆難陀龍王兄弟経の中に説いているように、舎婆提国にも飢餓があり、ほかの諸の国でも亦、時々飢餓があった。〔しかし〕摩伽陀国の中ではこの事はなかった。このようなわけで摩伽陀国は豊楽で乞食して得やすいことを知るのである。

また次いで王舎城は山中にあって閑靜である。ほかの国の精舎は平地にあるから、多くの雑の人がた易く出たり入ったり行き来するから閑靜ではないのである。またこの山中には多くの精舎があって、諸の坐禪の人や諸の聖人が閑靜を楽しんで多くその中にとどまることが出来るのである。仏はこれら聖人や坐禪の人の主なのである。それ故に多く王舎城にとどまられたのである。このような種々の因縁があったから、多く王舎城にとどまられたのである。問うていう。「若し王舎城にとどまることがそのようなわけであるならば、どうして多く〔平地の〕竹園にとどまらず、多く耆闍崛山にとどまられたのか。」と。答えていう「我は已に聖人や坐禪の人は閑靜の処を楽しむと答えている。」と。

問うていう。「ほかに更に四山がある。鞞婆羅跋恕（Vaibhāravana）等にはどうして多くとどまらず、多く耆闍崛山（Gṛdhrakūta-parvata）にとどまられたのか」と。答えていう。「耆闍崛山は五山の中で最もすぐれているからである。どうしてすぐれているのか。耆闍崛山の精舎（vihā-

〔王舎城多住義—摩訶迦葉因縁〕

復次長老摩訶迦葉。於耆闍崛山。集三法藏。可度衆生度竟。欲隨佛入涅槃。清朝著衣持鉢入王舍城乞食已。上耆闍崛山語諸弟子。我今日入無餘涅槃。如是語已入房結加趺坐。諸無漏禪定自熏身。摩訶迦葉諸弟子。入王舍城語諸貴人。知不。尊者摩訶迦葉今日入無餘涅槃。諸貴人聞是語皆大愁憂言。佛已滅度。摩訶迦葉持護佛法。今日復欲入無餘涅槃。諸貴人諸比丘。晡時皆共集耆闍崛山。長老摩訶迦葉。晡時從禪定起入衆中坐。讚說無常。諸一切有爲法因縁生故無常。本無今有已有還無故無常。因縁生故無常。無常故苦。苦故無我。無我故有智者不應著我我所。若著我我所。得無量憂愁苦惱一切世間中。心應厭求離欲。如是種種說世界中苦。開導其心令入涅槃。說此語竟著從佛所得僧伽梨。持衣鉢捉杖。如金翅鳥現上昇虛空。四種身儀坐臥行住。

ra）は城に近く而も山には登り難い。それで雑の人は来ない。城に近いから乞食しても疲かれない。このようなわけで仏は多く耆闍崛山におられて、ほかの処におられなかったのである。」と。

また次いで長老の摩訶迦葉（Mahākāṣyapa）が耆闍崛山で三つの法蔵（dharmapiṭaka）を集めて、度すべき衆生を度しおわって、仏に随って涅槃に入られようとされた。清い朝に、衣をつけ鉢をもち王舎城に入って乞食しおわって、耆闍崛山に登って諸の弟子に語られた。「我は今日、無余涅槃（nirupadhiśeṣanirvāṇa）へ入ろうとする。」と。このように話しおわって房に入り結伽趺坐して諸の無漏の禅定（anāsravasamāpatti）にいり自ら身を熏じた。摩訶迦葉の諸の弟子は王舎城に入り諸の貴人に、「尊者摩訶迦葉が今日、無余涅槃に入られるが、知っておられか。」と語った。諸の貴人はこの語を聞いて皆、大いに愁しみ憂えて、「仏は已に滅度されたが、摩訶迦葉が仏の法を護持されていた。今日、また無余涅槃に入ろうとされる。」と言った。諸の貴人や諸の比丘は晡時に皆、共に耆闍崛山に集った。長老（sthavira）の摩訶迦葉は晡時で禅定から起って衆の中に入り坐られた。無常（anitya）を讃説られた。「諸の一切の有為法（saṁskṛtadharma）は因縁（pratityasamutpanna）より生ずるから無常なのであり、本無今有、已有還無[30]の故に無常であり、因縁より生ずるが故に無常であり、無常の故に苦であり、苦の故に無我であり、無我の故に有智の者

78 c

一身現無量身。滿東方世界。於無量身還爲一身。身上出火身下出水。身上出水身下出火。南西北方亦如是。衆心厭世皆歡喜已。於耆闍崛山頭。與衣鉢俱作是願言。令我身不壞。彌勒成佛。我是骨身還出。以此因緣度衆生。如是思惟已。直入山頭石內。如入軟塗。入已山還合。後人壽八萬四千歲。身長八十尺。時彌勒佛出。佛身長百六十尺。佛面二十四尺。圓光十里。

〔耆闍崛山多住義—彌勒佛因緣〕

是時衆生聞彌勒佛出世。無量人隨佛出家。佛在

(paṇḍita) は我(ātman)・我所(ātmīya)に執著してはならぬ。若し我・我所に執著したならば、無量の憂え愁しみ苦悩をうるであろう。一切の世間の中で心に厭うて離欲 (vairāgya) を求めるべきである。」と。このように種々に世界の中の苦を説きその心を開らき導き涅槃に入らせようとしたのである。〔摩訶迦葉は〕この語を説きおわって、仏よりたまわった僧伽梨 (saṁghāṭi) をつけ、衣鉢 (cīvara-pātra) をもち杖 (daṇḍa) をとり、金翅鳥 (garuḍa 迦楼羅) の如く現に虚空 (ākāśa) に上昇し、四種の身儀(31) (kāyeryāpatha) の坐臥行住し、一つの身で無量の身を現らわし、東方の世界をおおい、無量の身からまた一つの身となり、その身の上から火をはき、その身の下から水を出し、身の上から水を出し身の下から火を出した。南方、西方、北方〔の世界〕にもまたこのようにした。衆の心は世間を厭い、みな歓喜しおわった。〔摩訶迦葉は〕耆闍崛山の頭で衣鉢を共にしこの願をおこして言った。「わが身を壊ちないようにして、弥勒 (Maitreya) 成仏のとき、我は骨身が還って〔世に〕出で、この因縁をもって衆生を度そう。」と。このように思惟しおわって、直ちに山の頭の石の内に入った。軟らかい塗に入るようであった。入りおわって山はまた合じた。後、人寿八萬四千歲、身長八十尺の時、弥勒仏が出でられた。その仏の身長は百六十尺、仏の面二十四尺、円光は十里あった。

79 a

この時、衆生は弥勒仏が世に出でられたことを聞き、無量の人が〔弥

大衆中。初説法時九十九億人得阿羅漢道。六通具足。第二大會九十六億人得阿羅漢道。第三大會九十三億人得阿羅漢道。自是已後度無數人。爾時人民久後懈厭。彌勒佛見衆人如是。以足指扣開耆闍崛山。是時長老摩訶迦葉骨身。著僧伽梨而出禮彌勒足。上昇虚空現變如前。卽於空中滅身而般涅槃。爾時彌勒佛諸弟子怪而問言。此是何人。似人而小。身著法衣能作變化。彌勒佛言。此人是過去釋迦文尼佛弟子。名摩訶迦葉。行阿蘭若少欲知足。行頭陀比丘中第一。得六神通共解脱大阿羅漢。彼時人壽百年少出多滅。以是小身。能辨如是大事。汝等大身利根。云何不作如是功德。是時諸弟子皆慚愧發大厭心。彌勒佛隨衆心。爲説種種法。有人得阿羅漢阿那含斯陀含須陀洹。有種辟支佛善根。有得無生法忍不退菩薩。有得生天人中受種種福樂。以是故知。是耆闍崛山福德吉處。諸聖人喜住處。佛爲諸聖人主。是故佛多住耆闍崛山。

---

勒」仏に従って出家（pravrajita）した。（弥勒）仏が大衆の中にあって初説法の時、九十九億の人が阿羅漢の道を得て六通（abhijñā）が具足し、第二大会では九十六億の人が阿羅漢の道を得て、第三大会では九十三億の人が阿羅漢の道を得た。これより己後も無数の人を度した。その時、人民はながくたって懈厭（kusīda）がおこった。弥勒仏は衆の人がこのようであるのを見られ、足の指で耆闍崛山を扣き開かれた。この時、長老（sthavira）の摩訶迦葉は骨身に僧伽梨（saṁghāṭi）をつけて出で、弥勒の足に礼した。虚空（ākāśa）に上昇し変化（pariṇāma）を前の如く現わした。即ち空中で身を滅して般涅槃した。その時、弥勒仏の諸の弟子は怪やしんで問うていった。「これは何んな人か。人に似ているが小さい。身に法衣をきてよく変化する。」と。弥勒仏はいった。「この人は過去世の釈迦文尼仏の弟子で摩訶迦葉という。阿蘭若（araṇya）〔寂静処〕に行き少欲知足（saṁtuṣṭa）で頭陀[32]（dhūta）を行じ、比丘中の第一で、六神通を得た共解脱の大阿羅漢である。その時は人寿百年、少しく出でて多く滅じて、この小身でもって、よくこのような大事をはたした。汝らは大身で利根（tīkṣṇendriya）いるのに、どうしてこのような功徳をおこさぬのか。」と。この時、諸の弟子はみな慚愧して大いに（世間を）厭う心をおこした。弥勒仏は衆の心に随って種々の法を説かれた。ある人は阿羅漢（arhat）、阿那含（anāgāmin）、斯陀含（sakṛdāgāmin）、須陀含（srotāpanna）を得、あるものは辟支仏（pratyeka-buddha）の善根（ku-

〔耆闍崛山多住義—諸因縁〕

復次耆闍崛山。是過去未來現在諸佛住處。如富樓那彌帝隷耶尼子經中說。佛語富樓那。若使三千大千世界劫燒若更生。我常在此山中住。一切衆生以結使纏縛。不作見佛功德。以是故不見我。復次耆闍崛山清淨鮮潔。受三世佛及諸菩薩。更無如是處。是故多住耆闍崛山。復次諸摩訶衍經。多在耆闍崛山中說。餘處說少。何以故。是中淨潔有福德閑靜故。一切三世諸佛住處。十方諸菩薩。亦讚歎恭敬此處。諸天龍夜叉阿修羅伽留羅乾闥婆甄陀羅摩睺羅伽等大力衆神。守護供養恭敬是處。如偈說。

是耆闍崛山　　諸佛所住處
聖人所止息　　覆蔭一切故

大智度論和訳（中祖・諏訪・大野・吉田）

śalamūla）を種え、あるものは無生法忍（anutpattikadharmakṣānti）・不退（avaivartika 阿鞞跋致）の菩薩（bodhisattva）を得、あるものは天人（deva-manuṣya）の中に生まれるを得て種種の福と楽とを受けた。このようなことから、ここの耆闍崛山は福徳のある吉処で、諸の聖人（ārya）が喜んでとどまられる処であることを知るのである。仏は諸の聖人の主であるから、この故に仏は多く耆闍崛山にとどまられたのである。

79 b

また次いで耆闍崛山はこれ過去（atita）、未来（anāgata）、現在（pratyutpanna）の諸仏がとどまられる処である。富楼那弥帝隷耶尼子経[33]（Pūrṇamaitrayaṃīputra-sūtra）の中に説かれているとおりである。仏は富楼那（Pūrṇa）に、「若し三千大千世界（trisāhasramahāsāhasraloka-dhātu）を劫焼させても、若しくは更に生ぜさせても、我は常にこの山の中にとどまる。一切の衆生は結使（ぼんのう）が纏縛（まつわりつ）いている（samyojanāliṅgita）から仏を見る功徳（guṇa）をおこさないのである。このようなわけで我を見ないのである。」と語られている。

また次いで耆闍崛山は清浄で鮮潔であって、三世の仏及び諸菩薩を受けいれていて、更に〔ほかに〕このような処はないのである。この故に多く耆闍崛山にとどまったのである。

また次いで諸の摩訶衍経（Mahāyānasūtra）は多く耆闍崛山の中にあって説かれ、余（ほか）の処では説かれることが少いのである。どうしてか。この

衆苦得解脱　　唯有眞法存

復次是中十方無量智慧福德大力菩薩。常來見釋迦牟尼佛。禮拜恭敬聽法。故佛說諸摩訶衍經。多在耆闍崛山。諸摩訶衍經般若爲最大。今欲說故云何不住耆闍崛山。略說住耆闍崛山因緣竟。

---

中は清浄鮮潔で福と徳があり閑静なのだからである。一切の三世の諸仏がとどまられる処であり、十方の諸菩薩もまたこの処を讃歎し恭敬わっている。諸天（deva）、龍（nāga）、夜叉（yakṣa）、阿修羅（asura）、迦楼羅（garuḍa）、乾闥婆（gandharva）、甄陀羅（kiṁnara）、摩睺羅伽（mahoraga）等の大力の衆の神（がみ）がこの処を守護し供養し恭敬しているのである。偈に説いているとおりである。

ここ耆闍崛山は、
諸仏のとどまれる処にして、
聖き人の止息われるところ、
一切を覆蔭するが故、
衆の苦解脱するを得、
唯だ真法の存することあるのみ。

また次いでこの中に十方無量の智慧・福徳・大力の菩薩が常に来て釈迦牟尼仏を見たてまつり礼拝し恭敬して法を聴いた。その故に仏が諸の摩訶衍経を説かれたのは多く耆闍崛山であった。諸の摩訶衍経のうち般若〔経〕を最も大ものとする。今、説こうとするからには、どうして〔多く〕耆闍崛山にとどまれないであろうか。耆闍崛山にとどまられた因縁を略説しおわった。

〔註〕

(1) 三種の住、天住・梵住・聖住　『瑜伽論』には「由諸如来多住無上無等三住。謂聖住天住梵住。故名住最勝。当知此中空無願無相住及滅尽定住。是名聖住。四種静慮四無色定。是名天住。四種無量。是名梵住。於此三住中。如来多住四最勝住。謂於聖住中多住空住滅尽定住。於天住中多住無動第四静慮住。於梵住中多住大悲住。由是如来昼夜六時昼三夜三。常以仏眼観察世間」(T三〇・四九九b)

(2) 非有想非無想天　非想天ともいう。無色界の第四天、三界の最頂。時に色界の第四天である有頂天を指すこともある。また別に非有想非無想処・非想非非想処ともいう。禅定では非有想非無想定・非想非非想定。

(3) 善心　慚・愧の二法と無貪・無瞋、無痴の三根と相応して起こる一切の心・心所。
　なお菩薩の修道位において布施・持戒・博聞の三種無尽がある。

(4) 仏住　『三無性論』巻下に「八仏住者。謂仏不住生死不住涅槃。住無住処涅槃也」(T三一・八七四c～八七五a)とある。同書には「八住」を説き、その中「五聖住者。謂一切無流観也。六天住者。謂初禅至非想也。七梵住者。梵言無量。謂四無量定也」と示されている。

(5) 無量三昧　無量定に同じ。真諦訳『倶舎釈論』巻二一に「偈曰、無量定有四。釈曰。四無量定。謂慈悲喜捨無量。以無量衆生為境界故。感無量果報故。」(T二九・三〇一c～三〇二a)とある。

(6) 十力四無所畏、十八不共法　『倶舎論』巻二七に「且初成仏尽智位修不共仏法有十八種。何謂十八。頌曰。十八不共法謂仏十力等。論曰。仏十力四無畏三念住及大悲。如是合名為十八不共法。唯於諸尽智時修。余聖所無故名不共」(T二九・一四〇a～b)と示されるように十力・四無畏(四無所畏)・三念住・大悲を総合して十八不共法と称す説。他に仏と菩薩の十八不共法もある。
　本論で説く十力とは、発一切心堅固力・不捨衆生大慈力・具足大悲力・信一切仏法精進力・思行禅定力・除二辺智慧力・成熟衆生力・観法実相力・入三昧解脱門力・無礙智力を指し、一般で用いる華厳説と異なる。

(7) 王舎城　中インド、マカダ国の首都。現、ヴィハール州のラジギル。

(8) 舎婆提(城)　舎衛城ともいう。コーサラ国の都城。現、ゴンダ州サヘートマヘート。

(9) 婆波羅榛(城)　婆羅奈・波羅奈斯・波羅痆斯・波羅奈とも表記する。カーシー国の都城。現、ベナレス。

(10) 羅刹女鬼の梨羅　羅刹女鬼は羅刹私とも音写される。梨羅に関しては不明。

(11) 婆藪　婆叟とも。『菩薩善戒経』巻四に「菩薩摩訶薩終不教人張弶捕猟。亦不教人事婆藪天。自不殺羊祀祠天神。亦不教他殺羊祠天」（T三〇・九八〇a）とある。

(12) 耆闍崛山　摩揭陀国王舎城の東北に位す。〔大唐西域記、第九〕（摩伽国）宮城東北。行十四五里。至姑栗陀羅矩吒山。唐言鷲峯。亦謂鷲臺。舊曰。耆闍崛山訛也。接北山之陽。孤標特起。既棲鷲鳥。又類高臺。空翠相映。濃淡分色。如来御世。垂五十年。多居此山。広説妙法。……（T五一・九二一a）。『望月仏教辞典』第一巻、同項参照。『仏陀の足跡と思想』五六頁、九四頁以下参照。

(13) 五山　五精舎のある五山をさす。〔智度論、巻三〕如竹園、鞞婆羅跋恕・薩多般那求呵・因陀世羅求阿・薩簸如魂直迦鉢婆羅。王舎城、有五精舎。（T二五・七七c）

この五精舎について、王舎城五精舎説と五山五精舎説とがある。『望月仏教辞典』巻二、一二三〇頁、五精舎十塔参照。

(14) 豊楽　〔法華経・譬喩品〕国名離垢。其土平生。清浄厳飾。安隠豊楽。（T九・一一b）

(15) 舎婆提大城　舎衛城のこと。〔高僧法顕伝〕従此南行八由延。到拘薩羅国舎衛城。城内人民希曠。都有二百余家。即波斯匿王所治城也。大愛道故精舎処。須達長者井壁。及鴦掘魔得道般泥洹焼身処。後人起塔。皆在此城中。……（T五一・八六〇b）

『望月仏教辞典』第三巻、二一一五頁、項参照。『仏陀の足跡と思想』六二頁参照。

(16) 弥離車

(17) 等心　〔智度論・巻六〕等心、無有礙。（T二五・一〇六b）〔慧遠・無量寿経疏下〕次修精進。求善不息。名無厭怠。諸行斉修。故曰等心。（T三七・一一〇a）

(18) 日種　釈迦王族の祖、懿摩弥王（Ikṣvāk）をいい、甘蔗王と訳し、日種王、善生王ともいう。〔仏本行集経、第五〕又以日炙苷蔗出故。亦名日種。（T三・六七四b）、望月辞典、第一巻、一七一頁、懿摩弥王の項参照。〔大智度論、第八〕汝是日種刹利姓　浄飯国王之太子（T二五・一一四b）

(19) 光飾　〔法華経、見宝塔品〕此多宝仏　処於宝塔　常遊十方為是経故　亦復供養　諸来仏化　荘厳光飾　諸世界者　若説此経。（T九・三四a）

(20) 竹園　王舎城北方にあった園林の名称。『中本起経、巻上・度瓶沙王品』、『大唐西域記、第九』などでは長者迦蘭陀（Kalanda）の奉施とするが、『過去現在因果経、第四』では頻毗娑羅王の寄進とする。この竹園以下の五を総括して王舎城五精舎とする伝承は広く行なわれているが、『法華経文句、第一上』などでは竹園を除いて耆闍崛山を挙げていて一致しない。「鞞婆羅跋恕」以下は変らない。

(21) 祇洹精舎　祇樹給孤独園・祇園・祇樹・祇陀林など呼称が多

い。長者給孤独（Anātapiṇḍaka）の奉献した園林という意味である。舎衛城の南方に位置した精舎。舎衛城の須達（Sudatta）は孤独なものを憐れみ寄進・布施を好んだので給孤独長者の称をえたという。かれが祇陀太子所有の園林の譲渡を懇請して、それを手に入れ精舎を建立したことからこの称をえた。『中本起経、巻下』その他に多出する。

(22) 摩伽羅母堂　弥迦羅・弥佉羅などとも作る。鴦伽（Aṅga）の長者の娘であったが、仏の教化に遇って預流果を証した。父のすすめで分那婆陀那（Pūrṇavaddhana）に嫁して婚家の舅を仏に帰依させた。舅はこのことを喜んで「汝は吾が母なり」と語ったということから、鹿子母という呼称をえた。聰明にして浄信厚い女性としてその名を知られる。『中阿含経、第五十八』などに挙げられる。

(23) 梨師槃陀那　鹿野苑にある苦行者の集まるところという。鹿がそこに放し飼われていたことから鹿野苑といい、また仙人鹿野苑という。仏陀初輪法輪の地として有名である。

(24) 摩訶槃　摩訶婆那・摩訶槃那とも作る。毗舎離郊外の林で、ここに重閣講堂があって仏が説法をよく行なったところという。〔善見律毘婆沙、巻十〕大林中於高閣講堂者。此林無人種自然而生。従迦惟羅衛国連至雪山。故名大林。高閣講堂者。於大林作堂。堂形如雁子。一切具足。（T二四・七四三c）

(25) 弥猴池岸　弥猴室阿闌若窟のことと推定される。『雑阿含経、巻九』によれば、摩訶迦旃延この精舎に住まって婆羅門を教化したという。阿槃提国（Avanti）湿摩陀江の側にあった。（T二・六三b）

(26) 六師　仏陀の時代、中インドに勢力を有していた六人の外道をいう。その教説については『長阿含、第十七沙門果経』（T一・一〇七a以下）に詳しい。また宇井伯寿「六師外道研究」（『印哲研究』第二）に批評がある。

(27) 釈提桓因　帝釈天のこと。元来、ヴェーダの神格であるが仏教に採り入れられ忉利天すなわち三十三天の主とされたものである。

(28) 樹提伽　王舎城下の長者子。初め外道の尼乾陀を信教していたが仏陀の教寧に遇い仏弟子となる。『樹提伽経』（T一四・八二五）に詳しい。

(29) 阿波羅邏　阿波羅邏龍王の住する泉の名。龍神伝説として古くから知られていた模様で、『仏本行経』、『善見律毘婆沙』をはじめ多出するが、詳しい記述は『大唐西域記』烏伏那国の条にある。しかし、その位置については異伝があって一致しない。

(30) 本無今有、已有還無　一切の有為法は本来実在しないのであるが、因縁によって現存する。また已に有るものは因縁の消滅によって無に帰するの意。〔道行般若経、第五〕諸法無所従

生。為隨怛薩阿竭教。隨怛薩阿竭教是為本無。本無亦無所従来。亦無所従去。怛薩阿竭本無。諸法本無。（T八・四五三b）。その他『放光般若経』中の「本無品」等に多出する。

(31) 四種身儀　四威儀のこと。ひとの行動を四種に分類したもので、普通行・住・坐・臥の四つで一切の行動を含める。

(32) 頭陀　煩悩の垢を払い落し衣食住に貪りの心をもたず修行に専念すること。『十誦律』、『四分律』には「十二頭陀行」が挙げられるが、以下の十二種の行をいう。糞掃衣、但三衣・常乞食・不作余食・一坐食・空閑処・塚間坐・樹下坐・露地坐・随生・常坐不臥である。

(33) 富楼那弥帝隷耶尼子経　羅什訳「富楼那会」（T一一・四三四b以下）がこれに相当するか。しかし「若使三千大千世界劫熱若更生……」の文は見いだせない。